



Dell Data Protection | Encryption

Enterprise Edition 詳細インストールガイド v8.10.1



凡例

 **注意:** 注意アイコンは、指示に従わないと、ハードウェアの損傷やデータの損失を招く可能性があることを示します。

 **警告:** 警告アイコンは、物的損害、けが、または死亡の原因となる可能性があることを示します。

 **重要、メモ、ヒント、モバイル、またはビデオ:** 情報アイコンは、サポート情報を示します。

著作権 ©2016 Dell Inc. 無断転載を禁じます。 This product is protected by U.S. and international copyright and intellectual property laws. Dell and the Dell logo are trademarks of Dell Inc. in the United States and/or other jurisdictions. All other marks and names mentioned herein may be trademarks of their respective companies. Dell Data Protection | Encryption, Dell Data Protection | Endpoint Security Suite, Dell Data Protection | Endpoint Security Suite Enterprise, Dell Data Protection | Security Tools, and Dell Data Protection | Cloud Edition のスイートのドキュメントに使用されている登録商標および商標 (Dell™、DELL のロゴ、Dell Precision™、OptiPlex™、ControlVault™、Latitude™、XPS®、および KACE™) は、Dell Inc. の商標です。McAfee® と McAfee のロゴは、米国およびその他の国における McAfee, Inc. の登録商標です。Intel®、Pentium®、Intel Core Inside Duo®、Itanium®、および Xeon® は米国およびその他の国における Intel Corporation の登録商標です。Adobe®、Acrobat®、および Flash® は、Adobe Systems Incorporated の登録商標です。Authen Tec® および Eikon® は、Authen Tec の登録商標です。AMD® は、詳細設定 Micro Devices, Inc. の登録商標です。Microsoft®、Windows®、および Windows Server®、Internet Explorer®、MS-DOS®、Windows Vista®、MSN®、ActiveX®、Active Directory®、Access®、ActiveSync®、BitLocker®、BitLocker To Go®、Excel®、Hyper-V®、Silverlight®、Outlook®、PowerPoint®、Skydrive®、SQL Serve®、および Visual C++® は、米国および/またはその他の国における Microsoft Corporation の商標または登録商標です。VMware® は、米国およびその他の国における VMware, Inc. の登録商標または商標です。Box® は、Box の登録商標です。DropboxSM は、Dropbox, Inc. のサービスマークです。Google™、Android™、Google™ Chrome™、Gmail™、YouTube®、および Google™ Play は、米国およびその他の国における Google Inc. の商標または登録商標のいずれかです。Apple®、Aperture®、App StoreSM、Apple Remote Desktop™、Apple TV®、Boot Camp™、FileVault™、iCloud®SM、iPad®、iPhone®、iPhoto®、iTunes Music Store®、Macintosh®、Safari®、および Siri® は、米国またはその他の国あるいはその両方における Apple, Inc. のサービスマーク、商標、または登録商標です。GO ID®、RSA®、および SecurID® は、EMC Corporation の登録商標です。EnCase™ および Guidance Software® は、Guidance Software の商標または登録商標です。Entrust® は、米国およびその他の国における Entrust®, Inc. の登録商標です。InstallShield® は、米国、中国、欧州共同体、香港、日本、台湾、および英国における Flexera Software の登録商標です。Micron® および RealSSD® は、米国およびその他の国における Micron Technology, Inc. の登録商標です。Mozilla® Firefox® は、米国およびその他の国における Mozilla Foundation の登録商標です。IOS® は同社の商標または米国およびその他の特定の国で Cisco Systems, Inc. の登録商標であり、ライセンスに使用されます。Oracle® および Java® は、Oracle および/またはその関連会社の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標である場合があります。SAMSUNG™ は、米国およびその他の国における SAMSUNG の商標です。Seagate® は、米国および/またはその他の国における Seagate Technology LLC の登録商標です。Travelstar® は、米国およびその他の国における HGST, Inc. の登録商標です。UNIX® は、The Open Group の登録商標です。VALIDITY™ は、米国およびその他の国における Validity Sensors, Inc. の商標です。VeriSign® およびその他の関連商標は、米国およびその他の国における VeriSign, Inc. またはその関連会社あるいは子会社の商標または登録商標であり、Symantec Corporation にライセンス供与されています。KVM on IP® は、Video Products の登録商標です。Yahoo!® は、Yahoo! Inc. の登録商標ですこの製品は、7-Zip プログラムの一部を使用しています。このソースコードは、www.7-zip.org に掲載されています。ライセンス供与は、GNU LGPL ライセンス + unRAR 制限 (www.7-zip.org) の対象です。

Enterprise Edition 詳細インストールガイド

2016 - 09

Rev. A00

1 はじめに.....	7
作業を開始する前に.....	7
このガイドの使用方法.....	7
Dell ProSupport へのお問い合わせ.....	8
2 要件.....	9
すべてのクライアント.....	9
すべてのクライアント - 前提条件.....	9
すべてのクライアント - ハードウェア.....	10
すべてのクライアント - 言語サポート.....	10
Encryption クライアント.....	10
Encryption クライアントの前提条件.....	11
Encryption クライアントハードウェア.....	11
Encryption クライアントのオペレーティングシステム.....	11
外付けメディアシールド (EMS) のオペレーティングシステム.....	12
Server Encryption クライアント.....	12
Server Encryption クライアントの前提条件.....	14
Server Encryption クライアントのハードウェア.....	14
Server Encryption クライアントのオペレーティングシステム.....	14
外付けメディアシールド (EMS) のオペレーティングシステム.....	14
SED クライアント.....	15
OPAL ドライブ.....	16
SED クライアントの前提条件.....	16
OPAL 対応の SED.....	16
SED クライアントのオペレーティングシステム.....	16
国際キーボード.....	16
Advanced Authentication クライアント.....	17
Advanced Authentication クライアントハードウェア.....	17
Advanced Authentication クライアントのオペレーティングシステム.....	18
BitLocker Manager クライアント.....	19
BitLocker Manager クライアントの前提条件.....	19
BitLocker Manager クライアントのオペレーティングシステム.....	19
Cloud クライアント.....	19
Cloud Edition クライアント 23.....	20
クラウド同期クライアント.....	20
ウェブブラウザ.....	20
クラウド Edition クライアントオペレーティングシステム.....	21
認証オプション.....	21
暗号化クライアント.....	21
SED クライアント.....	22
BitLocker Manager.....	23
3 レジストリ設定.....	25

Encryption クライアントのレジストリ設定.....	25
SED クライアントのレジストリ設定.....	29
Advanced Authentication クライアントのレジストリ設定.....	30
BitLocker Manager クライアントのレジストリ設定.....	31
Cloud Edition クライアントのレジストリ設定.....	31
4 マスターインストーラを使用したインストール.....	32
マスターインストーラを使用した対話型のインストール.....	32
マスターインストーラを使用したコマンドラインによるインストール.....	33
5 マスターインストーラを使用したアンインストール.....	36
マスターインストーラのアンインストール.....	36
コマンドラインでのアンインストール.....	36
6 子インストーラを使用したインストール.....	37
Driver クライアントのインストール.....	38
コマンドラインでのインストール.....	38
Encryption クライアントのインストール.....	39
コマンドラインでのインストール.....	39
Server Encryption クライアントのインストール.....	40
Server Encryption の対話型インストール.....	41
コマンドラインを使用した Server Encryption のインストール.....	42
Server Encryption のアクティブ化.....	44
SED Management と Advanced Authentication クライアントのインストール.....	45
コマンドラインでのインストール.....	45
Cloud Edition のインストール.....	46
コマンドラインでのインストール.....	47
BitLocker Manager クライアントのインストール.....	47
コマンドラインでのインストール.....	47
7 子インストーラを使用したアンインストール.....	49
Encryption および Server Encryption クライアントのアンインストール.....	50
プロセス.....	50
コマンドラインでのアンインストール.....	50
External Media Edition のアンインストール.....	52
SED クライアントおよび Advanced Authentication クライアントのアンインストール.....	52
プロセス.....	52
PBA の非アクティブ化.....	52
SED クライアントおよび Advanced Authentication クライアントのアンインストール.....	53
BitLocker Manager クライアントのアンインストール.....	53
コマンドラインでのアンインストール.....	53
Cloud Edition のアンインストール.....	53
コマンドラインでのアンインストール.....	54
8 一般的なシナリオ.....	55
Encryption クライアント、、 および Advanced Authentication.....	56
SED クライアント (Advanced Authentication を含む) および External Media Shield.....	56



SED クライアント (Advanced Authentication を含む)、External Media Edition、および Cloud Edition.....	57
Encryption Client および Cloud Edition.....	57
BitLocker Manager および External Media Shield.....	58
BitLocker Manager、External Media Edition、および Cloud Edition.....	58
SED クライアント (Advanced Authentication を含む)、Encryption Client、および Cloud Edition.....	59
9 ソフトウェアをダウンロードします。.....	60
10 ワンタイムパスワード、SED UEFI、および BitLocker のための事前インストール設定.....	61
TPM の初期化.....	61
UEFI コンピュータ用の事前インストール設定.....	61
UEFI 起動前認証中におけるネットワーク接続の有効化.....	61
レガシーオプション ROM の無効化.....	61
BitLocker PBA パーティションを設定する事前インストール設定.....	62
11 ドメインコントローラでの GPO の設定による資格の有効化.....	63
12 マスターインストーラからの子インストーラの抽出.....	64
13 EE Server に対してアクティブ化した Encryption クライアントをアンインストールするための Key Server の設定.....	65
サービスパネル - ドメインアカウントのユーザーの追加.....	65
キーサーバーの設定ファイル - EE Server の通信のためのユーザーの追加.....	65
サンプル設定ファイル.....	66
サービスパネル - キーサーバーサービスの再起動.....	67
リモート管理コンソール - フォレンジック管理者の追加.....	67
14 Administrative Download Utility (CMGAd) の使用.....	68
フォレンジックモードでの Administrative Download Utility の使用.....	68
管理者モードでの Administrative Download Utility の使用.....	69
15 Server Encryption の設定.....	70
Server Encryption の有効化.....	70
アクティベーションログオンダイアログのカスタマイズ.....	70
Server Encryption EMS ポリシーの設定.....	71
暗号化されたサーバーインスタンスのサスペンド.....	71
16 Cloud Edition のためのサーバーの設定.....	73
Cloud Edition のための VE Server の設定.....	73
Cloud Edition のための EE Server の設定.....	73
クラウドストレージ保護プロバイダプロファイルの管理.....	74
ホワイトリストのユーザーの許可 / ブラックリストのユーザーの拒否.....	74
17 Dropbox for Business での Cloud Edition の使用.....	77
ビジネスおよび個人用アカウントのポリシー.....	77
ビジネスおよび個人用フォルダ.....	78
チームメンバーアカウントのリモートワイプ.....	78
レポートの実行.....	79



18	トラブルシューティング	80
	すべてのクライアントのトラブルシューティング	80
	Encryption および Server Encryption クライアントのトラブルシューティング	80
	Windows 10 Anniversary アップデートへのアップグレード	80
	サーバーオペレーティングシステム上でのアクティベーション	80
	(オプション) Encryption Removal Agent ログファイルの作成	83
	TSS バージョンの確認	83
	EMS と PCS の相互作用	83
	WSScan の使用	84
	WSProbe の使用	86
	Encryption Removal Agent ステータスのチェック	88
	SED クライアントのトラブルシューティング	88
	初期アクセスコードポリシーの使用	88
	トラブルシューティングのための PBA ログファイルの作成	89
	Dell ControlVault ドライバ	90
	Dell ControlVault ドライバおよびファームウェアのアップデート	90
	Cloud クライアント	91
	詳細画面の使用	91
	拡張症再画面の使用	91
	ログファイルの表示	92
	一時的なフォルダ管理権限の提供	92
	よくあるご質問 (FAQ)	92
	UEFI コンピュータ	93
	ネットワーク接続のトラブルシューティング	93
	TPM および BitLocker	93
	TPM および BitLocker のエラーコード	93
19	用語集	125



はじめに

本書では、暗号化クライアント、SED 管理クライアント、Advanced Authentication、BitLocker Manager、および Cloud Edition のインストールおよび設定方法について詳しく説明します。

すべてのポリシー情報とその説明は、AdminHelp にあります。

作業を開始する前に

1 クライアントを導入する前に、EE Server/VE Server をインストールします。次に示すように、正しいガイドを探し、記載されている手順に従った後、このガイドに戻ります。

- 『DDP Enterprise Server インストールおよびマイグレーションガイド』
- 『DDP Enterprise Server - Virtual Edition クイックスタートガイドおよびインストールガイド』

希望のポリシーを設定しているかを確認します。？のマークから AdminHelp を参照します。画面の右端にあります。AdminHelp はポリシーの設定および変更、EE Server/VE Server でのオプションを理解するのに役立つよう設計されたページヘルプです。

- 本書の「要件」の章をすべて読んでください。
- エンドユーザーにクライアントを導入します。

このガイドの使用方法

このガイドは次の順序で使用してください。

- クライアントの必要条件、コンピュータハードウェアおよびソフトウェア情報、制限事項、および機能で必要になる特殊なレジストリの変更については、「条件」を参照してください。
- 必要に応じて、「ワンタイムパスワード、SED UEFI、および BitLocker のための事前インストール設定」を参照してください。
- Dell デジタル Delivery (DDD) を使用して資格を取る場合は、「資格を有効にするためのドメインコントローラ上での GPO の設定」を参照してください。
- マスターインストーラを使用してクライアントをインストールする場合は、次を参照してください。
 - マスターインストーラを使用した対話型のインストール
 - または 内部接続ポートを編集... のいずれかをクリックします。
 - マスターインストーラを使用したコマンドラインによるインストール
- 子インストーラを使用してクライアントをインストールする場合、子インストーラの実行可能ファイルを マスターインストーラから抽出する必要があります。「マスターインストーラからの子インストーラの抽出」を参照して、ここに戻ります。
 - コマンドラインで子インストーラをインストールします。
 - ドライバクライアントのインストール - Trusted Platform Module (TPM) を搭載したコンピュータに Encryption クライアントをインストールするとき、またはデルハードウェアに Encryption クライアントをインストールするとき、これらの手順を使用します。
 - 暗号化クライアントのインストール - コンピュータがネットワークに接続していても、ネットワークから切断していても、紛失していても、盗難されていても、セキュリティポリシーを適用するコンポーネントである Encryption クライアントをインストールするには、これらの手順を使用します。
 - SED 管理および Advanced 認証クライアントのインストール - これらの手順を使用して SED を管理するための暗号化ソフトウェアをインストールします。SED は独自の暗号化を備えていますが、その暗号化およびポリシーを管理するため

のプラットフォームがありません。Sed 管理では、すべてのポリシー、ストレージ、お SED 管理を使用すると、すべてのポリシー、ストレージ、および暗号化キーの取得は、単一のコンソールから使用でき、紛失や不正なアクセスの場合にコンピュータが保護されないというリスクを軽減します。

Advanced Authentication クライアントは、SED 用の PBA、シングルサインオン (SSO)、指紋やパスワードなどのユーザー資格情報をはじめとする複数の認証方法を管理します。さらに、ウェブサイトおよびアプリケーションにアクセスするための Advanced Authentication 機能を提供します。

- ・ [Cloud Edition のインストール](#) - Cloud Edition クライアントをインストールするときにこれらの手順を使用します。Dropbox、ビジネス向け Dropbox、Box、OneDrive などのパブリッククラウドサーバーに保存されたときに、データは保護されます。データは、ファイルがクラウドへ、またはクラウドから移動するときに透過的に暗号化されます。
- ・ [BitLocker Manager クライアントのインストール](#) - BitLocker 展開のセキュリティを高め、所有コストを単純化および軽減するように設計されている、BitLocker Manager クライアントをインストールするときにこれらの手順を使用します。

① | メモ: ほとんどのクライアントインストーラは対話形式でインストールできますが、このガイドではインストーラについて記述していません。

- ・ 最も一般的なシナリオのスクリプトについては、「[一般的に使用されるシナリオ](#)」を参照してください。

Dell ProSupport へのお問い合わせ

Dell Data Protection 製品向けの 24 時間 365 日対応電話サポート (877-459-7304、内線 431003) に電話をかけてください。

さらに、dell.com/support で Dell Data Protection 製品のオンラインサポートもご利用いただけます。オンラインサポートでは、ドライバ、マニュアル、テクニカルアドバイザリー、よくあるご質問 (FAQ)、および緊急の問題を取り扱っています。

適切なサポート担当者に迅速におつなぎするためにも、お電話の際はお客様のサービスコードをご用意ください。

米国外の電話番号については、[Dell ProSupport の国際電話番号](#)をチェックしてください。

すべてのクライアント

次の要件はすべてのクライアントに適用されます。他のセクションで挙げられる要件は、特定のクライアントに適用されます。

- ・ 導入中は、IT ベストプラクティスに従う必要があります。これには、初期テスト向けの管理されたテスト環境や、ユーザーへの時間差導入が含まれますが、それらに限定されるものではありません。
- ・ インストール、アップグレード、アンインストールを実行するユーザーアカウントは、ローカルまたはドメイン管理者ユーザーである必要があります。これは、Microsoft SMS または Dell KACE などの導入ツールによって一時的に割り当てることができません。昇格された権限を持つ非管理者ユーザーはサポートされません。
- ・ インストールまたはアンインストールを開始する前に、重要なデータをすべてバックアップします。
- ・ インストール中は、外付け (USB) ドライブの挿入や取り外しを含め、コンピュータに変更を加えないでください。
- ・ マスターインストーラクライアントが Dell Digital Delivery (DDD) を使用して資格を得る場合は、アウトバウンドポート 443 が EE Server/VE Server と通信できるようにしてください。資格機能はポート 443 が (何らかの理由で) ブロックされている場合には機能しません。子インストーラを使用してインストールする場合、DDD は使用されません。
- ・ 必ず www.dell.com/support で、最新の文書およびテクニカルアドバイザリーを定期的に確認してください。

すべてのクライアント - 前提条件

- ・ Microsoft .Net Framework 4.5 (またはそれ以降) の完全バージョンは、マスターインストーラと子インストーラクライアントには必要です (Cloud Edition の子インストーラは除く。これは Microsoft .Net Framework 4.0 クライアントプロファイルのみ必要です)。インストーラは、Microsoft .Net Framework コンポーネントをインストールしません。

デルの工場から出荷されるすべてのコンピュータには、Microsoft .Net Framework 4.5 の完全バージョンが事前インストールされています。ただし、Dell ハードウェア上にインストールしていない、または旧型の Dell ハードウェア上でクライアントをアップグレードしている場合は、インストール/アップグレード失敗を防ぐため、クライアントをインストールする前に、インストールされている Microsoft .Net のバージョンを検証し、必要に応じてバージョンをアップグレードするようにしてください。インストールされている Microsoft .Net のバージョンを検証するには、インストール対象のコンピュータで [http://msdn.microsoft.com/en-us/library/hh925568\(v=vs.110\).aspx](http://msdn.microsoft.com/en-us/library/hh925568(v=vs.110).aspx) に記載されている手順を実行します。Microsoft .Net Framework 4.5 の完全バージョンをインストールするには、<https://www.microsoft.com/en-us/download/details.aspx?id=30653> に移動します。

- ・ Dell ControlVault、指紋リーダー、およびスマートカード (下記参照) のドライバとファームウェアは、マスターインストーラや子インストーラの実行可能ファイルには含まれていません。ドライバとファームウェアは最新の状態にしておく必要があります。これらは、<http://www.dell.com/support> から、お使いのコンピュータモデルを選択してダウンロードできます。認証ハードウェアに基づいて、適切なドライバとファームウェアをダウンロードします。

- ・ Dell ControlVault
- ・ NEXT Biometrics Fingerprint ドライバ
- ・ Validity Fingerprint Reader 495 ドライバ
- ・ O2Micro スマートカードドライバ

デル以外のハードウェアにインストールしている場合は、そのベンダーのウェブサイトからアップデート済みのドライバとファームウェアをダウンロードしてください。Dell ControlVault ドライバのインストール手順は、「[Dell ControlVault ドライバおよびファームウェアのアップデート](#)」に記載されています。



すべてのクライアント - ハードウェア

- 次の表に、サポートされているコンピュータハードウェアについて詳しく示します。

ハードウェア

- 最小限のハードウェア要件は、オペレーティングシステムの最小要件を満たしている必要があります。

すべてのクライアント - 言語サポート

- Encryption、Cloud Edition および BitLocker Manager クライアント、複数言語ユーザーインターフェース (MUI) に対応しており、次の言語をサポートします。

言語サポート

- EN - 英語
 - ES - スペイン語
 - FR - フランス語
 - IT - イタリア語
 - DE - ドイツ語
 - JA - 日本語
 - KO - 韓国語
 - PT-BR - ポルトガル語 (ブラジル)
 - PT-PT - ポルトガル語 (ポルトガル (イベリア))
- SED および Advanced Authentication のクライアントは、複数言語ユーザーインターフェイス (MUI) に対応しており、次の言語をサポートしています。ロシア語、繁体字中国語、または簡体字中国語では、UEFI モードおよび起動前認証はサポートされていません。

言語サポート

- EN - 英語
- FR - フランス語
- IT - イタリア語
- DE - ドイツ語
- ES - スペイン語
- JA - 日本語
- KO - 韓国語
- ZH-CN - 中国語 (簡体字)
- ZH-TW - 中国語 (繁体字)
- PT-BR - ポルトガル語 (ブラジル)
- PT-PT - ポルトガル語 (ポルトガル (イベリア))
- RU - ロシア語

Encryption クライアント

- クライアントコンピュータは、アクティブ化するためにネットワーク接続が必要です。
- 最初の暗号化にかかる時間を短縮するために、Windows ディスククリーンアップ ウィザードを実行して、一時ファイルおよびその他の不必要なデータを削除します。
- 最初の暗号化スリープ中にスリープモードをオフにして、誰も操作していないコンピュータがスリープ状態になるのを防ぎます。スリープ状態のコンピュータでは暗号化は行われません (復号化も行われません)。
- Encryption クライアントは、デュアルブート設定をサポートしていません。これは、もう一方のオペレーティングシステムのシステムファイルが暗号化され、その動作を妨げるおそれがあるためです。
- マスターインストーラでは、v8.0 より前のコンポーネントからのアップグレードはサポートされていません。マスターインストーラから子インストーラを抽出し、コンポーネントを個々にアップグレードします。抽出手順については、「[マスターインストーラからの子インストーラの抽出](#)」を参照してください。

- Encryption クライアントは監査モードをサポートするようになりました。監査モードは管理者がサードパーティの SCCM または類似した暗号化クライアントのソリューションを使用してではなく、企業と同じイメージの一部として、暗号化クライアントを展開することを可能にします。デフォルトで、有効化はイメージが完全に展開されるまで進みません。
- Encryption クライアントは、McAfee、Symantec クライアント、Kaspersky、および MalwareBytes を使用してテスト済みです。これらのアンチウイルスプロバイダに関しては、アンチウイルススキャンおよび暗号化における互換性を確保するために、ハードコーディングされた除外が設定されています。Encryption クライアントは、Microsoft Enhanced Mitigation Experience Toolkit でもテスト済みです。

リストにないアンチウイルスプロバイダが組織で使用されている場合は、KB 記事 [KB article SLN298707](#) を参照するか、[Dell ProSupport](#) にお問い合わせください。

- TPM は GPK を封印するために使用されます。したがって、Encryption クライアントを実行している場合は、クライアントコンピュータに新しいオペレーティングシステムをインストールする前に、BIOS で TPM をクリアする必要があります。
- インプレイスでのオペレーティングシステムのアップグレードは、Encryption クライアントがインストールされている場合ではサポートされていません。Encryption クライアントをアンインストールおよび復号化し、新しいオペレーティングシステムにアップグレードした後、Encryption クライアントを再度インストールしてください。

さらに、オペレーティングシステムの再インストールもサポートされていません。オペレーティングシステムを再インストールするには、ターゲットコンピュータをバックアップしてからそのコンピュータをワイプし、オペレーティングシステムをインストールした後、確立した回復手順に従って暗号化されたデータを回復してください。

Encryption クライアントの前提条件

- Microsoft Visual C++ 2012 更新プログラム 4 がコンピュータにまだインストールされていない場合は、マスターインストーラがこれをインストールします。**子インストーラを使用する場合は**、Encryption クライアントをインストールする前に、このコンポーネントをインストールする必要があります。

前提条件

- Visual C++ 2012 更新プログラム 4 以降再頒布可能パッケージ (x86 および x64)

Encryption クライアントハードウェア

- 次の表は、サポートされているハードウェアの詳細です。

オプションの組み込みハードウェア

- TPM 1.2 または 2.0

Encryption クライアントのオペレーティングシステム

- 次の表は、対応オペレーティングシステムの詳しい説明です。

Windows オペレーティングシステム (32 ビットと 64 ビット)

- Windows 7 SP0-SP1 : Enterprise、Professional、Ultimate
- アプリケーション互換テンプレートでの Windows Embedded Standard 7 (ハードウェア暗号化はサポートされていません)
- Windows 8 : Enterprise、Pro
- Windows 8.1 Update 0-1 : Enterprise Edition、Pro Edition
- Windows Embedded 8.1 Industry Enterprise (ハードウェア暗号化はサポートされていません)
- Windows 10 : Education、Enterprise、Pro
- VMWare Workstation 5.5 以降



- ① **メモ:** UEFI モードは、Windows 7、Windows Embedded Standard 7、または Windows Embedded 8.1 Industry Enterprise ではサポートされていません。

外付けメディアシールド (EMS) のオペレーティングシステム

- 次の表に、EMS によって保護されているメディアにアクセスする場合にサポートされるオペレーティングシステムの詳細を示します。

- ① **メモ:** EMS をホストするには、外部メディア上の約 **55MB** の空き容量に加えて、メディア上に暗号化対象の最大ファイルに等しい空き容量が必要です。

① **メモ:**

Windows XP は、EMS Explorer を使用する場合にのみサポートされています。

EMS で保護されたメディアにアクセスする場合にサポートされる Windows オペレーティングシステム (32 ビットと 64 ビット)

- Windows 7 SP0-SP1 : Enterprise、Professional、Ultimate、Home Premium
- Windows 8 : Enterprise、Pro、Consumer
- Windows 8.1 Update 0-1 : Enterprise Edition、Pro Edition
- Windows 10 : Education、Enterprise、Pro

EMS で保護されたメディアにアクセスする場合にサポートされる Mac オペレーティングシステム (64 ビットカーネル)

- Mac OS X Yosemite 10.10.5
- Mac OS X El Capitan 10.11.6
- macOS Sierra 10.12.0

Server Encryption クライアント

Server Encryption は、サーバーモードで動作しているコンピュータ、特にファイルサーバー上での使用を対象にしています。

- Server Encryption は、Dell Data Protection | Enterprise Edition および Dell Data Protection | Endpoint Security Suite Enterprise とのみ互換性があります。
- Server Encryption は次を提供します。

- ソフトウェアの暗号化は、Microsoft Windows Embedded 8.1 Industry Enterprise
- リムーバブルストレージ暗号化
- ポート制御

① **メモ:**

サーバーはポート制御をサポートしている必要があります。

サーバーポート制御システムポリシーは、例えば、USB デバイスによるサーバーの USB ポートへのアクセスおよび使用を制御することにより、保護対象サーバー上のリムーバブルメディアに影響します。USB ポートポリシーは外部 USB ポートに適用されます。内部 USB ポート機能は、USB ポートポリシーの影響を受けません。USB ポートポリシーが無効化されると、クライアント USB キーボードおよびマウスは機能しなくなり、このポリシーが適用される前にリモートデスクトップ接続がセットアップされない限り、ユーザーはコンピュータを使用することができなくなります。

Server Encryption は、次に対して使用します。

- ・ ローカルドライブを持つファイルサーバー
- ・ サーバーオペレーティングシステム、またはシンプルファイルサーバーとして非サーバーオペレーティングシステムを実行している仮想マシン (VM) ゲスト
- ・ サポートされている構成：
 - ・ RAID 5 または 10 ドライブ搭載のサーバー。RAID 0 (ストライピング) と RAID 1 (ミラーリング) は互いに独立してサポートされています。
 - ・ Multi TB RAID ドライブ搭載のサーバー
 - ・ コンピュータをシャットダウンせずに交換可能なドライブ搭載のサーバー
 - ・ Server Encryption は、McAfee VirusScan、Symantec クライアント、Kaspersky Anti-Virus、および MalwareBytes Anti-Malware との適合性が検証済みです。アンチウイルススキャンと暗号化間における非互換性を防ぐため、これらのアンチウイルスプロバイダに対するハードコーディングされた除外が設定されています。リストにないアンチウイルスプロバイダが組織で使用されている場合は、KB 記事 [SLN298707](#) を参照するか、[Dell ProSupport](#) にお問い合わせください。

非対応

Server Encryption は、次での使用は対象外です。

- ・ Dell Data Protection サーバー、または Dell Data Protection サーバー用のデータベースを実行しているサーバー
- ・ Server Encryption には、Dell Data Protection | Endpoint Security Suite、Dell Data Protection | Personal Edition、および Dell Data Protection | Security Tools との互換性はありません。
- ・ Server Encryption は、SED Management および BitLocker Manager クライアントではサポートされません。
- ・ Server Encryption との間の移行はサポートされていません。Dell Data Protection | External Media Edition から Server Encryption へのアップグレードでは、前の製品を完全にアンインストールしてから Server Encryption をインストールする必要があります。
- ・ VM ホスト (通常、VM ホストには複数の VM ゲストが含まれています。)
- ・ ドメインコントローラ
- ・ Exchange サーバー
- ・ データベース (SQL、Sybase、SharePoint、Oracle、MySQL、Exchange など) をホストしているサーバー
- ・ 次のいずれかのテクノロジーを使用しているサーバー
 - ・ Resilient File System
 - ・ Fluid File System
 - ・ Microsoft 記憶域
 - ・ SAN/NAS ネットワークストレージソリューション
 - ・ iSCSI 接続デバイス
 - ・ 重複排除ソフトウェア
 - ・ ハードウェア重複排除
 - ・ 分割された RAID (単一の RAID に複数のボリュームが存在)
 - ・ SED ドライブ (RAID および非 RAID)
 - ・ キオスク向けの自動ログオン (Windows OS 7、8/8.1)
 - ・ Microsoft Storage Server 2012
- ・ Server Encryption は、デュアルブート設定をサポートしていません。これは、もう一方のオペレーティングシステムのシステムファイルが暗号化され、その動作を妨げるおそれがあるためです。
- ・ インプレイスでのオペレーティングシステムのアップグレードは、Server Encryption ではサポートされていません。お使いのオペレーティングシステムをアップグレードするには、Server Encryption をアンインストールして復号化し、新しいオペレーティングシステムにアップグレードし、Server Encryption を再インストールします。

さらに、オペレーティングシステムの再インストールもサポートされていません。オペレーティングシステムの再インストールが必要な場合は、ターゲットコンピュータをバックアップしてからそのコンピュータをワイプし、オペレーティングシステムをインストールした後、回復手順に従って暗号化されたデータを回復してください。暗号化されたデータのリカバリの詳細については、『[Recovery Guide](#)』(リカバリガイド) を参照してください。



Server Encryption クライアントの前提条件

- Server Encryption クライアントをインストールする前に、このコンポーネントをインストールする必要があります。

前提条件

- Visual C++ 2012 更新プログラム 4 以降再頒布可能パッケージ (x86 および x64)

Server Encryption クライアントのハードウェア

最小限のハードウェア要件は、オペレーティングシステムの最小要件を満たしている必要があります。

Server Encryption クライアントのオペレーティングシステム

次の表は、対応オペレーティングシステムの詳しい説明です。

オペレーティングシステム (32 ビットと 64 ビット)

- Windows 7 SP0~SP1 : Home、Enterprise、Professional、Ultimate
- Windows 8.0 : Enterprise、Pro
- Windows 8.1~Windows 8.1 Update 1 : Enterprise Edition、Pro Edition
- Windows 10 : Education Edition、Enterprise Edition、Pro Edition

サポートされているサーバーオペレーティングシステム

- Windows Server 2008 SP2 : Standard Edition、Datacenter Edition (Hyper-V 有りおよび無し)、Enterprise Edition (Hyper-V 有りおよび無し)、Foundation Server Edition
- Windows Server 2008 R2 SP1 : Standard Edition、Datacenter Edition (Hyper-V 有りおよび無し)、Enterprise Edition (Hyper-V 有りおよび無し)、Foundation Edition、Webserver Edition
- Windows Server 2012 : Standard Edition、Essentials Edition、Foundation Edition、Datacenter Edition
- Windows Server 2012 R2 : Standard Edition、Essentials Edition、Foundation Edition、Datacenter Edition

UEFI モードがサポートされるオペレーティングシステム

- Windows 8 : Enterprise、Pro
- Windows 8.1~Windows 8.1 Update 1 : Enterprise Edition、Pro Edition
- Windows 10 : Education Edition、Enterprise Edition、Pro Edition

① **メモ:** サポートされる UEFI コンピュータでは、メインメニューから再起動を選択した後にコンピュータが再起動し、2つのログオン画面のいずれかが表示されます。表示されるログオン画面は、コンピュータプラットフォームアーキテクチャにおける違いによって決定します。

外付けメディアシールド (EMS) のオペレーティングシステム

次の表に、EMS によって保護されているメディアにアクセスする場合にサポートされるオペレーティングシステムの詳細を示します。

① **メモ:** EMS をホストするには、外部メディア上の約 **55MB** の空き容量に加えて、メディア上に暗号化対象の最大ファイルに等しい空き容量が必要です。

① **メモ:**

Windows XP は、EMS Explorer を使用する場合にのみサポートされています。

EMS で保護されたメディアにアクセスする場合にサポートされる Windows オペレーティングシステム (32 ビットと 64 ビット)

- ・ Windows 7 SP0-SP1 : Enterprise、Professional、Ultimate、Home Premium
- ・ Windows 8 : Enterprise、Pro、Consumer
- ・ Windows 8.1 Update 0-1 : Enterprise Edition、Pro Edition
- ・ Windows 10 : Education、Enterprise、Pro

サポートされているサーバーオペレーティングシステム

- ・ Windows Server 2008 SP1 以降
- ・ Windows Server 2012 R2

EMS で保護されたメディアにアクセスする場合にサポートされる Mac オペレーティングシステム (64 ビットカーネル)

- ・ OS X Mavericks 10.9.5
- ・ OS X Yosemite 10.10.5
- ・ OS X El Capitan 10.11.4 および 10.11.5

SED クライアント

- ・ SED 管理を正しくインストールするには、コンピュータに有線ネットワーク接続が必要です。
- ・ IPv6 はサポートされていません。
- ・ ポリシーを適用し、ポリシーの実施を開始できる状態になったら、コンピュータをシャットダウンして再起動する準備を整えます。
- ・ 自己暗号化ドライブが搭載されているコンピュータでは HCA カードを使用できません。HCA のプロビジョニングを妨げる非互換性が存在します。デルでは、HCA モジュールをサポートする自己暗号化ドライブを用いたコンピュータの販売を行っていません。この非対応構成は、アフターマーケット構成となります。
- ・ 暗号化の対象となるコンピュータに自己暗号化ドライブが搭載されている場合、Active Directory オプションのユーザーは次回のログオン時にパスワードの変更が必要が無効になっていることを確認します。起動前認証は、この Active Directory オプションをサポートしていません。
- ・ デルでは、PBA がアクティブ化された後で認証方法を変更しないことをお勧めしています。別の認証方法に切り替える必要がある場合は、次のいずれかの操作を行う必要があります。

- ・ PBA からすべてのユーザーを削除します。

または

- ・ PBA を非アクティブ化し、認証方法を変更した後、PBA を再度アクティブ化します。

① **重要:** RAID と SED の性質により、SED 管理では RAID はサポートされません。SED の RAID=On には、RAID では、ディスクにアクセスして、SED がロック状態のために利用できない上位セクタの RAID 関連データを読み書きする必要があり、ユーザーがログオンするまで待機してこのデータを読み取ることができないという問題があります。この問題を解決するには、BIOS で SATA の動作を RAID=On から AHCI に変更します。オペレーティングシステムに AHCI コントロールドライバがプレインストールされていない場合は、RAID=On から AHCI に切り替えるときにオペレーティングシステムがブルースクリーンになります。

- ・ SED 管理は、Server Encryption ではサポートされません。



OPAL ドライバ

- サポートされている OPAL 準拠の SED には、<http://www.dell.com/support> にあるアップデートされた Intel Rapid Storage Technology ドライバが必要です。

SED クライアントの前提条件

- Microsoft Visual C++2010 SP1 および Microsoft Visual C++ 2012 更新プログラム 4 がコンピュータにまだインストールされていない場合、マスターインストーラがこれらのプログラムをインストールします。子インストーラを使用する場合は、SED 管理をインストールする前に、これらのコンポーネントをインストールする必要があります。

前提条件

- Visual C++ 2010 SP1 以降再頒布可能パッケージ (x86 および x64)
- Visual C++ 2012 更新プログラム 4 以降再頒布可能パッケージ (x86 および x64)

OPAL 対応の SED

- SED 管理 でサポートされている Opal 準拠 SED の最新のリストについては、KB 記事「<http://www.dell.com/support/article/us/en/19/SLN296720>」を参照してください。

SED クライアントのオペレーティングシステム

- 次の表は、対応オペレーティングシステムの詳しい説明です。

Windows オペレーティングシステム (32 ビットと 64 ビット)

- Windows 7 SP0-SP1: Enterprise、Professional (レガシー起動モードではサポートされていますが、UEFI ではサポートされていません)

① | **メモ:** Legacy ブートモードは **Windows 7** でサポートされています。Windows 7 では UEFI はサポートされていません。

- Windows 8 : Enterprise、Pro
- Windows 8.1 : Enterprise Edition、Pro Edition
- Windows 10 : Education、Enterprise、Pro

国際キーボード

- 次の表は、起動前認証でサポートされている国際キーボードのリストです。

① | **メモ:** これらのキーボードは、UEFI でのみサポートされます。

国際キーボードのサポート - UEFI

- DE-CH - ドイツ語 (スイス)
- DE-FR - フランス語 (スイス)

Advanced Authentication クライアント

- Advanced Authentication を使用する場合、ユーザーは、Dell Data Protection | Security Tools で管理および登録されている高機能認証資格情報を使用して、コンピュータへのアクセスをセキュア化します。Security Tools は、Windows パスワード、指紋、スマートカードなど、Windows サインイン用の認証資格情報のプライマリマネージャになります。Microsoft オペレーティングシステムを使用して登録されている画像パスワード、PIN、および指紋資格情報は、Windows サインインでは認識されません。

ユーザー資格情報の管理に引き続き Microsoft オペレーティングシステムを使用するには、Security Tools Authentication をインストールしないでください。インストールした場合はアンインストールしてください。

- ワンタイムパスワード (OTP) 機能には、TPM が存在し、有効化され、所有されている必要があります。OTP は TPM 2.0 でサポートされていません。TPM の所有権をクリアし、設定するには、<https://technet.microsoft.com> を参照してください。
- SED は、高度な認証または暗号化を提供するために TPM を必要としません。

Advanced Authentication クライアントハードウェア

- 次の表に、サポートされる認証ハードウェアについて詳しく示します。

指紋およびスマートカードリーダー

- セキュアモードの Validity VFS495
- Dell ControlVault Swipe Reader
- UPEK TCS1 FIPS 201 Secure Reader 1.6.3.379
- Authentec Eikon および Eikon To Go USB Reader

非接触型カード

- 指定された Dell ノートブックに内蔵された非接触型カードリーダーを使用する非接触型カード

スマートカード

- ActivIdentity クライアントを使用した PKCS #11 スマートカード

📌 | メモ: ActivIdentity クライアントは事前にロードされていないため、別途インストールする必要があります。

- CSP カード
- 共通アクセスカード (CAC)
- クラス B/SIPR ネットカード

- 次の表は、SIPR ネットカードでサポートされている Dell コンピュータモデルの詳細を説明しています。

Dell コンピュータモデル - クラス B/SIPR Net カードサポート

- | | | |
|----------------|-----------------|----------------------------|
| Latitude E6440 | Precision M2800 | Latitude 14 Rugged Extreme |
| Latitude E6540 | Precision M4800 | Latitude 12 Rugged Extreme |
| | Precision M6800 | Latitude 14 Rugged |

- 次の表は、UEFI でサポートされている Dell コンピュータモデルの詳細を説明しています。

Dell コンピュータモデル - UEFI サポート

- | | | | |
|----------------|-----------------|--|------------------------------|
| Latitude 7370 | Precision M3510 | Optiplex 3040 Micro、Mini Tower、Small Form Factor | Venue Pro 11 (モデル 5175/5179) |
| Latitude E5270 | Precision M4800 | Optiplex 3046 | Venue Pro 11 (モデル 7139) |
| Latitude E5470 | Precision M5510 | Optiplex 5040 Mini Tower、Small Form Factor | |
| Latitude E5570 | Precision M6800 | OptiPlex 7020 | |
| Latitude E7240 | Precision M7510 | | |
| | Precision M7710 | | |



Dell コンピュータモデル - UEFI サポート

- Latitude E7250
- Latitude E7270
- Latitude E7275
- Latitude E7350
- Latitude E7440
- Latitude E7450
- Latitude E7470
- Latitude 12 Rugged Extreme
- Latitude 12 Rugged Tablet (モデル 7202)
- Latitude 14 Rugged Extreme
- Latitude 14 Rugged
- Precision T3420
- Precision T3620
- Precision T7810
- Optiplex 7040 Micro、Mini Tower、Small Form Factor
- Optiplex 3240 All-In-One
- Optiplex 7440 All-In-One
- OptiPlex 9020 Micro

① **メモ:** 認証機能は、適格な **OPAL Compliant SED** を搭載した、**Windows 8**、**Windows 8.1**、および **Windows 10** を実行するコンピュータにおいて、**UEFI** モードでサポートされます。レガシーブートモードは **Windows 7**、**Windows 8**、**Windows 8.1**、および **Windows 10** を実行しているその他のコンピュータでサポートされています。

Advanced Authentication クライアントのオペレーティングシステム

Windows オペレーティングシステム

- 次の表では、対応オペレーティングシステムが詳しく説明されています。

Windows オペレーティングシステム (32 ビットと 64 ビット)

- Windows 7 SP0-SP1: Enterprise、Professional、Ultimate
- Windows 8: Enterprise、Pro
- Windows 8.1 Update 0-1: Enterprise Edition、Pro Edition
- Windows 10: Education、Enterprise、Pro

① **メモ:** **Windows 7** では **UEFI** モードはサポートされていません。

モバイルデバイスオペレーティングシステム

- 次のモバイルオペレーティングシステムは、Security Tools ワンタイムパスワード機能対応です。

Android オペレーティングシステム

- 4.0~4.0.4 Ice Cream Sandwich
- 4.1~4.3.1 Jelly Bean
- 4.4~4.4.4 KitKat
- 5.0~5.1.1 Lollipop

iOS オペレーティングシステム

- iOS 7.x
- iOS 8.x

Windows Phone オペレーティングシステム

- Windows Phone 8.1

- Windows 10 Mobile

BitLocker Manager クライアント

- BitLocker がまだお使いの環境に導入されていない場合は、「[Microsoft BitLocker の要件](#)」を確認してください。
- PBA パーティションがすでに設定されていることを確認します。PBA パーティションを設定する前に BitLocker Manager がインストールされている場合は、BitLocker を有効にできないため、BitLocker Manager は動作しません。「[BitLocker PBA パーティションを設定するブレイクインストール構成](#)」を参照してください。
- キーボード、マウス、およびビデオコンポーネントは、コンピュータに直接接続する必要があります。周辺機器の管理に KVM スイッチは使用しないでください。KVM スイッチは、ハードウェアを正しく識別するコンピュータの機能を阻害するおそれがあるためです。
- TPM をオンにして有効にします。BitLocker Manager は TPM の所有権を取得しますが、再起動の必要はありません。ただし、TPM の所有権がすでに存在する場合は、暗号化セットアップ処理が開始されます。再起動する必要はありません。ここでのポイントは、TPM が「所有」され有効化される必要があるという点です。
- FIPS モードが GPO セキュリティ設定「システム暗号化: 暗号化、ハッシュ、署名に FIPS 対応のアルゴリズムを使用」で有効になった場合、BitLocker Manager クライアントは、認定した AES FIPS が検証したアルゴリズムを使用するので、製品を介してそのデバイスを管理します。現在 Microsoft では、アプリケーション互換性、回復、およびメディア暗号化における多数の問題のために FIPS 検証済みアルゴリズムを使用しないことをカスタマーに勧めていることから、当社でもこのモードを BitLocker 暗号化クライアントのデフォルトとして設定することを必須とはしていません: <http://blogs.technet.com>。
- BitLocker Manager は、Server Encryption ではサポートされません。

BitLocker Manager クライアントの前提条件

- Microsoft Visual C++ 2010 SP1 および Microsoft Visual C++ 2012 更新プログラム 4 がコンピュータにまだインストールされていない場合、マスターインストーラがこれらのプログラムをインストールします。子インストーラを使用する場合は、BitLocker Manager をインストールする前に、これらのコンポーネントをインストールする必要があります。

前提条件

- Visual C++ 2010 SP1 以降再頒布可能パッケージ (x86 および x64)
- Visual C++ 2012 更新プログラム 4 以降再頒布可能パッケージ (x86 および x64)

BitLocker Manager クライアントのオペレーティングシステム

- 次の表では、対応オペレーティングシステムが詳しく説明されています。

Windows オペレーティングシステム

- Windows 7 SP0-SP1: Enterprise、Ultimate (32 ビットと 64 ビット)
- Windows 8: Enterprise (64 ビット)
- Windows 8.1: Enterprise Edition、Pro Edition (64 ビット)
- Windows 10: Education、Enterprise、Pro
- Windows Server 2008 R2: Standard Edition、Enterprise Edition (64 ビット)

Cloud クライアント

- Cloud Edition は、Microsoft Office 365 ではサポートされていません。
- コンピュータでは、1 つ (文字値) の割り当て可能なディスクドライブを利用できる必要があります。
- ターゲットデバイスが <https://yoursecurityservername.domain.com:8443/cloudweb/register> および <https://yoursecurityservername.domain.com:8443/cloudweb> にアクセスできることを確認します。



- Cloud Edition の導入前は、ターゲットデバイスでクラウドストレージアカウントのセットアップが行われていない状態にしておくことが最善です。

ユーザーが既存のアカウントを保持する場合は必要があります確認しているファイルがが状態を維持し、暗号化が移動され、同期クライアントからログアウト Cloud Edition をインストールする前にします。

- ユーザーは、クライアントをインストールした後に、コンピュータを再起動する必要があります。
- Cloud Edition は、同期クライアントの動作と競合しません。したがって、管理者とエンドユーザーは、Cloud Edition を導入する前に、これらのアプリケーションの動作を理解しておく必要があります。詳細については、を参照してください] ボックスのサポートで <https://support.box.com/home>、Dropbox support に <https://www.dropbox.com/help>、または OneDrive support に <http://windows.microsoft.com/en-us/onedrive/onedrive-help#onedrive=other>..
- IPv6 はサポートされていません。

Cloud Edition クライアント 23

- マスターインストーラには Microsoft .Net Framework 4.0 クライアントプロファイルおよび Microsoft Visual C++ をコンピュータにすでにインストールされていない場合は、2010 (SP1) をインストールします。子インストーラを使用する場合は、Cloud Edition をインストールする前に、これらのコンポーネントをインストールする必要があります。

前提条件

- .Net Framework 4.0 Client Profile
- Visual C++ 2010 SP1 再頒布可能パッケージ (x86 および x64)

クラウド同期クライアント

- 次の表に、Cloud Edition のクラウド同期クライアントの詳細を示します。同期クライアントのアップデートは頻繁にリリースされるので、実稼動環境に導入する前に、Cloud Edition で新しい同期クライアントバージョンをテストすることをお勧めします。

クラウド同期クライアント

- Dropbox
- Box
- Google Drive
- OneDrive
- OneDrive for Business

① メモ:

ビジネス向け Dropbox には、Dropbox v2.8 以降に加えて VE Server v8.4 以降または EE Server v8.5 以降が必要です。

ビジネス向け Dropbox の場合、v8.4 より前の VE Server または v8.5 より前の EE Server を使用して、クライアントはすべてのファイルとフォルダを保護します。VE v8.4 以降または EE Server v8.5 以降では、ユーザーは、個人用 Dropbox アカウントにファイルをアップロードすることができます。ポリシーに基づき、これらのファイルを保護されない状態にしておくことができます。

Cloud Edition をビジネス向け Google Drive または OneDrive と共に使用するには、EE Server/VE Server v9.1 以降が必要です。

ウェブブラウザ

- サポートされているブラウザには、Internet Explorer、Mozilla Firefox、および Google Chrome があります。Cloud Edition では Microsoft Edge ブラウザはサポートされていません。

クラウド Edition クライアントオペレーティングシステム

- 次の表では、対応オペレーティングシステムが詳しく説明されています。

Windows オペレーティングシステム (32 ビットと 64 ビット)

- Windows 7 SP0-SP1
- Windows 8
- Windows 8.1
- Windows 10

Android オペレーティングシステム

- 4.0 Ice Cream Sandwich
- 4.1~4.3 Jelly Bean
- 4.4~4.4.4 KitKat
- 5.0~5.1.1 Lollipop

iOS オペレーティングシステム

- iOS 7.x
- iOS 8.x
- iOS 9.x

認証オプション

- 次の認証オプションには特定のハードウェアが必要です：[指紋](#)、[スマートカード](#)、[コンタクトレスカード](#)、[クラス B/SIPR ネットカード](#)、および [UEFI コンピュータでの認証](#)。次のオプションには次の設定が必要です：[Windows 認証を使用するスマートカード](#)、[起動前認証を使用するスマートカード](#)、および [ワンタイムパスワード](#)。以下の表では、ハードウェアと構成の要件が満たされているときに使用できる認証オプションをオペレーティングシステム別に示しています。

暗号化クライアント

非 UEFI

	PBA				Windows 認証					
	パスワード	指紋	接触型スマートカード	OTP	SIPR カード	パスワード	指紋	スマートカード	OTP	SIPR カード
Windows 7 SP0-SP1						X	X ²	X ²	X ¹	X ²
Windows 8						X	X ²	X ²	X ¹	X ²
Windows 8.1 更新プログラム 0 ~ 1						X	X ²	X ²	X ¹	X ²
Windows 10						X	X ²	X ²	X ¹	X ²

1. マスターインストーラでインストールする場合、または子インストーラを使用するときには Advanced Authentication パッケージでインストールする場合に使用可能。



非 UEFI

PBA					Windows 認証				
パスワード	指紋	接触型スマートカード	OTP	SIPR カード	パスワード	指紋	スマートカード	OTP	SIPR カード

2. 認証ドライバを support.dell.com からダウンロードしたときに使用可能。

UEFI

PBA - サポートされる Dell コンピュータにあります。					Windows 認証				
パスワード	指紋	接触型スマートカード	OTP	SIPR カード	パスワード	指紋	スマートカード	OTP	SIPR カード

Windows 7 SP0-SP1

Windows 8

Windows 8.1 更新プログラム 0 ~ 1

Windows 10

X	X ²	X ²	X ¹	X ²
X	X ²	X ²	X ¹	X ²
X	X ²	X ²	X ¹	X ²

1. マスターインストーラでインストールする場合、または子インストーラを使用するときには Advanced Authentication パッケージでインストールする場合に使用可能。

2. 認証ドライバを support.dell.com からダウンロードしたときに使用可能。

SED クライアント

非 UEFI

PBA					Windows 認証				
パスワード	指紋	接触型スマートカード	OTP	SIPR カード	パスワード	指紋	スマートカード	OTP	SIPR カード

Windows 7 SP0-SP1

Windows 8

Windows 8.1

Windows 10

X ²		X ^{2 3}		X ^{2 3}	X	X ³	X ³	X ¹	X ³
X ²		X ^{2 3}		X ^{2 3}	X	X ³	X ³	X ¹	X ³
X ²		X ^{2 3}		X ^{2 3}	X	X ³	X ³	X ¹	X ³
X ²		X ^{2 3}		X ^{2 3}	X	X ³	X ³	X ¹	X ³

1. マスターインストーラでインストールする場合、または子インストーラを使用するときには Advanced Authentication パッケージでインストールする場合に使用可能。

2. 認証ドライバを support.dell.com からダウンロードしたときに使用可能。

3. サポートされる OPAL SED で使用可能。



UEFI

	PBA - サポートされる Dell コンピュータにあります。					Windows 認証				
	パスワード	指紋	接触型スマートカード	OTP	SIPR カード	パスワード	指紋	スマートカード	OTP	SIPR カード
Windows 7										
Windows 8	X ⁴					X	X ²	X ²	X ¹	X ²
Windows 8.1	X ⁴					X	X ²	X ²	X ¹	X ²
Windows 10	X ⁴					X	X ²	X ²	X ¹	X ²

1. マスターインストーラでインストールする場合、または子インストーラを使用するときには Advanced Authentication パッケージでインストールする場合に使用可能。

2. 認証ドライバを support.dell.com からダウンロードしたときに使用可能。

4. サポート対象 UEFI コンピュータ上のサポート対象 OPAL SED で使用可能。

BitLocker Manager

	非 UEFI					Windows 認証				
	PBA ⁵					パスワード	指紋	スマートカード	OTP	SIPR カード
	パスワード	指紋	接触型スマートカード	OTP	SIPR カード	パスワード	指紋	スマートカード	OTP	SIPR カード
Windows 7						X	X ²	X ²	X ¹	X ²
Windows 8						X	X ²	X ²	X ¹	X ²
Windows 8.1						X	X ²	X ²	X ¹	X ²
Windows 10						X	X ²	X ²	X ¹	X ²
Windows Server 2008 R2 (64 ビット)						X		X ²		

1. マスターインストーラでインストールする場合、または子インストーラを使用するときには Advanced Authentication パッケージでインストールする場合に使用可能。

2. 認証ドライバを support.dell.com からダウンロードしたときに使用可能。

5. BitLocker Preboot PIN は、Microsoft 機能によって管理されます。



UEFI

PBA⁵ - サポートされる Dell コンピュータにあります。 Windows 認証

	パスワード	指紋	接触型スマートカード	OTP	SIPR カード	パスワード	指紋	スマートカード	OTP	SIPR カード
Windows 7										
Windows 8					X	X ²	X ²	X ¹		X ²
Windows 8.1					X	X ²	X ²	X ¹		X ²
Windows 10					X	X ²	X ²	X ¹		X ²
Windows Server 2008 R2 (64 ビット)					X		X ²			

1. マスターインストーラでインストールする場合、または子インストーラを使用するときには Advanced Authentication パッケージでインストールする場合に使用可能。

2. 認証ドライバを support.dell.com からダウンロードしたときに使用可能。

5. BitLocker Preboot PIN は、Microsoft 機能によって管理されます。



レジストリ設定

- この項では、レジストリ設定の理由に関係なく、ローカル **クライアント** コンピュータでの Dell ProSupport 承認レジストリ設定すべてについて詳しく説明します。レジストリ設定が2つの製品で重複している場合は、それぞれのカテゴリでリストされます。
- これらのレジストリ変更は管理者のみが行うべきであり、すべての状況に適しているわけではなく、機能しない場合もあります。

Encryption クライアントのレジストリ設定

- EE Server/VE Server for EE for Windows で自己署名証明書が使用される場合、クライアントコンピュータで証明書信頼検証を無効のままにしておく必要があります (EE for Windows では信頼検証はデフォルトで無効です)。クライアントコンピュータで信頼検証を有効にする場合は、次の要件を満たしている必要があります。
 - ルート証明機関 (EnTrust や Verisign など) によって署名された証明書が EE Server/VE Server にインポートされている。
 - 証明書の完全な信頼チェーンがクライアントコンピュータの Microsoft キーストアに格納されている。
 - EE for Windows で信頼検証を有効にするには、クライアントコンピュータ上で次のレジストリエントリの値を 0 に変更します。

[HKLM\SOFTWARE\Microsoft\Windows NT\CurrentVersion\Winlogon\CMGShield]

"IgnoreCertErrors"=dword:00000000

0 = 証明書エラーが発生した場合に失敗する

1= エラーを無視する

- Windows 認証にスマートカードを使用するには、クライアントコンピュータで次のレジストリ値を設定する必要があります。

[HKLM\SOFTWARE\DigitalPersona\Policies\Default\SmartCards]

"MSSmartcardSupport"=dword:1

- Encryption Removal Agent ログファイルを作成するには、復号化のターゲットとなるコンピュータ上で次のレジストリエントリを作成します。「[\(オプション\) Encryption Removal Agent のログファイルの作成](#)」を参照してください。

[HKLM\Software\Credant\DecryptionAgent]

"LogVerbosity"=dword:2

0 : ログを記録しない

1: サービスを実行できなくなるエラーをログに記録する

2: 完全なデータ復号化を妨げるエラーをログに記録する (推奨レベル)

3: すべての復号化ボリュームとファイルに関する情報をログに記録する

5: デバッグ情報をログに記録する



- ・ インストール中にデフォルトで、システムトレイアイコンが表示されます。次のレジストリ設定を使用して、最初のインストール後に、コンピュータ上のすべての管理対象のユーザーに対して、システムトレイアイコンを非表示にします。次のようにレジストリ設定を作成または変更します。

```
[HKLM\Software\CREDANT\CMGShield]
```

```
"HIDESYSTRAYICON"=dword:1
```

- ・ デフォルトで、c:\windows\temp ディレクトリ内のすべての一時ファイルは、インストール中に自動的に削除されます。一時ファイルの削除は、最初の暗号化を高速化し、最初の暗号化スweep前に行われます。

ただし、組織において \temp ディレクトリ内のファイル構成の維持を要求するサードパーティのアプリケーションを使用している場合は、この削除を防止する必要があります。

一時ファイルの削除を無効にするには、次のようにレジストリ設定を作成または変更します。

```
[HKLM\SOFTWARE\CREDANT\CMGShield]
```

```
"DeleteTempFiles"=REG_DWORD:0
```

一時ファイルを削除しないと、最初の暗号化時間が増大します。

- ・ Encryption クライアントは、毎回 5 分間 各ポリシーアップデート遅延時間の長さプロンプトを表示します。このプロンプトに反応しないと、次の遅延が始まります。最後の遅延プロンプトには、カウントダウンとプログレスバーが表示され、ユーザーが反応するか最終遅延が時間切れになり必要なログオフ / 再起動が発生するまで表示されています。

ユーザープロンプトの動作を変更し、暗号化を開始または遅延するようにして、ユーザーがプロンプトに反応しない場合の暗号化処理を防止することができます。これを行うには、レジストリを次のレジストリ値に設定します。

```
[HKLM\Software\Microsoft\Windows NT\CurrentVersion\Winlogon\CMGShield]
```

```
"SnoozeBeforeSweep"=DWORD:1
```

0 以外の値にすると、デフォルトの動作がスヌーズに変更されます。ユーザーの操作がない場合、暗号化処理は設定可能な許容遅延回数まで遅延されます。最後の遅延が時間切れになると、暗号化処理が開始されます。

最大可能遅延時間は次のように計算します (最大遅延時間は、ユーザーが 5 分間表示される遅延プロンプトに 1 度も反応しない場合を指します)。

(ポリシー更新遅延の許容回数 × 各ポリシーアップデート遅延の長さ) + (5 分 × [ポリシーアップデート遅延の許容回数 - 1])

- ・ 次のレジストリ設定を使用して、強制的なポリシー更新のために Encryption クライアントに EE Server/VE Server へのポーリングを行わせませす。次のようにレジストリ設定を作成または変更します。

```
[HKLM\SOFTWARE\Credant\CMGShield\Notify]
```

```
"PingProxy"=DWORD value:1
```

操作が終わると、レジストリ設定は自動的に非表示になります。

- ・ 次のレジストリ設定を使用して、最適化されたインベントリを EE Server/VE Server に送信するか、完全なインベントリを EE Server/VE Server に送信するか、アクティブ化されたすべてのユーザーの完全なインベントリを EE Server/VE Server に送信するかのいずれかを、Encryption クライアントに許可します。

- ・ 最適化されたインベントリを EE Server/VE Server に送信する場合：

次のようにレジストリ設定を作成または変更します。

```
[HKLM\SOFTWARE\Microsoft\Windows NT\CurrentVersion\Winlogon\CMGShield]
```

```
"OnlySendInvChanges"=REG_DWORD:1
```

エントリが存在しない場合、最適化されたインベントリが EE Server/VE Server に送信されます。

- ・ 完全なインベントリを EE Server/VE Server に送信する場合：

次のようにレジストリ設定を作成または変更します。

[HKLM\SOFTWARE\Microsoft\Windows NT\CurrentVersion\Winlogon\CMGShield]

"OnlySendInvChanges"=REG_DWORD:0

エントリが存在しない場合、最適化されたインベントリが EE Server/VE Server に送信されます。

- ・ 完全なインベントリをアクティブ化されたすべてのユーザーに送信する場合：

[HKLM\SOFTWARE\Microsoft\Windows NT\CurrentVersion\Winlogon\CMGShield]

"RefreshInventory"=REG_DWORD:1

このエントリは、処理されるとすぐにレジストリから削除されます。値は資格情報コンテナに保存されるので、インベントリのアップロードが行われる前にコンピュータが再起動する場合でも、Encryption クライアントは、次回にインベントリのアップロードが成功したときにもまだこの要求を受け入れます。

このエントリは、OnlySendInvChanges レジストリ値に置き換わります。

- ・ スロットアクティブ化は、大規模導入中の EE Server/VE Server のロードを容易にするために、クライアントのアクティブ化を一定の期間に分散できるようにする機能です。アクティブ化時間を均等に配分できるように、アクティブ化は、アルゴリズムで生成された時間スロットに基づいて遅らせられます。

VPN を通じたアクティブ化が必要なユーザーの場合は、VPN クライアントがネットワーク接続を確立する時間を確保できるだけ最初のアクティブ化を遅らせるような、クライアントのスロットアクティブ化設定が必要になることがあります。

- ① **重要:** スロットアクティブ化の設定は、**Dell ProSupport** のサポートがないと行えません。時間スロット設定が不適切な場合、多数のクライアントが同時に **EE Server/VE Server** に対してアクティブ化を試みるという結果を招き、深刻なパフォーマンスの問題が発生する可能性があります。

これらのレジストリエントリの更新が有効になるには、コンピュータを再起動する必要があります。

- ・ [HKLM\Software\Microsoft\Windows NT\CurrentVersion\Winlogon\CMGShield\SlottedActivation]

スロットアクティブ化の有効化または無効化

無効 = 0 (デフォルト)

有効 = 1

- ・ [HKLM\Software\Microsoft\Windows NT\CurrentVersion\Winlogon\CMGShield\ActivationSlot\CalRepeat]

アクティブ化スロット間隔が繰り返される秒単位の期間。この設定を使用して、アクティブ化スロット間隔が繰り返される秒単位の期間をオーバーライドします。7時間の期間でのアクティベーションスロットには 25200 秒を使用できます。デフォルト設定は 86400 秒であり、これは毎日繰り返されることを示します。

- ・ [HKLM\Software\Microsoft\Windows NT\CurrentVersion\Winlogon\CMGShield\ActivationSlot\SlotIntervals]

すべてのアクティベーション時間スロットが行われた場合の繰り返し内の間隔 (ACTIVATION_SLOT_CALREPEAT)。1度の間隔だけが許可されます。この設定は 0,<CalRepeat> とする必要があります。0 からのオフセットは予想外の結果を生み出すことがあります。デフォルトの設定は 0,86400 です。7時間の繰り返しを設定するには、0,25200 を使用します。CALREPEAT は、ユーザーがログインするとアクティブ化されます。

- ・ [HKLM\Software\Microsoft\Windows NT\CurrentVersion\Winlogon\CMGShield\ActivationSlot\MissThreshold]

そのアクティブ化がスロット化されているユーザーが次回ログインするときに、コンピュータがアクティブ化しようとする前に失われる可能性のあるアクティブ化スロットの数。この即時の試行中にアクティブ化が失敗した場合、クライアントは、スロットアクティブ化試行を再開します。ネットワークの障害のためにアクティブ化が失敗した場合、MISSSTHRESHOLD の値を超過していなくても、ネットワークの再接続時にアクティブ化が試行されます。アクティブ化スロット時間に達する前にユーザーがログアウトした場合、次のログイン時に新しいスロットが割り当てられます。



- ・ [HKCU/Software/CREDANT/ActivationSlot] (ユーザーごとのデータ)

アクティブ化を試行するための据え置き時間。これは、スロットアクティブ化が有効になった後はじめてユーザーがネットワークにログオンするときに設定されます。アクティブ化スロットは、アクティブ化試行ごとに再計算されます。

- ・ [HKCU/Software/CREDANT/SlotAttemptCount] (ユーザーごとのデータ)

時間スロットに達し、アクティブ化が試行されたが失敗したときの失敗または失われた試行の数。この数が ACTIVATION_SLOT_MISSTHRESHOLD に設定された値に達すると、コンピュータは、ネットワークへの接続時に即時アクティブ化を1度試行します。

- ・ クライアントコンピュータ上で管理対象外のユーザーを検出するには、クライアントコンピュータ上で次のレジストリ値を設定します。

```
[HKLM\SOFTWARE\Credant\CMGShield\ManagedUsers\]
```

```
"UnmanagedUserDetected"=DWORD value:1
```

この computer=1 では管理対象外のユーザーを検出します

この computer=0 では管理対象外のユーザーを検出しません

- ・ External Media Edition で暗号化された外付けメディアへのアクセスを、メディアの暗号化に使用した暗号化キーを生成した EE Server/VE Server へのアクセス権のあるコンピュータに制限することができます。

この機能を有効にするには次のレジストリを設定します。

```
[HKLM\SYSTEM\CurrentControlSet\Services\EMS]
```

```
"EnterpriseUsage"=dword:0
```

Off (default)=0

File Access Restricted to Enterprise=1

外付けメディアのファイルを暗号化した後にこの値を変更すると、レジストリ設定が更新されたコンピュータにメディアを接続した時に、更新されたレジストリキー値でファイルが再度暗号化されます。

- ・ ユーザーが非アクティブ化されるという稀なケースにおいてサイレント自動再アクティブ化を有効にするには、クライアントコンピュータに次のレジストリ値を設定する必要があります。

```
[HKEY_LOCAL_MACHINE\SYSTEM\CurrentControlSet\Services\CMGShield]
```

```
"AutoReactivation"=dword:00000001
```

0=Disabled (default)

1=Enabled

- ・ System Data Encryption (SDE) は、SDE 暗号化ルールポリシー値に基づいて実施されます。SDE 暗号化有効 ポリシーが選択されていると、追加のディレクトリがデフォルトで保護されます。詳細については、AdminHelp で「SDE 暗号化ルール」を検索してください。暗号化クライアントがアクティブな SDE ポリシーを含むポリシーアップデートを処理しているとき、現在のユーザープロファイルディレクトリは、SDE キー (デバイスキー) ではなく、デフォルトで SDUser キー (ユーザーキー) で暗号化されます。SDUser キーは、SDE で暗号化されていないユーザーディレクトリにコピーされた (移動されたものではありません) 暗号化ファイルまたはフォルダにも使用されます。

SDUser キーを無効化して、これらのユーザーディレクトリの暗号化に SDE キーを使用するには、コンピュータに次のレジストリエントリを作成します。

```
[HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Credant\CMGShield]
```

```
"EnableSDUserKeyUsage"=dword:00000000
```

このレジストリキーが存在しない、または0以外に設定されている場合、これらのユーザーディレクトリの暗号化には SDUser キーが使用されます。

- ・ Dell ProSupport に連絡して指示を求めることで、非ドメインアクティブ化機能を有効にできます。

SED クライアントのレジストリ設定

- ・ SED クライアントとの通信に EE Server/VE Server を使用できない場合の再試行間隔を設定するには、次のレジストリ値を追加します。

```
[HKLM\System\CurrentControlSet\Services\DellMgmtAgent\Parameters]
```

```
"CommErrorSleepSecs"=dword:300
```

この値は、SED クライアントとの通信に EE Server/VE Server を使用できない場合に、SED クライアントが EE Server/VE Server との接続を試みるために待機する秒数です。デフォルトは 300 秒 (5 分) です。

- ・ 自己署名証明書が SED 管理向けの EE Server/VE Server で使用されている場合、クライアントコンピュータで SSL/TLS 信頼検証を無効のままにしておく必要があります (SED 管理では SSL/TLS 信頼検証はデフォルトで無効です)。クライアントコンピュータで SSL/TLS 信頼検証を有効にする場合は、次の要件を満たしている必要があります。

- ・ ルート証明機関 (EnTrust や Verisign など) によって署名された証明書が EE Server/VE Server にインポートされている。
- ・ 証明書の完全な信頼チェーンがクライアントコンピュータの Microsoft キーストアに格納されている。
- ・ SED 管理で SSL/TLS 信頼検証を有効にするには、クライアントコンピュータ上で次のレジストリエントリの値を 0 に変更します。

```
[HKLM\System\CurrentControlSet\Services\DellMgmtAgent\Parameters]
```

```
"DisableSSLCertTrust"=DWORD:0
```

0 = 有効

1 = 無効

- ・ Windows 認証にスマートカードを使用するには、クライアントコンピュータで次のレジストリ値を設定する必要があります。

```
[HKLM\SOFTWARE\DigitalPersona\Policies\Default\SmartCards]
```

```
"MSSmartcardSupport"=dword:1
```

- ・ 起動前認証でスマートカードを使用するには、次のレジストリ値をクライアントコンピュータに設定します。また、リモート管理コンソールで認証方法ポリシーをスマートカードに設定し、変更をコミットします。

```
[HKLM\SOFTWARE\DigitalPersona\Policies\Default\SmartCards]
```

```
"MSSmartcardSupport"=dword:1
```

- ・ PBA がアクティブ化されているかどうかを判断するには、次の値が設定されていることを確認します。

```
[HKLM\SYSTEM\CurrentControlSet\services\DellMgmtAgent\Parameters]
```

```
"PBAsActivated"=DWORD (32-bit):1
```

1 の値は PBA がアクティブ化されていることを示します。0 の値は PBA がアクティブ化されていないことを示します。

- ・ SED クライアントとの通信に EE Server/VE Server を使用できないときに SED クライアントが EE Server/VE Server との接続を試みる間隔を設定するには、クライアントコンピュータで次の値を設定します。

```
[HKLM\System\CurrentControlSet\Services\DellMgmtAgent\Parameters]
```

```
"CommErrorSleepSecs"=DWORD Value:300
```



この値は、SED クライアントとの通信に EE Server/VE Server を使用できない場合に、SED クライアントが EE Server/VE Server との接続を試みるために待機する秒数です。デフォルトは 300 秒（5 分）です。

- 必要に応じて、Security Server ホストを元のインストール場所から変更することができます。ホスト情報は、ポリシーのポーリングが行われるたびにクライアントコンピュータに読み取られます。クライアントコンピュータ上で次のレジストリ値を変更してください。

```
[HKLM\SYSTEM\CurrentControlSet\Services\DellMgmtAgent]
```

```
"ServerHost"=REG_SZ:<newname>.<organization>.com
```

- 必要に応じて、Security Server のポートが元のインストール先から変更されることがあります。この値は、ポリシーのポーリングが行われるたびにクライアントコンピュータに読み取られます。クライアントコンピュータ上で次のレジストリ値を変更してください。

```
[HKLM\SYSTEM\CurrentControlSet\Services\DellMgmtAgent]
```

```
ServerPort=REG_SZ:8888
```

- 必要に応じて、Security Server の URL が元のインストール場所から変更されることがあります。この値は、ポリシーのポーリングが行われるたびにクライアントコンピュータに読み取られます。クライアントコンピュータ上で次のレジストリ値を変更してください。

```
[HKLM\SYSTEM\CurrentControlSet\Services\DellMgmtAgent]
```

```
"ServerUrl"=REG_SZ:https://<newname>.<organization>.com:8888/agent
```

Advanced Authentication クライアントのレジストリ設定

- スマートカードおよびバイオメトリックデバイスに関連付けられているサービスを Advanced Authentication クライアント (Security Tools) に「自動」起動タイプに変更させたくない場合は、サービス起動機能を無効にします。また、この機能を無効化すると、実行されていない必須サービスに関連する警告も抑制されます。

無効化すると、Security Tools は次のサービスの起動を試行しなくなります。

- SCardSvr - コンピュータが読み取るスマートカードへのアクセスを管理します。このサービスが停止されると、コンピュータはスマートカードを読み取ることができなくなります。このサービスが無効化されると、このサービスに確実に依存するサービスの開始が失敗するようになります。
- SCPolicySvc - スマートカード取り外し時にユーザーのデスクトップをロックするようシステムを設定することができます。
- WbioSrv - Windows 生体認証サービスは、クライアントアプリケーションに対し、生体認証ハードウェアやサンプルに直接アクセスすることなく、生体認証データの取得、比較、操作、および保存する機能を提供します。このサービスは特権 SVCHOST プロセスでホストされます。

レジストリキーが存在しない、または値が 0 に設定されている場合、この機能はデフォルトで有効化されます。

```
[HKLM\SOFTWARE\DELL\Dell Data Protection]
```

```
SmartCardServiceCheck=REG_DWORD:0
```

0 = 有効

1 = 無効

- Windows 認証にスマートカードを使用するには、クライアントコンピュータで次のレジストリ値を設定する必要があります。

```
[HKLM\SOFTWARE\DigitalPersona\Policies\Default\SmartCards]
```

```
"MSSmartcardSupport"=dword:1
```

- ・ SED 起動前認証でスマートカードを使用するには、SED を搭載しているクライアントコンピュータで次のレジストリ値を設定します。

```
[HKLM\SOFTWARE\DigitalPersona\Policies\Default\SmartCards]
```

```
"MSSmartcardSupport"=dword:1
```

リモート管理コンソールで認証方法ポリシーをスマートカードに設定し、変更をコミットします。

BitLocker Manager クライアントのレジストリ設定

- ・ 自己署名証明書が BitLocker Manager 向けの EE Server/VE Server で使用されている場合は、クライアントコンピュータで SSL/TLS 信頼検証を無効のままにしておく必要があります (BitLocker Manager では SSL/TLS 信頼検証はデフォルトで無効です)。クライアントコンピュータで SSL/TLS 信頼検証を有効にする場合は、次の要件を満たしている必要があります。
 - ・ ルート証明機関 (EnTrust や Verisign など) によって署名された証明書が EE Server/VE Server にインポートされている。
 - ・ 証明書の完全な信頼チェーンがクライアントコンピュータの Microsoft キーストアに格納されている。
 - ・ BitLocker Manager で SSL/TLS 信頼検証を有効にするには、クライアントコンピュータ上で次のレジストリエントリの値を 0 に変更します。

```
[HKLM\System\CurrentControlSet\Services\DellMgmtAgent\Parameters]
```

```
"DisableSSLCertTrust"=DWORD:0
```

0 = 有効

1 = 無効

Cloud Edition クライアントのレジストリ設定

- ・ トラブルシューティングに役立つようにログレベルを引き上げることができます。次のレジストリ設定を作成または変更します。

```
[HKLM\SOFTWARE\Dell\Dell Data Protection\Cloud Edition]
```

```
"LogVerbosity"=dword:0x1f (31)
```

ログレベルはデフォルトで 0xf (15) に設定されます。

Off=0x0 (0)

Critical=0x1 (1)

Error=0x3 (3)

Warning=0x7 (7)

Information=0xf (15)

Debug=0x1f (31)



マスターインストーラを使用したインストール

- ・ コマンドラインのスイッチおよびパラメータは大文字と小文字を区別します。
- ・ デフォルト以外のポートを使用してインストールするには、マスターインストーラの代わりに子インストーラを使用します。
- ・ マスターインストーラログファイルは、**C:\ProgramData\Dell\Dell Data Protection\Installer** にあります。
- ・ アプリケーションに関するサポートが必要なときには、次のマニュアルとヘルプファイルを参照するようにユーザーに指示します。
 - ・ Encryption クライアントの各機能の使用方法については、『Dell Encrypt Help』（Dell Encrypt ヘルプ）を参照してください。このヘルプには、**<Install dir>\Program Files\Dell\Dell Data Protection\Encryption\Help** からアクセスします。
 - ・ External Media Shield の各機能の使用方法については、『EMS Help』（EMS ヘルプ）を参照してください。このヘルプには、**<Install dir>\Program Files\Dell\Dell Data Protection\Encryption\EMS** からアクセスします。
 - ・ Advanced Authentication の機能の使用方法については、『Security Tools Help』（Security Tools ヘルプ、Endpoint Security Suite ヘルプ、Endpoint Security Suite Enterprise ヘルプ）を参照してください。ヘルプには、**<Install dir>\Program Files\Dell\Dell Data Protection\Security Tools \Help** からアクセスしてください。
 - ・ Cloud Edition の各機能の使用方法については、『Cloud Edition User Guide』（Cloud Edition ユーザーガイド）を参照してください。このマニュアルは、support.dell.com から入手してください。
- ・ ユーザーは、インストールが完了した後、システムトレイで Dell Data Protection アイコンを右クリックし、**ポリシーアップデートのチェック** を選択して、ポリシーをアップデートする必要があります。
- ・ マスターインストーラは、製品のスイート全体をインストールします。マスターインストーラを使用してインストールするには、2つの方法があります。次のいずれかを選択します。
 - ・ **マスターインストーラを使用した対話型のインストール**

または **内部接続ポートを編集...** のいずれかをクリックします。

 - ・ **マスターインストーラを使用したコマンドラインによるインストール**

マスターインストーラを使用した対話型のインストール

- ・ マスターインストーラは次の場所にあります。
 - ・ **support.dell.com** から - 必要に応じて、support.dell.com からソフトウェアを取得して、**マスターインストーラから子インストーラを抽出します**。抽出後、次の場所でファイルを見つけます。
 - ・ **お使いの Dell FTP アカウントから** - インストールバンドルを DDP-Enterprise-Edition-8.x.x.xxx.zip の中から見つけます。
- ・ これらの手順に従い、マスターインストーラを使用して Dell Data Protection | Enterprise Edition を対話形式でインストールします。この方法では、コンピュータごとに製品スイートをインストールします。
 - 1 Dell インストールメディアから を見つけます。それをローカルコンピュータにコピーします。
 - 2 インストーラを起動するにはをダブルクリックします。これには数分かかる場合があります。
 - 3 ようこそ ダイアログで **次へ** をクリックします。
 - 4 ライセンス契約を読み、その条件に同意して **次へ** をクリックします。
 - 5 **Enterprise Edition** を選択し、**次へ** をクリックします。
External Media Edition のみをインストールする場合は、External Media Edition のみのチェックボックスを選択します
 - 6 **Dell Enterprise Server 名** フィールドに、ターゲットユーザーを管理する EE Server/VE Server の完全修飾ホスト名 (server.organization.com など) を入力します。

Dell Device Server URL フィールドに、クライアントが通信する Device Server (Security Server) の URL を入力します。

EE Server のバージョンが v7.7 よりも前の場合、形式は `https://server.organization.com:8081/xapi` になります。

EE Server が v7.7 以降、フォーマットは `https://server.organization.com:8443/xapi/`(末尾のスラッシュを含む) です。

次へ をクリックします。

7 **次へ** をクリックして、デフォルトの場所である `C:\Program Files\Dell\Dell Data Protection\` にこの製品をインストールします。他の場所にインストールすると問題が発生する可能性があるため、**Dell recommends installing in the default location only**。

8 インストールするコンポーネントを選択します。

Security Framework は、基本的なセキュリティフレームワーク、ならびに PBA および指紋やパスワードなどの資格情報といった複数の認証方法を管理する高度な認証クライアントである *Security Tools* をインストールします。

Drivers には、DDP アプリケーションに必要なドライバが含まれます。

Encryption は、コンピュータがネットワークに接続しているか、ネットワークから切断しているか、紛失しているか、または盗まれているかにかかわらずセキュリティポリシーを実施するコンポーネントである *Encryption* クライアントをインストールします。

Cloud Edition は、Dropbox、ビジネス向け Dropbox、Box、OneDrive などのパブリッククラウドサービスにデータが保存されたときにデータを保護するコンポーネントである *Cloud* クライアントをインストールします。データは、ファイルがクラウドへ、またはクラウドから移動するときに透過的に暗号化されます。

BitLocker Manager は、BitLocker 暗号化ポリシーの一元的な管理を通じて所有コストを単純化および軽減することによって、BitLocker 導入のセキュリティを強化するように設計された *BitLocker Manager* クライアントをインストールします。

選択が完了したら、**次へ** をクリックします。

9 **インストール** をクリックしてインストールを開始します。インストールには数分かかります。

10 **はい、今すぐコンピュータを再起動します** を選択し、**終了** をクリックします。

インストールが完了しました。

マスターインストーラを使用したコマンドラインによるインストール

- ・ コマンドラインインストールでは、最初にスイッチを指定する必要があります。その他のパラメータは、/v スイッチに渡される引数に指定します。

スイッチ

- ・ 次の表は、マスターインストーラで使用できるスイッチについて説明しています。

スイッチ	説明
-y -gm2	マスターインストーラの事前抽出です。y スイッチと -gm2 スイッチは一緒に使用する必要がありません。 これらのスイッチを個別に使用しないでください。
/S	サイレントインストール
/z	DDPSetup.exe 内の .msi に変数を渡します。

パラメータ

- ・ 次の表は、マスターインストーラで使用できるパラメータについて説明しています。



パラメータ	説明
SUPPRESSREBOOT	インストールの完了後に自動的に行われる再起動を阻止します。SILENT モードで使用できます。
SERVER	EE Server/VE Server の URL を指定します。
InstallPath	インストールのパスを指定します。SILENT モードで使用できます。
FEATURES	SILENT モードでインストールできるコンポーネントを指定します。 DE = Drive Encryption (Encryption クライアント) EME = External Media Edition のみ BLM = BitLocker Manager SED = 自己暗号化ドライブ管理 (EMAgent/Manager、PBA/GPE ドライバ) CE = Cloud Edition
BLM_ONLY=1	SED Management のプラグインを除外するために FEATURES=BLM をコマンドラインに使用する時には、これを使用する必要があります。

コマンドラインの例

- ・ コマンドラインパラメータでは大文字と小文字を区別します。
- ・ この例では、標準ポートでマスターインストーラを使用して **C:\Program Files\Dell\Dell Data Protection** のデフォルトの場所にすべてのコンポーネントをサイレントインストールし、それが指定した EE Server/VE Server を使用するように設定します。

```
"DDPSetup.exe" -y -gm2 /S /z\"SERVER=server.organization.com\""
```

- ・ この例では、標準ポートでマスターインストーラを使用して、再起動なしで **C:\Program Files\Dell\Dell Data Protection** のデフォルトの場所に SED Management および External Media Edition をサイレントインストールし、それが指定した EE Server/VE Server を使用するように設定します。

```
"DDPSetup.exe" -y -gm2 /S /z\"SERVER=server.organization.com, FEATURES=EME-SED, SUPPRESSREBOOT=1\""
```

- ・ この例では、標準ポートでマスターインストーラを使用して、再起動なしで **C:\Program Files\Dell\Dell Data Protection** のデフォルトの場所に SED Management をサイレントインストールし、それが指定した EE Server/VE Server を使用するように設定します。

```
"DDPSetup.exe" -y -gm2 /S /z\"SERVER=server.organization.com, FEATURES=SED, SUPPRESSREBOOT=1\""
```

- ・ この例では、標準ポートでマスターインストーラを使用して、**C:\Program Files\Dell\Dell Data Protection** のデフォルトの場所に SED Management をサイレントインストールし、それが指定した EE Server/VE Server を使用するように設定します。

```
"DDPSetup.exe" -y -gm2 /S /z\"SERVER=server.organization.com, FEATURES=SED\""
```

- ・ この例では、標準ポートでマスターインストーラを使用して、**C:\Program Files\Dell\Dell Data Protection** のデフォルトの場所に Encryption クライアントおよび BitLocker Manager (SED Management のプラグインなし) をサイレントインストールし、それが指定した EE Server/VE Server を使用するように設定します。

```
"DDPSetup.exe" -y -gm2 /S /z\"SERVER=server.organization.com, FEATURES=DE-BLM, BLM_ONLY=1\""
```

- ・ この例では、標準ポートでマスターインストーラを使用して、再起動なしで **C:\Program Files\Dell\Dell Data Protection** のデフォルトの場所に BitLocker Manager (SED Management プラグインあり) および External Media Edition をサイレントインストールし、それが指定した EE Server/VE Server を使用するように設定します。

```
"DDPSetup.exe" -y -gm2 /S /z\"SERVER=server.organization.com, FEATURES=BLM-EME, SUPPRESSREBOOT=1\""
```



- この例では、標準ポートでマスターインストーラを使用して、再起動なしで `C:\Program Files\Dell\Dell Data Protection\` のデフォルトの場所に BitLocker Manager (SED Management プラグインなし) および External Media Edition をサイレントインストールし、それが指定した EE Server/VE Server を使用するよう設定します。

```
"DDPSetup.exe" -y -gm2 /S /z\"\"SERVER=server.organization.com, FEATURES=BLM-EME, BLM_ONLY=1, SUPPRESSREBOOT=1\"\""
```



マスターインストーラを使用したアンインストール

- 各コンポーネントを個別にアンインストールした後で、マスターインストーラのアンインストールを行う必要があります。クライアントは、**アンインストールの失敗を防止するための特定の順序** でアンインストールする必要があります。
- 子インストーラを取得するには、「**マスターインストーラからの子インストーラの抽出**」に記載されている手順に従います。
- インストールと同じバージョンのマスターインストーラ（つまりクライアント）をアンインストールにも使用するようしてください。
- 本章では、子インストーラのアンインストール方法の**詳細な手順**が記された他の章を参照します。本章では、最後の手順である**マスターインストーラのアンインストールのみ**を説明します。
- クライアントを以下の順序でアンインストールします。
 - Encryption クライアントのアンインストール。
 - SED および Advanced Authentication クライアントのアンインストール。
 - BitLocker Manager クライアントのアンインストール。
 - Cloud Edition のアンインストール。

ドライバパッケージをアンインストールする必要はありません。

- 「**マスターインストーラのアンインストール**」に進みます。

マスターインストーラのアンインストール

個々のクライアントをすべてアンインストールしたら、マスターインストーラをアンインストールすることができます。

コマンドラインでのアンインストール

- 次の例では、マスターインストーラをサイレントにアンインストールします。

```
"DDPSetup.exe" -y -gm2 /S /x
```

終了したらコンピュータを再起動します。

子インストーラを使用したインストール

- 各クライアントを個別にインストールするには、「[マスターインストーラからの子インストーラの抽出](#)」にあるように、まず始めにマスターインストーラから子実行可能ファイルを抽出する必要があります。
- コマンドラインのスイッチおよびパラメータは大文字と小文字を区別します。
- コマンドラインで空白などの特殊文字を1つ、または複数含む値は、エスケープされた引用符で囲むようにしてください。
- これらのインストーラを使用し、スクリプトインストールやバッチファイルを利用するか、組織で利用できる他のプッシュ技術を活用して、クライアントをインストールします。
- コマンドラインの例では、再起動は省略されています。ただし、最終的には再起動する必要があります。暗号化は、コンピュータが再起動されるまで開始できません。
- ログファイル - Windows は、`C:\Users\\AppData\Local\Temp` にある `%temp%` に、ログインしたユーザー用の固有の子インストーラインストールログファイルを作成します。

インストーラの実行時に別のログファイルを追加することにした場合、子インストーラログファイルは付加しないので、必ずそのログファイルには独自に名前を付けてください。`C:\<any directory>\<any log file name>.log` を使用することによって、ログファイルの作成に標準の `.msi` コマンドを使用することができます。

- すべての子インストーラは、特に断りがない限り、コマンドラインでのインストールで同じ基本的な `.msi` スイッチと表示オプションを使用します。最初にスイッチを指定する必要があります。`/v` スイッチは必須であり、引数が必要です。その他のパラメータは、`/v` スイッチに渡す引数に指定します。

表示オプションは、目的の動作を実行させるために `/v` スイッチに渡された引数の末尾に指定することができます。同じコマンドラインに `/q` と `/qn` の両方を使用しないでください。「!」および「-」は「/qb」の後にのみ使用してください。

スイッチ	意味
<code>/v</code>	*.exe 内の .msi に変数を渡します。
<code>/s</code>	サイレントモード
<code>/i</code>	インストールモード
オプション	意味
<code>/q</code>	進行状況ダイアログなし、処理完了後に自動で再起動
<code>/qb</code>	キャンセル ボタン付きの進捗状況ダイアログ、再起動のプロンプト表示
<code>/qb-</code>	キャンセル ボタン付きの進捗状況ダイアログ、処理完了後に自動で再起動
<code>/qb!</code>	キャンセル ボタンなしの進捗状況ダイアログ、再起動のプロンプト表示
<code>/qb!-</code>	キャンセル ボタンなしの進捗状況ダイアログ、処理完了後に自動で再起動
<code>/qn</code>	ユーザーインターフェースなし

- アプリケーションに関するサポートが必要なときには、次のドキュメントとヘルプファイルを参照するようにユーザーに指示します。
 - Encryption クライアントの各機能の使用方法については、『Dell Encrypt Help』（Dell Encrypt ヘルプ）を参照してください。このヘルプには、`<install dir>\Program Files\Dell\Dell Data Protection\Encryption\Help` からアクセスします。
 - External Media Shield の各機能の使用方法については、『EMS Help』（EMS ヘルプ）を参照してください。このヘルプには、`<install dir>\Program Files\Dell\Dell Data Protection\Encryption\EMS` からアクセスします。



- Advanced Authentication の機能の使用方法については、『*Security Tools Help*』（Security Tools ヘルプ、Endpoint Security Suite ヘルプ、Endpoint Security Suite Enterprise ヘルプ）を参照してください。ヘルプには、<Install dir>\Program Files\Dell\Dell Data Protection\Security Tools \Help からアクセスしてください。
- Cloud Edition の各機能の使用方法については、『*Cloud Edition User Guide*』（Cloud Edition ユーザーガイド）を参照してください。このマニュアルは、support.dell.com から入手してください。

Driver クライアントのインストール

- Dell ControlVault 対応のドライバおよびファームウェア、指紋リーダー、およびスマートカードは、マスターインストーラや子インストーラの実行可能ファイルに含まれません。ドライバとファームウェアは最新の状態にしておく必要があります。これらは、<http://www.dell.com/support> から、お使いのコンピュータモデルを選択してダウンロードできます。認証ハードウェアに基づいて、適切なドライバとファームウェアをダウンロードします。

- Dell ControlVault
- NEXT Biometrics Fingerprint ドライバ
- Validity Fingerprint Reader 495 ドライバ
- O2Micro スマートカードドライバ

デル以外のハードウェアにインストールしている場合は、そのベンダーのウェブサイトからアップデート済みのドライバとファームウェアをダウンロードしてください。

- このインストーラは、TPM 用の信頼済みソフトウェアスタック（TSS）、および Microsoft ホットフィックスのドライバをインストールします。

これらのドライバは Encryption クライアントをインストールする際にインストールする必要があります。

- ドライバインストーラは次の場所にあります。
 - support.dell.com から - 必要に応じて、support.dell.com から ソフトウェアを入手して、マスターインストーラから子インストーラを抽出します。抽出後、**C:\extracted\Drivers** でファイルを見つけます。
 - お使いの Dell FTP アカウントから - DDP-Enterprise-Edition-8.x.x.xxx.zip でインストールバンドルを見つけてから、マスターインストーラから子インストーラを抽出します。抽出後、**C:\extracted\Drivers** でファイルを見つけます。

コマンドラインでのインストール

- 次の表に、インストールで使用できるパラメータの詳細を示します。

パラメータ

SUPPRESSREBOOT=1

INSTALLPATH=<change the installation destination>

ARPSYSTEMCOMPONENT=1 < [コントロールパネルプログラム] リストにエントリしない>

コマンドラインで使用可能な基本的な .msi スイッチおよび表示オプションについては、「[子インストーラを使用したインストール](#)」を参照してください。

コマンドラインの例

- 次の例では、指定した場所に、TPM 用の信頼済みソフトウェアスタック（TSS）、および Microsoft ホットフィックスのドライバをインストールし、コントロールパネルプログラムリストにはエントリを作成せず、再起動は実行しません。

```
setup.exe /S /z "\"InstallPath=<c:\location>, ARPSYSTEMCOMPONENT=1, SUPPRESSREBOOT=1\""
```

Encryption クライアントのインストール

- Encryption クライアントにはドライバが必要です。インストール手順については「[Driver クライアントのインストール](#)」を参照してください。これらのドライバは、TPM 用の信頼済みソフトウェアスタック (TSS)、および Microsoft ホットフィックスのものです。これらのドライバは Encryption クライアントをインストールする際にインストールする必要があります。ドライバのインストールが終了したらここに戻ります。
- EnTrust または Verisign などのルート証明機関によって署名された証明書を組織で使用している場合は、「[Encryption クライアントの要件](#)」を見直します。証明書検証を有効にするには、クライアントコンピュータでレジストリ設定を変更する必要があります。
- ユーザーは、インストールが完了した後、システムトレイで Dell Data Protection アイコンを右クリックし、**ポリシーアップデートのチェック** を選択して、ポリシーをアップデートする必要があります。
- Encryption クライアントインストーラは次の場所にあります。
 - support.dell.com** から - 必要に応じて、**support.dell.com** から **ソフトウェア** を入手して、**マスターインストーラ** から **子インストーラ** を抽出します。抽出後、**C:\extracted\Encryption** でファイルを見つけます。
 - お使いの Dell FTP アカウントから - DDP-Enterprise-Edition-8.x.x.xxx.zip でインストールバンドルを見つけてから、**マスターインストーラ** から **子インストーラ** を抽出します。抽出後、**C:\extracted\Encryption** でファイルを見つけます。

コマンドラインでのインストール

- 次の表に、インストールで使用できるパラメータの詳細を示します。

パラメータ

SERVERHOSTNAME=<ServerName>

POLICYPROXYHOSTNAME=<RGKName>

MANAGEDDOMAIN=<MyDomain>

DEVICESTRVERURL=<DeviceServerName/SecurityServerName>

GKPORT=<NewGKPort>

MACHINEID=<MachineName>

RECOVERYID=<RecoveryID>

REBOOT=ReallySuppress

HIDEOVERLAYICONS=1

HIDESYSTRAYICON=1

EME=1

コマンドラインで使用可能な基本的な .msi スイッチおよび表示オプションについては、「[子インストーラを使用したインストール](#)」を参照してください。

コマンドラインの例

- 次の例では、Encryption クライアントと Encrypt for Sharing、ダイアログなし、プログレスバーなし、自動再起動、デフォルトの場所 **C:\Program Files\Dell\Dell Data Protection** にインストールするというデフォルトのパラメータでクライアントをインストールします。

```
DDPE_XXbit_setup.exe /s /v"SERVERHOSTNAME=server.organization.com  
POLICYPROXYHOSTNAME=rgk.organization.com MANAGEDDOMAIN=ORGANIZATION DEVICESTRVERURL=https://  
server.organization.com:8443/xapi /qn"
```



- EE Server が v7.7 より前の場合は、DEVICESERVERURL=https://server.organization.com:8081/xapi（末尾のスラッシュなし）を置き換えます。
- 次の例では、Encryption クライアントおよび Encrypt for Sharing、DDP システムトレイアイコンの非表示、オーバーレイアイコンの非表示、ダイアログなし、プログレスバーなし、再起動なし、デフォルトの場所 C:\Program Files\Dell\Dell Data Protection. にインストールという設定でクライアントをインストールします。

```
DDPE_XXbit_setup.exe /s /v"SERVERHOSTNAME=server.organization.com
POLICYPROXYHOSTNAME=rgk.organization.com MANAGEDDOMAIN=ORGANIZATION DEVICESERVERURL=https://
server.organization.com:8443/xapi/ HIDESYSTRAYICON=1 HIDEOVERLAYICONS=1
REBOOT=ReallySuppress /qn"
```

- EE Server が v7.7 より前の場合は、DEVICESERVERURL=https://server.organization.com:8081/xapi（末尾のスラッシュなし）を置き換えます。

External Media Edition (EME) のみをインストールするコマンドラインの例

- サイレントインストール、プログレスバーなし、自動起動、デフォルトの場所 C:\Program Files\Dell\Dell Data Protection. にインストールという設定で行われます。

```
DDPE_XXbit_setup.exe /s /v"SERVERHOSTNAME=server.organization.com
POLICYPROXYHOSTNAME=rgk.organization.com MANAGEDDOMAIN=ORGANIZATION DEVICESERVERURL=https://
server.organization.com:8443/xapi/ EME=1 /qn"
```

- EE Server が v7.7 より前の場合は、DEVICESERVERURL=https://server.organization.com:8081/xapi（末尾のスラッシュなし）を置き換えます。
- サイレントインストール、再起動なし、デフォルトの場所 C:\Program Files\Dell\Dell Data Protection にインストールという設定で行われます)

```
DDPE_XXbit_setup.exe /s /v"EME=1 SERVERHOSTNAME=server.organization.com
POLICYPROXYHOSTNAME=rgk.organization.com DEVICESERVERURL=https://server.organization.com:8443/
xapi/ MANAGEDDOMAIN=ORGANIZATION /norestart /qn"
```

- EE Server が v7.7 より前の場合は、DEVICESERVERURL=https://server.organization.com:8081/xapi（末尾のスラッシュなし）を置き換えます。

① メモ:

クライアントのバージョン情報ボックスにはソフトウェアのバージョン番号情報が表示されますが、フルクライアントがインストールされているか、EME のみがインストールされているかどうかは表示されません。この情報を探すには、C:\ProgramData\Dell\Dell Data Protection\Encryption\CMGShield.log に移動し、次のエントリを探します。

```
[<date/timestamp> DeviceInfo: <>] Shield Information - SM=External Media Only, SB=DELL, UNF=FQUN, last sweep={0, 0}
```

External Media Edition をフル Shield バージョンに変換するコマンドラインの例

- External Media Edition をフル Shield バージョンに変換するときに、復号化は不要です。

```
DDPE_XXbit_setup.exe /s /v"SERVERHOSTNAME=server.organization.com
POLICYPROXYHOSTNAME=rgk.organization.com MANAGEDDOMAIN=ORGANIZATION DEVICESERVERURL=https://
server.organization.com:8443/xapi/ REINSTALL=ALL EME=0 REINSTALLMODE=vemus /qn"
```

- EE Server が v7.7 より前の場合は、DEVICESERVERURL=https://server.organization.com:8081/xapi（末尾のスラッシュなし）を置き換えます。

Server Encryption クライアントのインストール

Server Encryption のインストールには、2つの方法があります。以下のいずれかの方法を選択します。

- Server Encryption の対話型インストール

- ① **メモ:** Server Encryption の対話型インストールは、サーバーオペレーティングシステムを実行しているコンピュータ上でのみ行うことができます。非サーバーオペレーティングシステムを実行しているコンピュータ上でのインストールは、コマンドラインで、SERVERMODE=1 のパラメータを指定して、実行する必要があります。

- コマンドラインを使用した Server Encryption のインストール

仮想ユーザーアカウント

- ・ インストールの一部として、Server Encryption を独占的に使用するための**仮想サーバーユーザーアカウント**が作成されます。仮想サーバーユーザーのみがコンピュータ上の暗号化キーにアクセスできるように、パスワードおよび DPAPI 認証は無効化されます。

作業を開始する前に

- ・ インストールを実行するユーザーアカウントは、管理者レベルの権限を持つローカルまたはドメインユーザーである必要があります。
- ・ ドメイン管理者が Server Encryption をアクティブ化するという要件を無効にするには、あるいは Server Encryption を非ドメインまたはマルチドメインのサーバー上で実行するには、application.properties ファイル内で ssos.domainadmin.verify プロパティを false に設定します。このファイルは、お使いの DDP Server に基づいて、次のファイルパスに保存されています。

Dell Enterprise Server - <installation folder>/Security Server/conf/application.properties

Virtual Edition - /opt/dell/server/security-server/conf/application.properties

- ・ サーバーはポート制御をサポートしている必要があります。

サーバーポート制御システムポリシーは、例えば、USB デバイスによるサーバーの USB ポートへのアクセスおよび使用を制御することにより、保護対象サーバー上のリムーバブルメディアに影響します。USB ポートポリシーは外部 USB ポートに適用されます。内部 USB ポート機能は、USB ポートポリシーの影響を受けません。USB ポートポリシーが無効化されると、クライアント USB キーボードおよびマウスは機能しなくなり、このポリシーが適用される前にリモートデスクトップ接続がセットアップされない限り、ユーザーはコンピュータを使用することができなくなります。

- ・ Server Encryption を正常にアクティブ化するには、コンピュータがネットワークに接続されている必要があります。
- ・ Trusted Platform Module (TPM) を使用可能な場合、Dell ハードウェア上の GPK を封印するために TPM が使用されます。TPM を使用できない場合、Server Encryption は、Microsoft のデータ保護 API (DPAPI) を使用して汎用キーを保護します。

① **メモ:** Server Encryption を実行している、TPM を搭載した Dell コンピュータに、新しいオペレーティングシステムをインストールするときは、BIOS で TPM をクリアしてください。手順については、「https://technet.microsoft.com/en-us/library/cc749022%28v=ws.10%29.aspx#BKMK_S2」を参照してください。

子インストーラの抽出

- ・ Server Encryption では、マスターインストーラ内にあるインストーラのうちの1つのみが必要です。Server Encryption をインストールするには、最初に Encryption クライアントの子インストーラ **DDPE_xxbit_setup.exe** をマスターインストーラから抽出する必要があります。[マスターインストーラからの子インストーラの抽出](#)を参照してください。

Server Encryption の対話型インストール

- ・ 次の手順を使用して、Server Encryption を対話形式でインストールします。このインストーラには、ソフトウェア暗号化に必要なコンポーネントが含まれています。

- 1 C:\extracted\Encryption フォルダ内で **DDPE_XXbit_setup.exe** を見つけます。それをローカルコンピュータにコピーします。
- 2 Server Encryption をサーバーにインストールする場合は、**DDPE_XXbit_setup.exe** ファイルをダブルクリックしてインストーラを起動します。

① **メモ:** Windows Server 2012 R2 などのサーバーオペレーティングシステムを実行しているコンピュータ上に **Server Encryption** がインストールされる場合、インストーラはデフォルトでサーバーモードの暗号化をインストールします。

- 3 ようこそダイアログで **次へ** をクリックします。
- 4 ライセンス契約画面で契約を読み、諸条件に同意して、**次へ** をクリックします。
- 5 **次へ** をクリックして Server Encryption をデフォルトの場所にインストールします。

① **メモ:** デルでは、デフォルトの場所へのインストールをお勧めしています。デフォルト以外の場所（別のディレクトリ内、D ドライブ上、USB ドライブ上など）にインストールすることは推奨されません。

- 6 **次へ** をクリックして、**管理タイプ**ダイアログをスキップします。
- 7 Dell Enterprise Server の名前 フィールドに、対象ユーザーを管理する Dell Enterprise Server または Virtual Edition の完全修飾ホスト名 (server.organization.com など) を入力します。



- 8 管理対象ドメインフィールドにドメイン名を入力し（organization など）、次へ をクリックします。
- 9 次へ をクリックして、自動入力済みの **Dell Policy Proxy 情報** ダイアログをスキップします。
- 10 次へ をクリックして、自動入力済みの **Dell Device Server 情報** ダイアログをスキップします。
- 11 インストール をクリックしてインストールを開始します。
インストールには数分かかる場合があります。
- 12 設定完了 ダイアログで、終了 をクリックします。
インストールが完了しました。

① **メモ:** インストールのログファイルはアカウントの **%temp%** ディレクトリ内にあり、このディレクトリは **C:\Users\\AppData\Local\Temp** にあります。インストーラのログファイルを見つけるには、名前が **MSI** で始まり、**.log** 拡張子で終わるファイルを探してください。そのファイルには、インストーラを実行したときの時間に一致する日時のタイムスタンプがあります。

① **メモ:** インストールの一部として、**Server Encryption** を独占的に使用するための仮想サーバーユーザーアカウントが作成されます。仮想サーバーユーザーのみがコンピュータ上の暗号化キーにアクセスできるように、パスワードおよび DPAPI 認証は無効化されます。

- 13 コンピュータを再起動します。

① **重要:** 作業を保存し、開いているアプリケーションを閉じるための時間が必要な場合にのみ、再起動をスヌーズする を選択します。

コマンドラインを使用した Server Encryption のインストール

Server Encryption クライアント - インストーラの場所 : C:\extracted\Encryption

- ・ **DDPE_xxbit_setup.exe** を使用してスクリプトインストールやバッチファイルを利用するか、組織で利用できる他のプッシュ技術を活用して、インストールまたはアップグレードを行います。

スイッチ

次の表に、インストールで使用できるスイッチの詳細を示します。

スイッチ	意味
/v	DDPE_XXbit_setup.exe 内の .msi に変数を渡します。
/a	管理インストール
/s	サイレントモード

パラメータ

次の表は、インストールで使用できるパラメータの詳細です。

コンポーネント	ログファイル	コマンドラインパラメータ
すべて	/!*v [fullpath][filename].log *	SERVERHOSTNAME=<管理サーバー名> SERVERMODE=1 POLICYPROXYHOSTNAME=<RGK 名> MANAGEDDOMAIN=<マイドメイン> DEVICESERVERURL=<Activation Server 名>



GKPORT=<新規 GK ポート>

MACHINEID=<マシン名>

RECOVERYID=<リカバリ ID>

REBOOT=ReallySuppress

HIDEOVERLAYICONS=1

HIDESYSTRAYICON=1

EME=1

- ① **メモ:** 再起動を控えてもかまいませんが、最終的には再起動する必要があります。暗号化は、コンピュータが再起動されるまで開始できません。

オプション

次の表では、表示オプションが詳しく説明されています。これらのオプションは、/v スイッチに渡された引数の末尾に指定することができます。

オプション	意味
/q	進行状況ダイアログなし、処理完了後に自動で再起動
/qb	キャンセル ボタン付きの進捗状況ダイアログ、再起動のプロンプト表示
/qb-	キャンセル ボタン付きの進捗状況ダイアログ、処理完了後に自動で再起動
/qb!	キャンセル ボタンなしの進捗状況ダイアログ、再起動のプロンプト表示
/qb!-	キャンセル ボタンなしの進捗状況ダイアログ、処理完了後に自動で再起動
/qn	ユーザーインターフェースなし

- ① **メモ:** 同じコマンドライン内で /q と /qn を同時に使用しないでください。「!」および「-」は「/qb」の後にのみ使用してください。

- ・ コマンドラインパラメータ SERVERMODE=1 は、新規インストール時にのみ有効です。アンインストールでは、このパラメータは無視されます。
- ・ デフォルト以外の場所（別のディレクトリ内、C: 以外のドライブ上、USB ドライブ上など）にインストールすることは推奨されません。デルでは、デフォルトの場所へのインストールをお勧めしています。
- ・ 空白など、特殊文字を1つ以上含む値は、エスケープした引用符で囲みます。
- ・ Dell Activation Server の URL（DEVICESTRIVERURL）では大文字と小文字が区別されます。

コマンドラインインストールの例

- ・ 次の例では、Server Encryption クライアントと Encrypt for Sharing、ダイアログなし、プログレスバーなし、自動再起動、デフォルトの場所 **C:\Program Files\Dell\Dell Data Protection** にインストールというデフォルトのパラメータで Server Encryption クライアントをインストールします。

```
DDPE_XXbit_setup.exe /s /v"SERVERMODE=1 SERVERHOSTNAME=server.organization.com
POLICYPROXYHOSTNAME=rgk.organization.com MANAGEDDOMAIN=ORGANIZATION DEVICESTRIVERURL=https://
server.organization.com:8443/xapi/qn"
```

- ・ 次の例では、Server Encryption クライアントをログファイルとデフォルトのパラメータでインストールし（Server Encryption クライアント、サイレントインストール、Encrypt for Sharing、ダイアログなし、プログレスバーなし、再起動なし、デフォルト



の場所 C:\Program Files\Dell\Dell Data Protection\Encryption にインストール)、このコマンドラインが同じサーバー上で複数回実行される場合は末尾の数字が1ずつ増えるカスタムログファイル名 (DDP_ssos-090.log) を指定します。

```
DDPE_XXbit_setup.exe /s /v"SERVERMODE=1 SERVERHOSTNAME=server.organization.com  
POLICYPROXYHOSTNAME=rgk.organization.com MANAGEDDOMAIN=ORGANIZATION DEVICESERVERURL=https://  
server.organization.com:8443/xapi/ /l*v DDP_ssos-090.log /norestart/qn"
```

実行可能ファイルが格納されているデフォルトの場所以外にログの場所を指定するには、コマンドに完全なパスを指定します。例えば、/l*v C:\Logs\DDP_ssos-090.log では、C:\Logs フォルダにインストールログが作成されます。

コンピュータの再起動

インストール後、コンピュータを再起動します。コンピュータは、できるだけ早く再起動する必要があります。

① 重要: 作業を保存し、開いているアプリケーションを閉じるための時間が必要な場合にのみ、再起動をスヌーズする を選択し
ず。


Server Encryption のアクティブ化

- ・ サーバーが組織のネットワークに接続されている必要があります。
- ・ サーバーのコンピュータ名が、リモート管理コンソールで表示させたいエンドポイント名になっていることを確認します。
- ・ 初期アクティベーション目的のため、ドメイン管理者資格情報を有するライブのインタラクティブユーザーが、少なくとも一度はサーバーにログオンする必要があります。ログオンしたユーザーは、そのサーバーにおいて、ドメインまたは非ドメイン、リモートデスクトップ接続またはインタラクティブなど、どのようなタイプのユーザーであってもよいですが、アクティベーションにはドメイン管理者資格情報が必要です。
- ・ インストール後の再起動に続いて、アクティブ化 ダイアログが表示されます。管理者は、ユーザープリンシパル名 (UPN) 形式のユーザー名でドメイン管理者資格情報を入力する必要があります。Server Encryption クライアントは、自動ではアクティブ化を行いません。
- ・ 初期アクティベーション中、仮想サーバーユーザーアカウントが作成されます。初期アクティベーション後、コンピュータは再起動され、デバイスアクティベーションを開始できるようになります。
- ・ 認証およびデバイスアクティベーションフェーズ中、コンピュータに固有のマシン ID が割り当てられ、暗号化キーが作成されてバンドルされ、暗号化キーバンドルと**仮想サーバーユーザー**の間に関係が確立されます。暗号化キーバンドルは、暗号化キーおよびポリシーを新しい仮想サーバーユーザーと関連付けることで、暗号化されたデータ、特定のコンピュータ、および仮想サーバーユーザーの間に永続的な関係を確立します。デバイスアクティベーション後、仮想サーバーユーザーはリモート管理コンソールに SERVER-USER@<完全修飾サーバー名> の形式で表示されます。アクティベーションの詳細については、「[サーバーオペレーティングシステム上でのアクティベーション](#)」を参照してください。

① メモ:

アクティベーション後にサーバーの名前を変更しても、リモート管理コンソールではそのサーバーの表示名は変更されません。ただし、サーバー名が変更された後、Server Encryption クライアントが再度アクティブ化を行うと、新しいサーバー名がリモート管理コンソールに表示されます。

アクティブ化 ダイアログは、再起動が終わるたびに表示され、Server Encryption をアクティブ化するようにユーザーを促します。アクティベーションが完了していない場合は、次の手順に従ってください。

- 1 サーバーに直接またはリモートデスクトップ接続を介してログオンします。
- 2 システムトレイにある Encryption アイコン  を右クリックし、**バージョン情報** をクリックします。
- 3 Encryption がサーバーモードで実行中であることを確認します。
- 4 メニューから **Dell Data Protection | Encryption のアクティブ化** を選択します。
- 5 ドメイン管理者の UPN 形式のユーザー名とパスワードを入力し、**アクティブ化** をクリックします。これは、アクティブ化されていないシステムが再起動されるたびに表示される アクティブ化 ダイアログと同じものです。

DDP Server は、マシン ID 用の暗号化キーの発行、**仮想サーバーユーザーアカウント**の作成、ユーザーアカウント用の暗号化キーの作成、暗号化キーのバンドル化を行い、暗号化バンドルと仮想サーバーユーザーアカウントの間関係を確立します。

- 6 **閉じる** をクリックします。

アクティベーション後、暗号化が開始されます。

- 7 暗号化スweepが完了した後、前に使用中だったファイル进行处理するために、コンピュータを再起動します。これは、セキュリティ上重要な手順です。

① **メモ:** *Windows 資格情報のセキュア化ポリシーが True に設定されている場合、Server Encryption は Windows 資格情報を含む \Windows\system32\config のファイルを暗号化します。 \Windows\system32\config 内のファイルは、SDE 暗号化有効ポリシーが未選択である場合であっても暗号化されます。デフォルトでは、Windows 資格情報のセキュア化ポリシーは選択済みです。*

① **メモ:**
コンピュータの再起動後、共有キーマテリアルの認証には保護対象サーバーのマシンキーが常に必要となります。DDP Server は、資格情報コンテナ内の暗号化キーとポリシーにアクセスするためのロック解除キーを返します。(これらのキーおよびポリシーはサーバー用であり、ユーザー用ではありません)。サーバーのマシンキーなしでは、共有ファイル暗号化キーのロックを解除することはできず、コンピュータはポリシーアップデートを受信することができません。

アクティベーションの確認

ローカルコンソールから、バージョン情報 ダイアログを開いて、Server Encryption がインストール済みかつ認証済みであり、サーバーモードで動作していることを確認します。Shield ID が赤色で表示されている場合、暗号化はまだアクティブ化されていません。

仮想サーバーユーザー

- ・ リモート管理コンソールでは、保護対象サーバーはそのマシン名下にあります。さらに、各保護対象サーバーは、独自の仮想サーバーユーザーアカウントを持っています。各アカウントは、固有の静的ユーザー名と固有のマシン名を持っています。
- ・ 仮想サーバーユーザーアカウントは、Server Encryption によってのみ使用され、それ以外の面では保護対象サーバーの動作に対して透過的です。仮想サーバーユーザーは、暗号化キーバンドルとポリシープロキシに関連付けられます。
- ・ アクティベーション後、仮想サーバーユーザーアカウントは、アクティブ化済みで、サーバーに関連付けられているユーザーアカウントです。
- ・ 仮想サーバーユーザーアカウントがアクティブ化された後、すべてのサーバーログオン/ログオフ通知は無視されます。代わりに、コンピュータは起動中に仮想サーバーユーザーで自動的に認証し、Dell Data Protection サーバーからマシンキーをダウンロードします。

SED Management と Advanced Authentication クライアントのインストール

- ・ SED クライアントは、v8.x の Advanced Authentication に必要です。
- ・ EnTrust または Verisign などのルート証明機関によって署名された証明書を組織で使用している場合は、「[SED クライアントの要件](#)」を見直します。SSL/TLS 信頼検証を有効にするには、クライアントコンピュータでレジストリ設定を変更する必要があります。
- ・ ユーザーは、Windows 資格情報を使用して PBA にログインします。
- ・ SED および Advanced Authentication クライアントインストーラは次の場所にあります。
 - ・ [support.dell.com](#) から - 必要に応じて、[support.dell.com](#) から ソフトウェアを入手して、マスターインストーラから子インストーラを抽出します。抽出後、**C:\extracted\Security Tools** および **C:\extracted\Security Tools\Authentication** でファイルを見つけます。
 - ・ お使いの Dell FTP アカウントから - DDP-Enterprise-Edition-8.x.x.xxx.zip でインストールバンドルを見つけてから、マスターインストーラから子インストーラを抽出します。抽出後、**C:\extracted\Security Tools** および **C:\extracted\Security Tools\Authentication** でファイルを見つけます。

コマンドラインでのインストール

- ・ 次の表に、インストールで使用できるパラメータの詳細を示します。



パラメータ

CM_EDITION=1 <remote management>

INSTALLDIR=<change the installation destination>

SERVERHOST=<securityserver.organization.com>

SERVERPORT=8888

SECURITYSERVERHOST=<securityserver.organization.com>

SECURITYSERVERPORT=8443

ARPSYSTEMCOMPONENT=1 < [コントロールパネルプログラム] リストにエントリしない>

コマンドラインで使用可能な基本的な .msi スイッチおよび表示オプションについては、「[子インストーラを使用したインストーラ](#)」を参照してください。

コマンドラインの例

\Security Tools

- 次の例では、サイレントインストール、再起動なし、コントロールパネルプログラム リストにエントリなし、デフォルトの場所 **C:\Program Files\Dell\Dell Data Protection** にインストールするという設定で、リモート管理される SED をインストールします。

```
EMAgent_XXbit_setup.exe /s /v"CM_EDITION=1 SERVERHOST=server.organization.com SERVERPORT=8888  
SECURITYSERVERHOST=server.organization.com SECURITYSERVERPORT=8443 ARPSYSTEMCOMPONENT=1 /  
norestart /qn"
```

次の操作:

\Security Tools\Authentication

- 次の例では、サイレントインストール、再起動なし、という設定で Advanced Authentication をインストールします。

```
setup.exe /s /v"/norestart /qn ARPSYSTEMCOMPONENT=1"
```

Cloud Edition のインストール

- Cloud Edition をインストールする前に**、EE Server/VE Server でいくつかの作業を完了しておく必要があります。「[Cloud Edition のためのサーバーの設定](#)」を参照してください。
- 組織で Dropbox for Business を使用している場合は、「[Dropbox for Business での Cloud Edition の使用](#)」を参照してください。
- クラウド同期クライアント内のファイルおよびフォルダを保護するには、Cloud Edition ユーザーが次のタスクを実行する必要があります。クラウドクライアントのインストール後、ユーザーは次の操作を行う必要があります。

- Cloud Edition をアクティブ化します。
- クラウドストレージプロバイダをダウンロードします。
 - 管理者は、会社で優先するクラウド同期プロバイダを指定する必要があります。

または [内部接続ポートを編集...](#) のいずれかをクリックします。

- 会社でこれらのプロバイダのいずれかを使用する場合は、ビジネス向け Dropbox または OneDrive for Business をダウンロードおよびインストールするためのリンクをユーザーに提供します。ビジネス向け Dropbox ユーザーは、Cloud Edition 経由でビジネス向け Dropbox に接続する必要があることに注意してください。

ユーザーは、『[Cloud Edition User Guide](#)』（Cloud Edition ユーザーガイド）でアクティブ化および他の Cloud Edition ユーザータスクに関する情報を確認できます。

- Cloud Edition クライアントインストーラは、次の場所にあります。
 - support.dell.com** から - 必要に応じて、support.dell.com から [ソフトウェアを入手して](#)、マスターインストーラから子インストーラを抽出します。抽出後、**C:\extracted\Cloud** でファイルを見つけます。
 - お使いの **Dell FTP アカウント** から - DDP-Enterprise-Edition-8.x.x.xxx.zip でインストールバンドルを見つけてから、マスターインストーラから子インストーラを抽出します。抽出後、**C:\extracted\Cloud** でファイルを見つけます。

コマンドラインでのインストール

- 次の表に、インストールで使用できるパラメータの詳細を示します。

パラメータ

SERVER=<ServerName>

コマンドラインの例

- 次の例では、サイレントインストール、再起動なし、デフォルト場所の **C:\Program Files\Dell\Dell Data Protection** にインストールするという設定で Cloud Edition をインストールします。

```
Cloud_XXbit_setup.exe /s /v"SERVER=securityserver.organization.com /norestart /qn"
```

BitLocker Manager クライアントのインストール

- EnTrust または Verisign などのルート証明機関によって署名された証明書を組織で使用している場合は、「[BitLocker Manager クライアントの要件](#)」を見直します。SSL/TLS 信頼検証を有効にするには、クライアントコンピュータでレジストリ設定を変更する必要があります。
- BitLocker Manager クライアントインストーラは、次の場所にあります。
 - support.dell.com** から - 必要に応じて、support.dell.com から [ソフトウェアを入手して](#)、マスターインストーラから子インストーラを抽出します。抽出後、**C:\extracted\Security Tools** でファイルを見つけます。
 - お使いの **Dell FTP アカウント** から - DDP-Enterprise-Edition-8.x.x.xxx.zip でインストールバンドルを見つけてから、マスターインストーラから子インストーラを抽出します。抽出後、**C:\extracted\Security Tools** でファイルを見つけます。

コマンドラインでのインストール

- 次の表に、インストールで使用できるパラメータの詳細を示します。

パラメータ

CM_EDITION=1 <remote management>

INSTALLDIR=<change the installation destination>

SERVERHOST=<securityserver.organization.com>

SERVERPORT=8888

SECURITYSERVERHOST=<securityserver.organization.com>

SECURITYSERVERPORT=8443

FEATURE=BLM <install BitLocker Manager only>

FEATURE=BLM,SED <install BitLocker Manager with SED>



パラメータ

ARPSYSTEMCOMPONENT=1 < [コントロールパネルプログラム] リストにエントリしない >

コマンドラインで使用可能な基本的な .msi スイッチおよび表示オプションについては、「[子インストーラを使用したインストール](#)」を参照してください。

コマンドラインの例

- 次の例では、サイレントインストール、再起動なし、コントロールパネルプログラム リストにエントリしない、デフォルトの場所 **C:\Program Files\Dell\Dell Data Protection** にインストールという設定で、BitLocker Manager のみをインストールします。

```
EMAgent_XXbit_setup.exe /s /v"CM_EDITION=1 SERVERHOST=server.organization.com SERVERPORT=8888 SECURITYSERVERHOST=server.organization.com SECURITYSERVERPORT=8443 FEATURE=BLM /norestart /qn"
```

- 次の例では、サイレントインストール、再起動なし、コントロールパネルプログラム リストにエントリしない、デフォルトの場所 **C:\Program Files\Dell\Dell Data Protection** にインストールという設定で、BitLocker Manager を SED と一緒にインストールします。

```
EMAgent_XXbit_setup.exe /s /v"CM_EDITION=1 SERVERHOST=server.organization.com SERVERPORT=8888 SECURITYSERVERHOST=server.organization.com SECURITYSERVERPORT=8443 FEATURE=BLM,SED /norestart /qn"
```


子インストーラを使用したアンインストール

- ・ クライアントを個別にアンインストールする場合は、「[マスターインストーラからの子インストーラの抽出](#)」の説明にあるとおり、まず最初に実行可能子ファイルを マスターインストーラから抽出する必要があります。
- ・ アンインストールには、インストール時と同じバージョンのクライアントを使用するようにしてください。
- ・ コマンドラインのスイッチおよびパラメータは大文字と小文字を区別します。
- ・ コマンドラインでは、空白などの特殊文字を1つ、または複数含む値は、エスケープされた引用符で囲むようにしてください。コマンドラインパラメータでは大文字と小文字を区別します。
- ・ これらのインストーラを使用し、スクリプトインストールやバッチファイルを利用するか、組織で利用できる他のプッシュ技術を活用して、クライアントをアンインストールします。
- ・ ログファイル - Windows はログインしたユーザー用に、固有の子インストーラアンインストールログファイルを **C:\Users \<UserName>\AppData\Local\Temp**. にある %temp% に作成します。

インストーラの実行時に別のログファイルを追加することにした場合、子インストーラログファイルは付加しないことから、そのログファイルには独自の名前を付けるようにしてください。/**C:\<any directory>\<any log file name>.log** を使用することによって、ログファイルの作成に標準の .msi コマンドを使用することができます。そのログファイルにユーザー名 / パスワードが記録されるため、デルではコマンドラインアンインストールで「/!v」（詳細ロギング）を使用することをお勧めしません。

- ・ すべての子インストーラは、特に記載がない限り、コマンドラインでのアンインストールで同じ基本的な .msi スイッチと表示オプションを使用します。スイッチは最初に指定する必要があります。/v スイッチは必須であり、引数が必要です。その他のパラメータは、/v スイッチに渡される引数に指定します。

表示オプションは、目的の動作を実行させるために /v スイッチに渡される引数の末尾に指定することができます。同じコマンドラインで、/q と /qn の両方を使用しないでください。「!」および「-」は「/qb」の後にのみ使用してください。

スイッチ	意味
/v	setup.exe 内の .msi に変数を渡します。
/s	サイレントモード
/x	アンインストールモード
オプション	意味
/q	進行状況ダイアログなし、処理完了後に自動で再起動
/qb	キャンセル ボタン付きの進捗状況ダイアログ、再起動のプロンプト表示
/qb-	キャンセル ボタン付きの進捗状況ダイアログ、処理完了後に自動で再起動
/qb!	キャンセル ボタンなしの進捗状況ダイアログ、再起動のプロンプト表示
/qb!-	キャンセル ボタンなしの進捗状況ダイアログ、処理完了後に自動で再起動
/qn	ユーザーインタフェースなし



Encryption および Server Encryption クライアントのアンインストール

- ・ 復号化にかかる時間を短縮するため、Windows ディスククリーンアップを実行して、一時ファイルやその他の不要なデータを削除します。
- ・ 可能であれば、復号化は夜間に実行してください。
- ・ スリープモードをオフにして、誰も操作していないコンピュータがスリープ状態になるのを防ぎます。スリープ状態のコンピュータでは復号化は行われません。
- ・ ロックされたファイルが原因で復号化が失敗する可能性を最小限に抑えるために、すべてのプロセスおよびアプリケーションをシャットダウンします。
- ・ アンインストールが完了して、復号化が進行中になったら、すべてのネットワーク接続を無効にします。そうしなければ、暗号化を再度有効にする新しいポリシーが取得される場合があります。
- ・ ポリシーアップデートの発行など、データを復号化するための既存の手順に従います。
- ・ Windows および EME Shield は、Shield アンインストール処理の開始時に EE Server/VE Server をアップデートして、ステータスを *保護されていません* に変更します。ただし、クライアントが EE Server/VE Server に接続できない場合は、理由にかかわらず、ステータスはアップデートされません。このような場合は、リモート管理コンソールで、**エンドポイントを手動で削除**する必要があります。組織がコンプライアンス目的でこのワークフローを使用する場合は、リモート管理コンソールまたは Compliance Reporter で、*保護されていません* が予測どおりに設定されていることを確認することが推奨されます。

プロセス

- ・ アンインストール処理を開始する前に、「[\(オプション\) Encryption Removal Agent のログファイルの作成](#)」を参照してください。このログファイルは、アンインストールや復号化操作のトラブルシューティングを行う際に便利です。アンインストール処理中にファイルの復号化を行うつもりがない場合は、Encryption Removal Agent ログファイルを作成する必要はありません。
- ・ **Encryption Removal Agent** のサーバーからのキーのダウンロード オプションを使用する場合は、アンインストール前に Key Server (および EE Server) を設定する必要があります。手順については、「[EE Server に対してアクティブ化された Encryption クライアントのアンインストールのための Key Server の設定](#)」を参照してください。VE Server は Key Server を使用しないので、アンインストールするクライアントが VE Server に対してアクティブ化される場合、事前のアクションは不要です。
- ・ **Encryption Removal Agent - ファイルからキーをインポート** オプションを使用する場合、Encryption Removal Agent を起動する前に Dell Administrative Utility (CMGAd) を使用する必要があります。このユーティリティは、暗号化キーバンドルの取得に使用されます。手順については「[Administrative Download Utility \(CMGAd\) の使用](#)」を参照してください。このユーティリティは、Dell インストールメディアにあります。
- ・ アンインストールが完了した後、コンピュータを再起動する前に、WSScan を実行して、すべてのデータが復号化されていることを確認します。手順については、「[WSScan の使用](#)」を参照してください。
- ・ 「[Encryption Removal Agent ステータスのチェック](#)」を定期的に行ってください。Encryption Removal Agent Service がまだサービスパネルに存在している場合、データ復号化はまだ進行中です。

コマンドラインでのアンインストール

- ・ マスターインストーラから抽出した後、Encryption クライアントインストーラは `C:\extracted\Encryption\DDPE_XXbit_setup.exe` で見つけることができます。
- ・ 次の表に、アンインストールで使用できるパラメータの詳細を示します。

パラメータ	選択
CMG_DECRYPT	Encryption Removal Agent のインストールタイプを選択するためのプロパティ： 3 - LSARecovery バンドルを使用 2 - 以前にダウンロードしたフォレンジックキーマテリアルを使用 1 - EE Server/VE Server からキーをダウンロード

パラメータ

選択

CMGSILENTMODE	0 - Encryption Removal Agent をインストールしない サイレントアンインストールのプロパティ 1 - サイレント 0 - 非サイレント
必須のプロパティ	
DA_SERVER	ネゴシエーションセッションをホストする EE Server の FQHN。
DA_PORT	EE Server 上の要求用ポート（デフォルトは 8050）。
SVCPCN	EE Server で Key Server サービスがログオンされている UPN 形式のユーザー名。
DA_RUNAS	キーフェッチリクエストが行われるコンテキストでの SAM 対応形式のユーザー名。このユーザーは、EE Server の Key Server リストに存在している必要があります。
DA_RUNASPWD	runas ユーザーのパスワード。
FORENSIC_ADMIN	VE Server 上のフォレンジック管理者アカウント。このアカウントは、Server が VE Server である場合に限り使用されます。
FORENSIC_ADMIN_PWD	フォレンジック管理者アカウントのパスワード。このアカウントは、Server が VE Server である場合に限り使用されます。
メモ: フォレンジック管理者アカウントは、リモート管理コンソールで作成されます。サーバーが EE Server である場合、パラメータは DA_PORT と SVCPCN を使用してください。	
オプションのプロパティ	
SVCLOGONUN	パラメータとして Encryption Removal Agent サービスログオンするための UPN 形式のユーザー名。
SVCLOGONPWD	ユーザーとしてログオンするためのパスワード。

- 次の例は、Encryption クライアントをアンインストールし、EE Server から暗号化キーをダウンロードします。

```
DDPE_XXbit_setup.exe /x /v"CMG_DECRYPT=\"1\" CMGSILENTMODE=\"1\" DA_SERVER=
\"server.organization.com\" DA_PORT=\"8050\" SVCPCN=\"administrator@organization.com\"
DA_RUNAS=\"ORGANIZATION\UserInKeyServerList\" DA_RUNASPWD=\"password\" /qn"
```

終了したらコンピュータを再起動します。

- 次の例は、Encryption クライアントをアンインストールし、フォレンジック管理者アカウントを使用して VE Server から暗号化キーをダウンロードします。

```
DDPE_XXbit_setup.exe /x /v"CMG_DECRYPT=\"1\" CMGSILENTMODE=\"1\" FORENSIC_ADMIN=
\"tempsuperadmin\" FORENSIC_ADMIN_PWD=\"tempchangeit\" /qn"
```

終了したらコンピュータを再起動します。



① 重要:

クライアントが VE Server に対してアクティブ化されているときに、コマンドラインでフォレンジック管理者パスワードを使用する場合は、次のアクションをお勧めします。

- 1 リモート管理コンソールで、サイレントアンインストール実行用のフォレンジック管理者アカウントを作成します。
- 2 そのアカウント用に、アカウントと期間に固有の一時的なパスワードを設定します。
- 3 サイレントアンインストールが完了したら、管理者のリストから一時的なアカウントを削除するか、そのパスワードを変更します。

External Media Edition のアンインストール

Encryption クライアントインストーラは、マスターインストーラから抽出された後、C:\extracted\Encryption\DDPE_XXbit_setup.exe に置かれます。

コマンドラインでのアンインストール

次のようなコマンドラインを実行します。

```
DDPE_XXbit_setup.exe /s /x /v"/qn"
```

終了したらコンピュータを再起動します。

SED クライアントおよび Advanced Authentication クライアントのアンインストール

- ・ PBA 非アクティブ化には、EE Server/VE Server へのネットワーク接続が必要です。

プロセス

- ・ PBA を非アクティブ化します。これにより、コンピュータからすべての PBA データが削除され、SED キーがロック解除されます。
- ・ SED クライアントをアンインストールします。
- ・ Advanced Authentication クライアントをアンインストールします。

PBA の非アクティブ化

- 1 リモート管理コンソールに Dell 管理者としてログインします。
- 2 左ペインで、**保護と管理 > エンドポイント** をクリックします。
- 3 適切なエンドポイントの種類を選択します。
- 4 表示 > **表示**、**非表示** または **すべて** を選択します。
- 5 コンピュータのホスト名がわかっている場合は、そのホスト名を **ホスト名 フィールド** に入力します。ワイルドカードも使用できます。このフィールドを空白のままにすると、すべてのコンピュータが表示されます。**検索** をクリックします。

ホスト名がわからない場合は、リストをスクロールして該当するコンピュータを探します。

検索フィルタに基づいて、1台のコンピュータ、またはコンピュータのリストが表示されます。

- 6 該当するコンピュータの **詳細** アイコンを選択します。
- 7 上部メニューの **セキュリティポリシー** をクリックします。
- 8 **ポリシーカテゴリ** ドロップダウンメニューから、**自己暗号化ドライブ** を選択します。
- 9 **SED 管理** エリアを展開し、**SED 管理の有効化** ポリシーおよび **PBA のアクティブ化** ポリシーを True から False に変更します。



- 10 **保存** をクリックします。
- 11 左ペインで、**アクション > ポリシーのコミット** をクリックします。
- 12 **変更の適用** をクリックします。

ポリシーが EE Server/VE Server から非アクティブ化対象のコンピュータに反映されるまで待ちます。

PBA が非アクティブ化された後、SED および Advanced Authentication クライアントをアンインストールします。

SED クライアントおよび Advanced Authentication クライアントのアンインストール

コマンドラインでのアンインストール

- ・ マスターインストーラから抽出した後は、**C:\extracted\Security Tools\EMAgent_XXbit_setup.exe** で SED クライアントインストーラを見つけることができます。
- ・ マスターインストーラから抽出した後は、**C:\extracted\Security Tools\Authentication\<x64/x86>\setup.exe** で SED クライアントインストーラを見つけることができます。
- ・ 次の例は、SED クライアントをサイレントアンインストールします。

```
EMAgent_XXbit_setup.exe /x /s /v" /qn"
```

終了したらコンピュータをシャットダウンして再起動します。

次の操作：

- ・ 次の例は、Advanced Authentication クライアントをサイレントアンインストールします。

```
setup.exe /x /s /v" /qn"
```

終了したらコンピュータをシャットダウンして再起動します。

BitLocker Manager クライアントのアンインストール

コマンドラインでのアンインストール

- ・ マスターインストーラから抽出した後は、**C:\extracted\Security Tools\EMAgent_XXbit_setup.exe** で BitLocker クライアントインストーラを見つけることができます。
- ・ 次の例は、BitLocker Manager クライアントをサイレントアンインストールします。

```
EMAgent_XXbit_setup.exe /x /s /v" /qn"
```

終了したらコンピュータを再起動します。

Cloud Edition のアンインストール

- ・ **エンドユーザー**は、ローカル管理者アカウントを持っている場合、Cloud Edition をアンインストールできます。詳細については、『Cloud Edition ユーザーガイド』を参照してください。本項では、Cloud Edition をアンインストールする管理者の手順について説明します。

① **重要:** Cloud Edition をアンインストールする前に、Cloud Edition 仮想ドライブ外の場所に重要なファイルをすべて移動します。エンドユーザーのコンピュータから Cloud Edition がアンインストールされると、クラウド内のフォルダとファイルは暗号化されて読み取れなくなります。このエンドユーザーが会社を退職し、他のユーザーの誰ともそのフォルダまたはファイルを共有していない場合、データは読み取ることはできませんが、セキュリティ保護されます (ファイルを表示するには、Cloud Edition を再インストールします)。



コマンドラインでのアンインストール

- ・ Cloud Edition クライアントインストーラは、マスターインストーラから抽出された後、`C:\extracted\Cloud\Cloud_XXbit_setup.exe`.
- ・ 次の例は、Cloud Edition クライアントをサイレントアンインストールします。

```
Cloud_XXbit_setup.exe /x /s /v" /qn"
```

指示に従ってコンピュータを再起動します。



一般的なシナリオ

- 各クライアントを個別にインストールするには、「[マスターインストーラからの子インストーラの抽出](#)」にあるように、まず始めにマスターインストーラから子実行可能ファイルを抽出する必要があります。
- SED クライアントは、v8.x で Advanced Authentication に必要であり、このため次の例でコマンドラインの一部になっています。
- コマンドラインのスイッチおよびパラメータは大文字と小文字を区別します。
- コマンドラインでは、空白などの特殊文字を1つ、または複数含む値は、エスケープされた引用符で囲むようにしてください。
- これらのインストーラを使用し、スクリプトインストールやバッチファイルを利用するか、組織で利用できる他のプッシュ技術を活用して、クライアントをインストールします。
- コマンドラインの例では、再起動は省略されています。ただし、最終的には再起動する必要があります。暗号化は、コンピュータが再起動されるまで開始できません。
- ログファイル — Windows は、`C:\Users\\AppData\Local\Temp` にある `%temp%` に、ログインしたユーザー用の固有の子インストーラインストールログファイルを作成します。

インストーラの実行時に別のログファイルを追加することにした場合、子インストーラログファイルは付加しないことから、そのログファイルには独自の名前を付けるようにしてください。`C:\<any directory>\<any log file name>.log` を使用することによって、ログファイルの作成に標準の .msi コマンドを使用することができます。

- すべての子インストーラは、特に記載がない限り、コマンドラインでのインストールで同じ基本的な .msi スイッチと表示オプションを使用します。スイッチは最初に指定する必要があります。/v スイッチは必須であり、引数が必要です。その他のパラメータは、/v スイッチに渡される引数に指定します。

表示オプションは、目的の動作を実行させるために、/v スイッチに渡される引数の末尾に指定することができます。同じコマンドラインで、/q と /qn の両方を使用しないでください。「!」および「-」は「/qb」の後のみ使用してください。

スイッチ	意味
/v	*.exe 内の .msi に変数を渡す
/s	サイレントモード
/i	インストールモード
オプション	意味
/q	進行状況ダイアログなし、処理完了後に自動で再起動
/qb	キャンセル ボタン付きの進捗状況ダイアログ、再起動のプロンプト表示
/qb-	キャンセル ボタン付きの進捗状況ダイアログ、処理完了後に自動で再起動
/qb!	キャンセル ボタンなしの進捗状況ダイアログ、再起動のプロンプト表示
/qb!-	キャンセル ボタンなしの進捗状況ダイアログ、処理完了後に自動で再起動
/qn	ユーザーインターフェースなし

- アプリケーションに関するサポートが必要なときには、次のマニュアルとヘルプファイルを参照するようにユーザーに指示します。
 - Encryption クライアントの各機能の使用方法については、『[Dell Encrypt Help](#)』（Dell Encrypt ヘルプ）を参照してください。このヘルプには、`<install dir>\Program Files\Dell\Dell Data Protection\Encryption\Help` からアクセスします。



- External Media Shield の各機能の使用方法については、『EMS Help』（EMS ヘルプ）を参照してください。このヘルプには、<Install dir>\Program Files\Dell\Dell Data Protection\Encryption\EMS からアクセスします。
- Advanced Authentication の機能の使用方法については、『Security Tools Help』（Security Tools ヘルプ、Endpoint Security Suite ヘルプ、Endpoint Security Suite Enterprise ヘルプ）を参照してください。ヘルプには、<Install dir>\Program Files\Dell\Dell Data Protection\Security Tools\Help からアクセスしてください。

Encryption クライアント、および Advanced Authentication

- 次の例では、指定した場所に、TPM 用の信頼済みソフトウェアスタック（TSS）、および Microsoft ホットフィックスのドライバをインストールし、コントロールパネルプログラムリストにはエントリを作成せず、再起動は実行しません。

これらのドライバは Encryption クライアントをインストールする際にインストールする必要があります。

```
setup.exe /s /z "\"InstallPath=<c:\location>, ARPSYSTEMCOMPONENT=1, SUPPRESSREBOOT=1\""
```

次の操作：

- 次の例では、サイレントインストール、再起動なし、コントロールパネルプログラムリストにエントリなし、デフォルトの場所 **C:\Program Files\Dell\Dell Data Protection** にインストールという設定で、リモート管理される SED をインストールします。

```
EMAgent_XXbit_setup.exe /s /v"CM_EDITION=1 SERVERHOST=server.organization.com SERVERPORT=8888 SECURITYSERVERHOST=server.organization.com SECURITYSERVERPORT=8443 ARPSYSTEMCOMPONENT=1 /norestart /qn"
```

次の操作：

- 次の例では、サイレントインストール、再起動なし、デフォルト場所の **C:\Program Files\Dell\Dell Data Protection\Authentication** にインストールするという設定で Advanced Authentication をインストールします。

```
setup.exe /s /v"/norestart /qn ARPSYSTEMCOMPONENT=1"
```

- 次の操作：

- 次の例では、Encryption クライアントと Encrypt for Sharing、ダイアログなし、プログレスバーなし、再起動なし、デフォルトの場所 **C:\Program Files\Dell\Dell Data Protection** にインストールというデフォルトのパラメータで Encryption クライアントをインストールします。

```
DDPE_XXbit_setup.exe /s /v"SERVERHOSTNAME=server.organization.com POLICYPROXYHOSTNAME=rgk.organization.com MANAGEDDOMAIN=ORGANIZATION DEVICESERVERURL=https://server.organization.com:8443/xapi/ /norestart /qn"
```

EE Server が v7.7 より前の場合は、DEVICESERVERURL=https://server.organization.com:8081/xapi（末尾のスラッシュなし）を置き換えます。

SED クライアント（Advanced Authentication を含む）および External Media Shield

- 次の例では、サイレントインストール、再起動なし、コントロールパネルプログラムリストにエントリなし、デフォルトの場所 **C:\Program Files\Dell\Dell Data Protection** にインストールという設定で、リモート管理される SED をインストールします。

```
EMAgent_XXbit_setup.exe /s /v"CM_EDITION=1 SERVERHOST=server.organization.com SERVERPORT=8888 SECURITYSERVERHOST=server.organization.com SECURITYSERVERPORT=8443 ARPSYSTEMCOMPONENT=1 /norestart /qn"
```

次の操作：

- 次の例では、サイレントインストール、再起動なし、デフォルト場所の **C:\Program Files\Dell\Dell Data Protection\Authentication** にインストールするという設定で Advanced Authentication をインストールします。

```
setup.exe /s /v"/norestart /qn ARPSYSTEMCOMPONENT=1"
```

次の操作：

- 次の例では、サイレントインストール、再起動なし、デフォルト場所の **C:\Program Files\Dell\Dell Data Protection** にインストールするという設定で、EMS のみをインストールします。

```
DDPE_XXbit_setup.exe /s /v"EME=1 SERVERHOSTNAME=server.organization.com  
POLICYPROXYHOSTNAME=rgk.organization.com DEVICESERVERURL=https://server.organization.com:8443/  
xapi/ MANAGEDDOMAIN=ORGANIZATION /norestart /qn"
```

EE Server が v7.7 より前の場合は、DEVICESERVERURL=https://server.organization.com:**8081/xapi** (末尾のスラッシュなし) を置き換えます。

SED クライアント (Advanced Authentication を含む)、External Media Edition、および Cloud Edition

- 次の例では、指定した場所に、TPM 用の信頼済みソフトウェアスタック (TSS)、および Microsoft ホットフィックスのドライバをインストールし、コントロールパネルプログラムリストにはエントリを作成せず、再起動は実行しません。

これらのドライバは、Encryption Client をインストールする際にインストールする必要があります。

```
setup.exe /S /z "\"InstallPath=<c:\location>, ARPSYSTEMCOMPONENT=1, SUPPRESSREBOOT=1\""
```

次の操作：

- 次の例では、サイレントインストール、再起動なし、コントロールパネルプログラム リストにエントリなし、デフォルトの場所 **C:\Program Files\Dell\Dell Data Protection** にインストールという設定で、リモート管理される SED をインストールします。

```
EMAgent_XXbit_setup.exe /s /v"CM_EDITION=1 SERVERHOST=server.organization.com SERVERPORT=8888  
SECURITYSERVERHOST=server.organization.com SECURITYSERVERPORT=8443 ARPSYSTEMCOMPONENT=1 /  
norestart /qn"
```

次の操作：

- 次の例では、サイレントインストール、再起動なし、デフォルト場所の **C:\Program Files\Dell\Dell Data Protection\Authentication** にインストールするという設定で Advanced Authentication をインストールします。

```
setup.exe /s /v"/norestart /qn ARPSYSTEMCOMPONENT=1"
```

次の操作：

- 次の例では、Encryption クライアントと Encrypt for Sharing、ダイアログなし、プログレスバーなし、再起動なし、デフォルトの場所 **C:\Program Files\Dell\Dell Data Protection** にインストールというデフォルトのパラメータでクライアントをインストールします。

```
DDPE_XXbit_setup.exe /s /v"SERVERHOSTNAME=server.organization.com  
POLICYPROXYHOSTNAME=rgk.organization.com MANAGEDDOMAIN=ORGANIZATION DEVICESERVERURL=https://  
server.organization.com:8443/xapi/ /norestart /qn"
```

EE Server が v7.7 より前の場合は、DEVICESERVERURL=https://server.organization.com:**8081/xapi** (末尾のスラッシュなし) を置き換えます。

次の操作：

- 次の例では、サイレントインストール、再起動なし、デフォルト場所の **C:\Program Files\Dell\Dell Data Protection** にインストールするという設定で Cloud Edition をインストールします。

```
Cloud_XXbit_setup.exe /s /v"SERVER=securityserver.organization.com /norestart /qn"
```

Encryption Client および Cloud Edition

- 次の例では、指定した場所に、TPM 用の信頼済みソフトウェアスタック (TSS)、および Microsoft ホットフィックスのドライバをインストールし、コントロールパネルプログラムリストにはエントリを作成せず、再起動は実行しません。

これらのドライバは、Encryption Client をインストールするときにインストールする必要があります。

```
setup.exe /S /z "\"InstallPath=<c:\location>, ARPSYSTEMCOMPONENT=1, SUPPRESSREBOOT=1\""
```

次の操作：



- 次の例では、Encryption クライアントと Encrypt for Sharing、ダイアログなし、プログレスバーなし、再起動なし、デフォルトの場所 **C:\Program Files\Dell\Dell Data Protection** にインストールというデフォルトのパラメータでクライアントをインストールします。

```
DDPE_XXbit_setup.exe /s /v"SERVERHOSTNAME=server.organization.com  
POLICYPROXYHOSTNAME=rgk.organization.com MANAGEDDOMAIN=ORGANIZATION DEVICESTRIVERURL=https://  
server.organization.com:8443/xapi/ /norestart /qn"
```

EE Server が v7.7 より前の場合は、DEVICESTRIVERURL=https://server.organization.com:**8081/xapi**（末尾のスラッシュなし）を置き換えます。

次の操作：

- 次の例では、サイレントインストール、再起動なし、デフォルト場所の **C:\Program Files\Dell\Dell Data Protection** にインストールするという設定で Cloud Edition をインストールします。

```
Cloud_XXbit_setup.exe /s /v"SERVER=securityserver.organization.com /norestart /qn"
```

BitLocker Manager および External Media Shield

- 次の例では、サイレントインストール、再起動なし、コントロールパネルプログラム リストにエントリなし、デフォルトの場所 **C:\Program Files\Dell\Dell Data Protection** にインストールという設定で、BitLocker Manager をインストールします。

```
EMAgent_XXbit_setup.exe /s /v"CM_EDITION=1 SERVERHOST=server.organization.com SERVERPORT=8888  
SECURITYSERVERHOST=server.organization.com SECURITYSERVERPORT=8443 FEATURE=BLM /norestart /qn"
```

次の操作：

- 次の例では、サイレントインストール、再起動なし、デフォルト場所の **C:\Program Files\Dell\Dell Data Protection** にインストールするという設定で、EMS のみをインストールします。

```
DDPE_XXbit_setup.exe /s /v"EME=1 SERVERHOSTNAME=server.organization.com  
POLICYPROXYHOSTNAME=rgk.organization.com DEVICESTRIVERURL=https://server.organization.com:8443/  
xapi/ MANAGEDDOMAIN=ORGANIZATION /norestart /qn"
```

EE Server が v7.7 より前の場合は、DEVICESTRIVERURL=https://server.organization.com:**8081/xapi**（末尾のスラッシュなし）を置き換えます。

BitLocker Manager、External Media Edition、および Cloud Edition

- 次の例では、サイレントインストール、再起動なし、コントロールパネルプログラム リストにエントリなし、デフォルトの場所 **C:\Program Files\Dell\Dell Data Protection** にインストールという設定で、BitLocker Manager をインストールします。

```
EMAgent_XXbit_setup.exe /s /v"CM_EDITION=1 SERVERHOST=server.organization.com SERVERPORT=8888  
SECURITYSERVERHOST=server.organization.com SECURITYSERVERPORT=8443 FEATURE=BLM /norestart /qn"
```

次の操作：

- 次の例では、サイレントインストール、再起動なし、デフォルト場所の **C:\Program Files\Dell\Dell Data Protection** にインストールするという設定で EME のみをインストールします。

```
DDPE_XXbit_setup.exe /s /v"EME=1 SERVERHOSTNAME=server.organization.com  
POLICYPROXYHOSTNAME=rgk.organization.com DEVICESTRIVERURL=https://server.organization.com:8443/  
xapi/ MANAGEDDOMAIN=ORGANIZATION /norestart /qn"
```

EE Server が v7.7 より前の場合は、DEVICESTRIVERURL=https://server.organization.com:**8081/xapi**（末尾のスラッシュなし）を置き換えます。

次の操作：

- 次の例では、サイレントインストール、再起動なし、デフォルト場所の **C:\Program Files\Dell\Dell Data Protection** にインストールするという設定で Cloud Edition をインストールします。

```
Cloud_XXbit_setup.exe /s /v"SERVER=securityserver.organization.com /norestart /qn"
```

SED クライアント (Advanced Authentication を含む)、Encryption Client、および Cloud Edition

- 次の例では、指定した場所に、TPM 用の信頼済みソフトウェアスタック (TSS)、および Microsoft ホットフィックスのドライバをインストールし、コントロールパネルプログラムリストにはエントリを作成せず、再起動は実行しません。

これらのドライバは、Encryption Client をインストールする際にインストールする必要があります。

```
setup.exe /s /z "\"InstallPath=<c:\location>, ARPSYSTEMCOMPONENT=1, SUPPRESSREBOOT=1\""
```

次の操作 :

- 次の例では、サイレントインストール、再起動なし、コントロールパネルプログラム リストにエントリなし、デフォルトの場所 **C:\Program Files\Dell\Dell Data Protection** にインストールという設定で、リモート管理される SED をインストールします。

```
EMAgent_XXbit_setup.exe /s /v"CM_EDITION=1 SERVERHOST=server.organization.com SERVERPORT=8888  
SECURITYSERVERHOST=server.organization.com SECURITYSERVERPORT=8443 ARPSYSTEMCOMPONENT=1 /  
norestart /qn"
```

次の操作 :

- 次の例では、サイレントインストール、再起動なし、デフォルト場所の **C:\Program Files\Dell\Dell Data Protection\Authentication** にインストールするという設定で Advanced Authentication をインストールします。

```
setup.exe /s /v"/norestart /qn ARPSYSTEMCOMPONENT=1"
```

次の操作 :

- 次の例では、Encryption クライアントと Encrypt for Sharing、ダイアログなし、プログレスバーなし、再起動なし、デフォルトの場所 **C:\Program Files\Dell\Dell Data Protection** にインストールというデフォルトのパラメータでクライアントをインストールします。

```
DDPE_XXbit_setup.exe /s /v"SERVERHOSTNAME=server.organization.com  
POLICYPROXYHOSTNAME=rgk.organization.com MANAGEDDOMAIN=ORGANIZATION DEVICESERVERURL=https://  
server.organization.com:8443/xapi/ /norestart /qn"
```

EE Server が v7.7 より前の場合は、DEVICESERVERURL=https://server.organization.com:**8081/xapi** (末尾のスラッシュなし) を置き換えます。

次の操作 :

- 次の例では、サイレントインストール、再起動なし、デフォルト場所の **C:\Program Files\Dell\Dell Data Protection** にインストールするという設定で Cloud Edition をインストールします。

```
Cloud_XXbit_setup.exe /s /v"SERVER=securityserver.organization.com /norestart /qn"
```



ソフトウェアをダウンロードします。

このセクションで詳細を取得するには、ソフトウェアから support.dell.com ソフトウェアが既にある場合は、この項を省略できます。

移動を support.dell.com を開始します。

- 1 製品サポートページから、製品を参照します。
- 2 をクリックして、**製品の表示**]ドロップダウンします。
- 3 の製品リストからソフトウェアを選択しますとセキュリティをします。
- 4 を選択します **エンドポイントセキュリティソリューション** では、 **ソフトウェアとセキュリティ**のセクションがあります。この選択された後に行われます。 Web サイトが記憶します。
- 5 Dell Data Protection 製品を選択します。
例：

Dell Data Protection | Encryption

Dell Data Protection | Endpoint Security Suite

Dell Data Protection | Endpoint Security Suite Enterprise

Dell Data Protection | Security Tools

- 6 **ドライバ**を選択しますおよびダウンロードしてください。
- 7 目的のクライアントのオペレーティングシステムの種類を選択します。
- 8 選択した **Dell Data Protection (4 のファイル)** には、一致にします。これは例ですので、これはわずかに異なって見える可能性。たとえば、からを選択して4つのファイルが存在しない場合があります。
- 9 **ダウンロードするファイル**を選択したり、**dd**をマイダウンロードリスト **#2 XX**を押します。

ワンタイムパスワード、SED UEFI、および BitLocker のための事前インストール設定

TPM の初期化

- ・ ローカル管理者グループまたは同等のグループのメンバーである必要があります。
- ・ コンピュータには互換性のある BIOS および TPM が搭載されている必要があります。

ワンタイムパスワード (OTP) を使用する場合、このタスクが必要です。

- ・ <http://technet.microsoft.com/en-us/library/cc753140.aspx> に記載された指示に従ってください。

UEFI コンピュータ用の事前インストール設定

UEFI 起動前認証中におけるネットワーク接続の有効化

UEFI ファームウェア搭載のコンピュータで起動前認証を正常に行うには、PBA にネットワーク接続が必要です。デフォルトで、UEFI ファームウェア搭載のコンピュータにはオペレーティングシステムがロードされるまでネットワーク接続がなく、これは PBA モードの後で実行されます。

次の手順は、UEFI 対応のコンピュータ用の PBA 中にネットワーク接続を有効にします。設定手順は UEFI コンピュータモデルによって異なるので、次の手順は一例に過ぎません。

- 1 UEFI ファームウェア設定を開始します。
- 2 起動中に、「ワンタイム起動メニューの準備中」のようなメッセージが画面の右上に表示されるまで、F2 キーを押し続けます。
- 3 プロンプトが表示されたら、BIOS 管理者パスワードを入力します。

① **メモ:** 通常、新しいコンピュータの場合は BIOS パスワードが設定されていないため、入力が求められることはありません。

- 4 システム設定 を選択します。
- 5 統合 NIC を選択します。
- 6 UEFI ネットワークスタックを有効にする チェックボックスをオンにします。
- 7 有効 または PXE で有効 を選択します。
- 8 適用 を選択します。

① **メモ:** UEFI ファームウェア非搭載のコンピュータには、設定は不要です。

レガシーオプション ROM の無効化

BIOS で **Enable Legacy Option ROMs** (レガシーオプション ROM を有効にする) 設定が無効化されていることを確認します。

- 1 コンピュータを再起動します。



- 再起動中に、繰り返し **F12** を押して UEFI コンピュータの起動設定を表示します。
- 下向き矢印を押して **BIOS 設定** オプションをハイライト表示し、**Enter** を押します。
- 設定 > 一般 > 詳細起動オプション** の順に選択します。
- レガシーオプション ROM を有効にする** チェックボックスのチェックを外して、**適用** をクリックします。

BitLocker PBA パーティションを設定する事前インストール設定

- BitLocker Manager をインストールする **前に** PBA パーティションを作成しておく必要があります。
- BitLocker Manager をインストールする **前に** TPM をオンにしてアクティブ化します。BitLocker Manager は TPM の所有権を取得します（再起動の必要はありません）。ただし、TPM の所有権がすでに存在する場合は、BitLocker Manager が暗号化セットアッププロセスを開始します。ここでのポイントは、TPM が「所有」されている必要があるという点です。
- 場合によっては、ディスクのパーティションを手動で作成する必要があります。詳細については、BitLocker ドライブ準備ツールについての Microsoft による説明を参照してください。
- BdeHdCfg.exe コマンドを使用して PBA パーティションを作成します。default パラメータを指定すると、コマンドラインツールは BitLocker セットアップウィザードと同じ手順に従います。

```
BdeHdCfg -target default
```

① ヒント:

BdeHdCfg コマンドで使用可能な追加オプションについては、「[Microsoft の BdeHdCfg.exe パラメーターリファレンス](#)」を参照してください。

ドメインコントローラでの GPO の設定による資格の有効化

- ・ お使いのクライアントが Dell Digital Delivery (DDD) から資格を得る場合は、これらの手順に従ってドメインコントローラに GPO を設定し、資格を有効にします（このサーバーは、EE Server/VE Server を実行しているサーバーとは異なる場合があります）。
- ・ ワークステーションは、GPO が適用されている OU のメンバーである必要があります。

① **メモ:** EE Server/VE Server との通信に送信ポート 443 が使用可能であることを確認します。ポート 443 が何らかの理由でブロックされている場合、資格機能は機能しません。

- 1 クライアントを管理するドメインコントローラで、**スタート > 管理ツール > グループポリシーの管理** の順にクリックします。
- 2 ポリシーが適用される OU を右クリックし、**このドメインでの GPO の作成** と **このコンテナにリンクする...** を選択します。
- 3 新しい GPO の名前を入力し、ソーススターター GPO には **(なし)** を選択して、**OK** をクリックします。
- 4 作成された GPO を右クリックして **編集** を選択します。
- 5 グループポリシー管理エディタがロードされます。**コンピュータ設定 > プリファレンス > Windows 設定 > レジストリ** の順にアクセスします。
- 6 レジストリを右クリックし、**新規 > レジストリ項目** の順に選択します。次のように設定します。

アクション：作成

ハイブ：HKEY_LOCAL_MACHINE

キーパス：SOFTWARE\Dell\Dell Data Protection

値の名前：Server

値の種類：REG_SZ

値のデータ：<EE Server/VE Server の IP アドレス>

- 7 **OK** をクリックします。
- 8 ログアウトしてもう一度ワークステーションにログイン、または **gpupdate /force** を実行してグループポリシーを適用します。



マスターインストーラからの子インストーラの抽出

- 各クライアントを個別にインストールするには、子の実行可能ファイルをインストーラから抽出します。
 - マスターインストーラはマスターアンインストーラではありません。各クライアントを個別にアンインストールした後で、マスターインストーラのアンインストールを行う必要があります。アンインストールに使用できるように、このプロセスを使用してマスターインストーラからクライアントを抽出します。
- Dell インストールメディアから、**DDPSetup.exe****DDPSuite.exe** ファイルをローカルコンピュータにコピーします。
 - ファイルと同じ場所でコマンドプロンプトを開き、次のように入力します。

```
DDPSetup.exe /z "\"EXTRACT_INSTALLERS=C:\extracted\""
```

抽出パスは 63 文字を超えられません。

インストールを開始する前に、すべての前提条件が満たされており、インストールする予定の各子インストーラに対して必要なすべてのソフトウェアがインストールされていることを確認します。詳細については、「要件」を参照してください。

抽出した子インストーラは **C:\extracted** にあります。

EE Server に対してアクティブ化した Encryption クライアントをアンインストールするための Key Server の設定

- 本項では、EE Server 使用時における Kerberos 認証 / 承認との使用のためにコンポーネントを設定する方法について説明します。VE Server では Key Server は使用しません。

Key Server は、ソケット上で接続されるクライアントをリッスンするサービスです。クライアントが接続されたら、Kerberos API を使用して、セキュア接続のネゴシエーション、認証、暗号化が行われます。セキュア接続がネゴシエーションできない場合、クライアントが切断されます。

Key Server は、クライアントを実行しているユーザーがキーにアクセスできるかどうかを Security Server（以前の Device Server）に確認します。このアクセスは、個別のドメインを経由したリモート管理コンソール上で許可されます。

- Kerberos 認証 / 承認を使用する場合は、Key Server コンポーネントを装備しているサーバーを対象ドメインに含める必要があります。
- VE Server は Key Server を使用しないので、通常のアインストールには影響しません。VE Server に対してアクティブ化されている Encryption クライアントがアンインストールされると、Key Server の Kerberos メソッドの代わりに、Security Server を通じた標準的なフォレンジックキーの取得が使用されます。詳細については、「[コマンドラインのアインストール](#)」を参照してください。

サービスパネル - ドメインアカウントのユーザーの追加

- EE Server で、サービスパネル（スタート > ファイル名を指定して実行 > services.msc > OK）に進みます。
- Key Server を右クリックして、**プロパティ** を選択します。
- ログオンタブを選択し、**このアカウント**：オプションを選択します。

このアカウント：フィールドにドメインアカウントユーザーを追加します。このドメインユーザーには、少なくとも Key Server フォルダのローカル管理権限が必要です。つまり、Key Server の config ファイルに加え、log.txt ファイルにも書き込むことができる必要があります。

ドメインユーザーのパスワードを入力し確認します。

OK をクリックします

- Key Server サービスを再起動します（さらなる操作のため、サービスパネルを開いたままにしておきます）。
- <Key Server インストールディレクトリ> log.txt に移動して、サービスが正しく開始していることを確認します。

キーサーバーの設定ファイル - EE Server の通信のためのユーザーの追加

- <Key Server インストールディレクトリ> に移動します。
- テキストエディタで **Credant.KeyServer.exe.config** を開きます。



- 3 <add key="user" value="superadmin" /> に移動して、「superadmin」の値を、適切なユーザーの名前に変更します。「superadmin」のままとすることもできます。

「superadmin」の形式には、EE Server の認証が受けられる任意の方法を指定できます。SAM アカウント名、UPN、またはドメイン\ユーザー名は容認できます。Active Directory に対する承認のためのユーザーアカウントには検証が必要であることから、EE Server に対して認証できる方法ならどれでも使用できます。

例えば、マルチドメイン環境では、「jdoe」などの SAM アカウント名のみを入力すると失敗する場合があります。その理由は、EE Server で「jdoe」を検索できず、「jdoe」を認証できないためです。マルチドメイン環境では、ドメイン\ユーザー名の形式が容認できますが、UPN が推奨されます。単一ドメイン環境では、SAM アカウント名が容認できます。

- 4 <add key="epw" value="<encrypted value of the password>" /> に移動して、「epw」を「password」に変更します。その後、「<encrypted value of the password>」を、手順 3 のユーザーのパスワードに変更します。このパスワードは、EE Server が再起動すると再度暗号化されます。

手順 3 の「superadmin」を使用していて、superadmin パスワードが「changeit」でない場合は、ここで変更します。ファイルを保存して閉じます。

サンプル設定ファイル

```
<?xml version="1.0" encoding="utf-8" ?>
```

```
<configuration>
```

```
<appSettings>
```

```
<add key="port" value="8050" /> [Key Server がリッスンする TCP ポート。デフォルトは 8050 です。]
```

```
<add key="maxConnections" value="2000" /> [Key Server で許可されるアクティブなソケット接続数]
```

```
<add key="url" value="https://keyserver.domain.com:8443/xapi/" /> [Security Server (以前の Device Server) URL (v7.7 より前の EE Server では、形式は 8081/xapi です)]
```

```
<add key="verifyCertificate" value="false" /> [true では証明書が検証されます / 検証しない場合、または自己署名暗号化を使用する場合は false に設定してください]
```

```
<add key="user" value="superadmin" /> [Security Server との通信に使用されるユーザー名。このユーザーには、リモート管理コンソールで選択した管理者ロールが必要です。「superadmin」の形式には、EE Server の認証が受けられる任意の方法を指定できます。SAM アカウント名、UPN、またはドメイン\ユーザー名は容認できます。Active Directory に対する承認のためのユーザーアカウントには検証が必要であることから、EE Server に対して認証できる方法ならどれでも使用できます。例えば、マルチドメイン環境では、「jdoe」などの SAM アカウント名のみを入力すると失敗する場合があります。その理由は、EE Server で「jdoe」を検索できず、「jdoe」を認証できないためです。マルチドメイン環境では、ドメイン\ユーザー名の形式が容認できますが、UPN が推奨されます。単一ドメイン環境では、SAM アカウント名を容認できます。]
```

```
<add key="cacheExpiration" value="30" /> [キーを要求できるユーザーをサービスが確認する必要がある頻度 (秒単位)。このサービスは、キャッシュを維持して、キャッシュがどれほど古いかを追跡します。キャッシュがこの値より古くなると、新しいリストが取得されます。ユーザーが接続するときに、Key Server は権限のあるユーザーを Security Server からダウンロードする必要があります。ユーザーのキャッシュがない場合、または最後の「x」秒でリストがダウンロードされなかった場合は、再度ダウンロードされます。ポーリングはありませんが、この値によって、必要に応じてリストが更新される前に、どの程度古いリストまで容認するかが設定されます。]
```

```
<add key="epw" value="encrypted value of the password" /> [Security Server との通信に使用されるパスワード。superadmin パスワードが変更された場合、ここで変更する必要があります。]
```

```
</appSettings>
```

```
</configuration>
```



サービスパネル - キーサーバーサービスの再起動

- 1 サービスパネル（スタート > ファイル名を指定して実行 > services.msc > OK）に戻ります。
- 2 Key Server サービスを再起動します。
- 3 <Key Server インストールディレクトリ> log.txt に移動して、サービスが正しく開始していることを確認します。
- 4 サービスパネルを閉じます。

リモート管理コンソール - フォレンジック管理者の追加

- 1 必要な場合は、リモート管理コンソールにログオンします。
- 2 **ポピュレーション > ドメイン** をクリックします。
- 3 適切なドメインを選択します。
- 4 **Key Server** タブをクリックします。
- 5 アカウントフィールドで、管理者アクティビティを実行しているユーザーを追加します。この形式は DOMAIN\UserName です。**アカウントの追加** をクリックします。
- 6 左のメニューで **ユーザー** をクリックします。検索ボックスで、手順 5 で追加したユーザー名を検索します。**検索** をクリックします。
- 7 正しいユーザーが検索されたら、**管理者** アイコンをクリックします。
- 8 **フォレンジック管理者** を選択し、**アップデート** をクリックします。
これで、コンポーネントが Kerberos 認証 / 承認用に設定されました。



Administrative Download Utility (CMGAd) の使用

- このユーティリティでは、EE Server/VE Server に接続していないコンピュータ上で使用するためにキーマテリアルのバンドルをダウンロードできます。
- このユーティリティは、アプリケーションに渡されるコマンドラインパラメータに応じて、次のいずれかの方法を使用してキーバンドルをダウンロードします。
 - フォレンジックモード - コマンドラインで `-f` が渡された場合、またはコマンドラインパラメータが使用されていない場合に使用されます。
 - 管理者モード - コマンドラインで `-a` が渡された場合に使用されます。

ログファイルは、`C:\ProgramData\CmgAdmin.log` にあります。

フォレンジックモードでの Administrative Download Utility の使用

- `cmgad.exe` をダブルクリックして、ユーティリティを起動するか、CMGAd が置かれている場所でコマンドプロンプトを開いて `cmgad.exe -f` (または `cmgad.exe`) と入力します。
- 次の情報を入力します (一部のフィールドは事前に入力されている場合があります)。

デバイスサーバーの URL : Security Server (Device Server) の完全修飾 URL。書式は、`https://securityserver.domain.com:8443/xapi/` です。お使いの EE Server が v7.7 より前の場合、書式は `https://deviceserver.domain.com:8081/xapi` (別のポート番号、末尾のスラッシュはなし) です。

Dell 管理者 : `jdoe` など、フォレンジック管理者資格情報を持つ管理者の名前 (リモート管理コンソールで有効)

パスワード : フォレンジック管理者パスワード

MCID : マシン ID (`machinelD.domain.com` など)

DCID : 16 桁の Shield ID のうち最初の 8 桁

- ① **ヒント:** 通常、**MCID** または **DCID** のどちらかを指定すれば十分です。ただし、どちらもわかっている場合は、両方を入力すると役立ちます。各パラメータには、クライアントとクライアントコンピュータに関する異なる情報が含まれます。

次へ をクリックします。

- パスフレーズ : フィールドに、ダウンロードファイルを保護するパスフレーズを入力します。パスフレーズは 8 文字以上の長さにし、少なくとも 1 つのアルファベットと 1 つの数字を含む必要があります。パスフレーズを確認します。ファイルの保存先のデフォルトの名前と場所を受け入れるか、... をクリックして別の場所を選択します。

次へ をクリックします。

キーマテリアルが正しくロック解除されたことを示すメッセージが表示されます。ファイルはこれでアクセス可能になります。

- 完了したら、**終了** をクリックします。

管理者モードでの Administrative Download Utility の使用

VE Server は Key Server を使用しないので、管理者モードを使用して VE Server からキーバンドルを取得することはできません。VE Server に対してクライアントがアクティブ化されている場合は、フォレンジックモードを使用してキーバンドルを取得してください。

- 1 CMGAd が置かれている場所でコマンドプロンプトを開き、`cmgad.exe -a` と入力します。
- 2 次の情報を入力します（一部のフィールドは事前に入力されている場合があります）。

サーバー：Key Server の完全修飾ホスト名（`keyserver.domain.com` など）。

ポート番号：デフォルトのポートは 8050 です。

サーバーアカウント：Key Server を実行するときのドメインユーザー。この形式は `domain\username` です。ユーティリティを実行するドメインユーザーには、Key Server からダウンロードを実行する権限が与えられている必要があります。

MCID：マシン ID（`machineID.domain.com` など）

DCID：16 桁の Shield ID のうち最初の 8 桁

① ヒント: 通常、MCID または DCID のどちらかを指定すれば十分です。ただし、どちらもわかっている場合は、両方を入力すると役立ちます。各パラメータには、クライアントとクライアントコンピュータに関する異なる情報が含まれます。

次へ をクリックします。

- 3 パスフレーズ：フィールドに、ダウンロードファイルを保護するパスフレーズを入力します。パスフレーズは 8 文字以上の長さにし、少なくとも 1 つのアルファベットと 1 つの数字を含む必要があります。
パスフレーズを確認します。

ファイルの保存先のデフォルトの名前と場所を受け入れるか、... をクリックして別の場所を選択します。

次へ をクリックします。

キーマテリアルが正しくロック解除されたことを示すメッセージが表示されます。ファイルはこれでアクセス可能になります。

- 4 完了したら、**終了** をクリックします。



Server Encryption の設定

Server Encryption の有効化

① **メモ:** Server Encryption は、ユーザー暗号化を共有暗号化に変換します。

- 1 Dell リモート管理コンソールで Dell 管理者としてログインします。
- 2 エンドポイントグループ (または エンドポイント) を選択し、有効にするエンドポイントまたはエンドポイントグループを検索して **セキュリティポリシー** を選択した後、**Server Encryption** ポリシーカテゴリを選択します。
- 3 次のポリシーを設定します。
 - ・ Server Encryption - **選択**して Server Encryption と関連するポリシーを有効にします。
 - ・ SDE Encryption 有効 - **選択**して SDE 暗号化をオンにします。
 - ・ 暗号化有効 - **選択**して共有暗号化をオンにします。
 - ・ Windows 資格情報のセキュア化 - デフォルトでこのポリシーが選択されています。

Windows 資格情報のセキュア化ポリシーが**選択されている** (デフォルト) 場合は、\Windows\system32\config ファイルフォルダ内にある Windows 資格情報も含めたすべてのファイルが暗号化されます。Windows 資格情報が暗号化されないようにするには、Windows 資格情報のセキュア化ポリシーを **選択しない** に設定します。Windows 資格情報の暗号化は、SDE 暗号化有効ポリシーの設定とは無関係に行われます。

- 4 ポリシーを保存してコミットします。

アクティベーションログオンダイアログのカスタマイズ

アクティベーションログオンダイアログは、次の場合に表示されます。

- ・ 管理対象外のユーザーがログオンするとき。
- ・ ユーザーが、システムトレイにある 暗号化 アイコンのメニューから Dell Data Protection | Encryption のアクティベーションを選択するとき。



Server Encryption EMS ポリシーの設定

暗号化開始コンピュータとは、リムーバブルデバイスを最初に暗号化するコンピュータです。暗号化開始コンピュータが **保護対象サーバー**（Server Encryption がインストール、アクティブ化されているサーバー）で、その保護対象サーバーがリムーバブルデバイスの存在を初めて検知するとき、リムーバブルデバイスを暗号化するためのプロンプトがユーザーに表示されます。

- ・ EMS ポリシーは、リムーバブルメディアのサーバーへのアクセス、認証、暗号化などを制御します。
- ・ ポート制御ポリシーは、例えば、USB デバイスによるサーバーの USB ポートへのアクセスおよび使用を制御することにより、保護対象サーバー上のリムーバブルメディアに影響します。

リムーバブルメディア暗号化用のポリシーは、リモート管理コンソールの *Server Encryption* テクノロジグループの下にあります。

Server Encryption と外部メディア

保護対象サーバーの EMS 暗号化外部メディアポリシー**選択されている場合**、外部メディアは暗号化されます。Server Encryption はマシンキーでそのデバイスを保護対象サーバーに関連付け、リムーバブルデバイスの所有者/ユーザーのユーザーローミングキーでデバイスをユーザーに関連付けます。その後でリムーバブルデバイスに追加されるすべてのファイルは、デバイスの接続先のコンピュータに関わらず、これら同じキーで暗号化されます。

① メモ:

Server Encryption はユーザー暗号化を共有暗号化に変換しますが、リムーバブルデバイス上では行われません。リムーバブルデバイス上では、コンピュータに関連付けられているユーザーローミングキーで暗号化が実行されます。

ユーザーがリムーバブルデバイスの暗号化に同意しない場合、デバイスへのユーザーアクセスは、保護対象サーバー上で使用されるときは**ブロック**、保護対象サーバー上で使用されるときは**読み取り専用**または**完全アクセス**に設定することができます。保護対象サーバーのポリシーは、保護されていないリムーバブルデバイス上でのアクセスレベルを決定します。

リムーバブルデバイスが保護対象の暗号化開始サーバーに再挿入されると、ポリシーアップデートが行われます。

認証と外部メディア

保護対象サーバーのポリシーは、認証機能を決定します。

リムーバブルデバイスの暗号化が完了すると、保護対象サーバー上でそのリムーバブルデバイスにアクセスできるのは、そのデバイスの所有者/ユーザーのみになります。それ以外のユーザーは、そのリムーバブルメディアの暗号化されたファイルにアクセスできなくなります。

ローカル自動認証では、そのメディアの所有者がログインしているときに保護対象リムーバブルストレージが保護対象サーバーに挿入されると、そのメディアを自動認証することが可能になります。自動認証が無効になっている際には、所有者/ユーザーが保護対象リムーバブルデバイスへのアクセスを認証する必要があります。

リムーバブルデバイスの暗号化開始コンピュータが保護対象サーバーである場合、所有者/ユーザーは、開始コンピュータ以外のコンピュータ上でリムーバブルデバイスを使用している際に、その他のコンピュータ上で定義されている EMS ポリシーに関わらず、常にそのリムーバブルデバイスにログインする必要があります。

Server Encryption のポート制御および EMS ポリシーの詳細については管理者ヘルプを参照してください。

暗号化されたサーバーインスタンスのサスペンド

暗号化されたサーバーをサスペンドすることで、再起動後のそのサーバーの暗号化されたデータへのアクセスを防ぎます。仮想サーバーのユーザーをサスペンドすることはできません。代わりに、Server Encryption マシンキーがサスペンドされます。

- ① **メモ:** サーバーのエンドポイントをサスペンドしても、サーバーはすぐにはサスペンドされません。このサスペンドは、キーが次に要求されたとき（通常はサーバーが次に再起動されたとき）に行われます。



- ① **重要:** 使用する際は注意が必要です。暗号化されたサーバーインスタンスをサスペンドすると、ポリシー設定、または保護対象サーバーがネットワークから切断されているかどうかにより、不安定になることがあります。

前提条件

- ・ リモート管理コンソールで割り当てられたヘルプデスク管理者の権限は、エンドポイントをサスペンドするのに必要です。
- ・ リモート管理コンソールに管理者がログインしている必要があります。

リモート管理コンソールの左ペインで、**ポピュレーション**>**エンドポイント** をクリックします。

ホスト名を検索または選択してから、**詳細**と**アクション**タブをクリックします。

サーバーデバイス制御の下で、**サスペンド**、**はい**の順にクリックします。

- ① **メモ:** 復帰 ボタンをクリックすると、**Server Encryption** は再起動後にサーバー上の暗号化されたデータにアクセスできるようになります。

Cloud Edition のためのサーバーの設定

Cloud Edition のための VE Server の設定

Cloud Edition をサポートするように VE Server を設定するには、VE リモート管理コンソールでクラウドストレージプロテクション有効保護ポリシーを True に設定します。

Cloud Edition のための EE Server の設定

Cloud Edition をサポートするように EE Server を設定するには、リモート管理コンソールでクラウド保護ポリシーを ON に設定してから、クラウドクライアントのダウンロードを許可するために Security Server を設定します。

クラウドクライアントのダウンロードを許可するための Security Server の設定

本項では、エンドユーザーが Windows クラウドクライアントを Security Server からダウンロードする場合に必要な手順について詳しく説明します。

- 1 EE Server で、<Security Server install dir>\webapps\cloudweb\brand\dell\resources に移動して、テキストエディタで messages.properties ファイルを開きます。
- 2 エントリが次のようになっていることを確認します。

```
download.deviceWin.mode=remote
```

```
download.deviceWin.local.filename.32=cloud32.exe
```

```
download.deviceWin.local.filename.64=cloud64.exe
```

```
download.deviceWin.remote.link.32=https://<YOUR HOST URL>:<PORT>/cloudweb/download/cloud32.exe
```

```
download.deviceWin.remote.link.64=https://<YOUR HOST URL>:<PORT>/cloudweb/download/cloud64.exe
```

- 3 ファイルを保存して閉じます。
- 4 <Security Server install dir> に移動し、その下に Download という名前の新しいフォルダを作成します (Security Server \Download)。
- 5 Download フォルダ内で、別の新しいフォルダを作成して、「Cloudweb」 (Security Server\Download\Cloudweb) という名前を付けます。
- 6 Cloud Edition の 64 ビットと 32 ビットのセットアップファイルを Cloudweb フォルダに追加して、それぞれの名前を cloud64.exe と cloud32.exe に変更します。

Windows クラウドクライアントの自動ダウンロードに向けた EE Server の設定 (オプション)

- 1 EE Server をホスティングしているサーバーで、C:\inetpub\wwwroot\ に移動します。この Web サーバーには、信頼済みの証明書が必要です。
- 2 wwwroot の下に、「CloudUpdate」 (C:\inetpub\wwwroot\CloudUpdate) という名前でフォルダを作成します。

① | メモ: この例では **CloudUpdate** ですが、任意の名前を選択できます。

- 3 アップデートした実行ファイルを CloudUpdate フォルダに入れます。
- 4 アップデートした versions.xml ファイルを CloudUpdate フォルダに格納します。
- 5 テキストエディタで versions.xml を開き、ファイル名のパスが実際の環境と一致していることを確認します。



例：

```
<?xml version="1.0"?> <VERSIONS><VERSION channel="release" brand="1" arch="x86"
version="1.0.0.1814" filename="/Cloud32.exe"/><VERSION channel="release" brand="1" arch="x64"
version="1.0.0.1814" filename="/Cloud64.exe"/></VERSIONS>
```

Version：更新された実行ファイルのファイルバージョンです。

Filename：上記の URL（/CloudUpdate）の末尾から実際の実行ファイルまでのパスです。

- 6 ファイルを保存して閉じます。
- 7 IIS を再起動します。
- 8 管理者として、リモート管理コンソールにログインします。
- 9 左ペインで **ポピュレーション > Enterprise** の順にクリックします。
- 10 上部メニューの **セキュリティポリシー** をクリックします。
- 11 **クラウド暗号化** を選択します。
- 12 **詳細設定の表示** をクリックします。
- 13 ソフトウェアアップデートサーバーの URL ポリシーまでスクロールして、https://<お使いのホスト URL>/CloudUpdate と入力します。

④ | **メモ**：CloudUpdate は、上記の例と一致させるための例です。

- 14 **保存** をクリックして、コミットキューにポリシーの変更を保存します。
- 15 **管理 > コミット** の順にクリックします。

クラウドストレージ保護プロバイダプロファイルの管理

Cloud Edition はユーザーのファイルを暗号化して、EE Server/VE Server に監査イベントを送信します。サポートされている各クラウドストレージプロバイダの動作を変更するには、各プロバイダを次の値のいずれかに設定します。

値	説明
保護	プロバイダ / 接続を許可し、ファイルを暗号化し、ファイル / フォルダのアクティビティに関する監査イベントを送信します。
ブロック	プロバイダ / 接続へのアクセスをすべてブロックします。
許可	監査ファイル / フォルダのアクティビティを除き、暗号化なしで、プロバイダ / 接続のパススルーを許可します。
バイパス	暗号化または監査なしで、プロバイダ / 接続の保護をバイパスします。この値が設定されている場合、クライアントコンピュータの Cloud Edition 仮想ドライブに、クラウドストレージプロバイダフォルダは表示されません。

詳細については、リモート管理コンソールからアクセスできる AdminHelp を参照してください。

ホワイトリストのユーザーの許可 / ブラックリストのユーザーの拒否

内部ユーザーが Cloud Edition で保護されているファイルを外部ユーザーと共有したい場合は、管理者との調整を行う必要があります。

内部ユーザーが企業秘密ファイルおよびフォルダをどの範囲まで外部ユーザーと共有できるかは、会社が決定します。例：

- ・ 内部ユーザーは外部ユーザーに対し、Cloud Edition に登録してインストールするよう要求することができます。

または 内部接続ポートを編集... のいずれかをクリックします。

ベストプラクティス: 会社で、会社の電子メールアドレスに含まれていないユーザーをブラックリストに載せます。内部ユーザーはまず、管理者に外部ユーザーをホワイトリストに載せるよう依頼します。

管理者はポリシーとホワイトリスト/ブラックリストに沿ってこれを管理し、EE Server/VE Server に登録して Cloud Edition を使用できるユーザーを決定します。セキュリティ確保のため、リストを慎重に設定、管理します。

ホワイトリスト

ホワイトリストでは、特定のユーザーまたはユーザーグループに、EE Server/VE Server への登録と Cloud Edition の利用を許可します。

組織は、外部ユーザー（ドメイン電子メールアドレス以外のユーザー）が Cloud Edition で登録することを許可できます。外部ユーザーはホワイトリストに追加する必要があり、管理者は登録メールを外部ユーザーに送信する必要があります。

ブラックリストを使用するには、ホワイトリストのワイルドカードをすべて削除する必要があります。次の例を参照してください。

`<Allow>*@organization.com</Allow>` すべての organization.com 電子メールアドレスの EE Server/VE Server への登録を許可します。

`<Allow>*</Allow>` すべてのユーザーの EE Server/VE Server への登録を許可します。

`<Allow>jdoe@organization.com</Allow>` この特定のユーザーの EE Server/VE Server への登録を許可します。

`<Allow>*@gmail.com</Allow>` すべての Gmail ユーザーの EE Server/VE Server への登録を許可します。

ブラックリスト

ブラックリストでは、特定のユーザーまたはユーザーグループの EE Server/VE Server への登録と Cloud Edition の利用を禁止します。

ホワイトリストで承認グループのメンバーになっている特定のユーザーを除外する場合は、このブラックリストを使用することができます。ワイルドカード文字 (*) を使用すると、ドメイン全体をブラックリストに指定できます。この指定により、そのドメインの電子メールアドレスを持つすべてのユーザーが登録できなくなります。

ブラックリストに指定されたドメインユーザーは登録を行えますが、アクティブ化できません。ブラックリストに指定された非ドメインユーザーは登録を行えません。登録を行う権限がないことを示すダイアログが表示されます。

すでに登録されたユーザーは、ブラックリストにより Cloud Edition の利用を禁止されません。

次の例を参照してください。

`<deny>*@organization.com</deny>` すべての organization.com 電子メールアドレスの EE Server/VE Server への登録を禁止します。

`<deny>jdoe@organization.com</deny>` この特定のユーザーに対し、この電子メールアドレスの EE Server/VE Server への登録を禁止します。

`<deny>*@gmail.com</deny>` すべての Gmail ユーザーの EE Server/VE Server への登録を禁止します。

ホワイトリスト/ブラックリストを変更するには、次の手順に従います。

- 1 `<Security Server install dir>\conf\` に移動します。
- 2 テキストエディタで `registration-access.xml` を開きます。
- 3 上記の情報と以下の例に従って、ユーザーを許可または拒否します。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?><access><whitelist><allow>user1@organization.com</allow><allow>*@organization.com</allow><allow>*</allow></whitelist><blacklist><!--All addresses not specifically allowed are denied.<deny> </deny--></blacklist></access>
```



4 ファイルを保存して閉じます。



Dropbox for Business での Cloud Edition の使用

Dropbox for Business での Cloud Edition は、基本的な Dropbox のほかに追加機能を提供します。

- ・ チームメンバーアカウントのリモートワイプ
- ・ VE Server v8.4 以降では、ビジネスおよび個人用 Dropbox フォルダの管理のためのポリシーを設定することができます。会社でビジネスおよび個人用のアカウントを使用している場合、エンドユーザーは各アカウントタイプの暗号化について理解する必要があります。「[ビジネスおよび個人用アカウントのポリシー](#)」を参照してください。

ビジネスおよび個人用アカウントのポリシー

会社には、チームのメンバーがビジネスおよび個人用のアカウントの使用に関するガイドラインが設けられている場合があります。また、会社によってはビジネスおよび個人用のアカウントの両方の使用は、特定のユーザーにのみ許可する場合があります。

① メモ:

会社でビジネスおよび個人用のアカウントの両方を許可し、エンドユーザーが両方の使用を選択できる場合は、そのユーザーは両方のアカウントタイプのフォルダ管理について理解しておく必要があります。

次の表で、EE Server/VE Server のタイプおよびポリシーに基づいた暗号化について説明します。

暗号化	サーバーのタイプおよびポリシー	導入時の考慮事項
すべてのビジネスおよび個人用のファイルおよびフォルダを暗号化する。	VE Server (v8.4 より前) または EE Server または 内部接続ポートを編集... のいずれかをクリックします。 VE Server (v8.4 以降) と、 ポリシー > Dropbox 暗号化個人用フォルダ > True に設定 (True がデフォルトです。)	Cloud Edition を展開する前に、ユーザーはクラウドストレージ同期フォルダ内の既存のビジネス用ファイルを、同期用フォルダの外にバックアップしてください。 非暗号化しておく必要のある個人用ファイルを持っているユーザーは、ファイルをビジネス同期用フォルダの外に移動させるか、個人用アカウントからビジネス用の同期クライアントのリンクを外します。 Cloud Edition の導入後、クラウドファイルおよびフォルダは Cloud Edition を実行しているコンピュータまたはデバイスでのみ表示できるようになります。個人用フォルダを誤って暗号化した場合は、『Cloud Edition User Guide』(Cloud Edition ユーザーガイド) の「個人用アカウントのフォルダの復号化」を参照してください。
すべてのビジネス用アカウントファイルおよびフォルダを暗号化する。 個人用アカウントのファイルおよびフォルダを非暗号化したままにする。	VE Server (v8.4 以降) で ポリシー > Dropbox 暗号化個人用フォルダ > False に設定	オプションの Dropbox 暗号化個人用フォルダのメッセージポリシーを使用して、ビジネス用ファイルを個人用アカウント(保護されない)に 保存しない ようユーザーに通知するカスタム化メッセージを表示できます。このメッセージは、次の場合に表示されます。 <ul style="list-style-type: none"> ・ ユーザーがログインする度に表示 ・ ユーザーが個人用 Dropbox アカウントに新規ファイルまたはフォルダを作成または追加した時に表示



Dropbox 暗号化個人用フォルダポリシーをエンドポイントまたはエンドポイントグループで **False** に設定した場合、これらのエンドポイントのすべてのユーザーの個人用アカウントは、暗号化されないままになります。

ビジネスおよび個人用フォルダ

会社にビジネス向け Dropbox があり、エンドユーザーにビジネスおよび個人用フォルダの両方を持つことを許可する場合に、エンドユーザーが保護されていない秘密ファイルをビジネス用フォルダにコピーする場合に備えて、すべてのビジネス用ファイルに拡張子「.xen」が使用されていることを確認するためにレポートを実行することが推奨されます。「[Cloud Edition のトラブルシューティング](#)」を参照してください。

チームメンバーアカウントのリモートワイプ

企業が Dropbox Business を使用している場合、チームメンバーが退職した場合などに、企業の Dropbox のチームアカウントからそのユーザーをリモートで削除することができます。チームメンバーのアカウントに関連付けられたファイルおよびフォルダが、該当のアカウントで使用されているすべてのデバイスから削除されます。これにより、当該ユーザーからこれらファイルへのアクセスが無効になります。

前提条件

- ・ リモートワイプを実行する前に、会社またはその他ビジネス向け Dropbox チームメンバーで必要と考えられるファイルまたはフォルダを、チームメンバーアカウントからバックアップしてください。
- ・ ビジネス向け Dropbox の管理者のみが、ビジネス向け Dropbox アカウントをリモートワイプすることができます。
- ・ エンドユーザーは、Cloud Edition をアクティブ化し、ビジネス向け Dropbox に接続する必要があります。

リモート管理コンソールでの登録

ビジネス向け Dropbox の管理者 1 名のみを登録する必要があります。

- 1 リモート管理コンソールで、左のペインから **設定** を選択します。
- 2 **クラウド** タブをクリックします。
- 3 **登録** をクリックします。Dropbox Business サイトがブラウザで開きます。
- 4 プロンプトが表示されたら、ビジネス向け Dropbox 管理者アカウントで Dropbox にログインします。
- 5 **許可** をクリックして、Cloud Edition へのアクセスを許可します。Dropbox 許可が VE Server に認められたことを示す確認ページが表示されます。
- 6 リモート管理コンソールで、**設定 > クラウド** の順に戻り、ページを更新します。管理者名が表示されます。

① メモ:

基本的に、ベストプラクティスは、登録を解除しないことです。ただし、チームメンバーをビジネス向け Dropbox チームから削除するためにビジネス向け Dropbox 管理者の権限を取り消す場合は、**登録解除** をクリックします。

チームメンバーアカウントのリモートワイプ

リモートワイプオプションを使用できるのは、登録済みの Dropbox Business チームメンバーアカウントのみです。リモートワイプオプションがユーザーアカウントで表示されない場合、そのユーザーは Dropbox Business アカウントに登録されていません。

- 1 リモート管理コンソールの左ペインで、**ポピュレーション > ユーザー** の順に選択します。
- 2 指定したユーザーを検索します。
- 3 **ユーザー詳細** ページにアクセスします。
- 4 コマンド列で、**リモートワイプ** をクリックします。

① **メモ:** アカウントに対してリモートワイプを実行する前に、会社またはその他ビジネス向け **Dropbox** チームメンバーで必要と考えられるファイルまたはフォルダを、チームメンバーアカウントからバックアップしてください。

- 5 リモートワイプの確認画面で、**はい** をクリックします。ユーザー詳細ページに、リモートワイプが実行される日付がリストされています。
- 6 ビジネス向け Dropbox 管理者コンソールメンバーページでチームメンバーのリストを更新します。ユーザーがリストから削除されます。**削除済みメンバー** タブを選択すると、削除されたユーザーを確認できます。

レポートの実行

Cloud Edition 環境に関するレポートは、Compliance Reporter から利用できます。次の詳細を記したレポートを利用できます。

- ・ ユーザーのアクティブ化
- ・ デバイスで適用されているポリシー
- ・ 暗号化されたファイルに実行されたアクション
- ・ ビジネス向け Dropbox のファイル暗号化ステータス

レポート実行の詳細については、『Compliance Reporter Help』（Compliance Reporter ヘルプ）を参照してください。

① **メモ:**

モバイルデバイスのログは、セキュリティの理由で無効になっています。



トラブルシューティング

すべてのクライアントのトラブルシューティング

- ・ マスターインストーラログファイルは C:\ProgramData\Dell\Dell Data Protection\Installer にあります。
- ・ Windows は、C:\Users\\AppData\Local\Temp. に、ログインしたユーザーに関する独自の子インストーラインストールログファイルを作成します。
- ・ Windows はログインしたユーザー用に、クライアントの前提条件 (Visual C++ など) ログファイルを C:\Users\\AppData\Local\Temp. にある %temp% に作成します。For example, C:\Users\\AppData\Local\Temp\dd_vcrist_amd64_20160109003943.log
- ・ インストール対象のコンピューターにインストールされている Microsoft .Net のバージョンを検証するには、<http://msdn.microsoft.com> の手順に従ってください。

Microsoft .Net Framework 4.5 の完全バージョンをダウンロードするには、<https://www.microsoft.com/en-us/download/details.aspx?id=30653> にアクセスします。

- ・ インストール対象のコンピューターに Dell Data Protection | Access がインストールされている (または過去にされていた) 場合は、『[Dell Data Protection | Security Tools Compatibility](#)』 (Dell Data Protection | Security Tools 互換性) を参照してください。DDP| A には、この製品スイートへの互換性はありません。

Encryption および Server Encryption クライアントのトラブルシューティング

Windows 10 Anniversary アップデートへのアップグレード

Windows 10 Anniversary アップデートバージョンへアップグレードするには、次の記事の指示に従います。 <http://www.dell.com/support/article/us/en/19/SLN298382>

サーバーオペレーティングシステム上でのアクティベーション

Encryption がサーバーオペレーティングシステム上にインストールされた場合、アクティベーションには、初期アクティベーションとデバイスアクティベーションの2つのアクティベーションフェーズが必要です。

初期アクティベーションのトラブルシューティング

初期アクティベーションは、次のときに失敗します。

- ・ 提供された資格情報を使用して、有効な UPN を構築できない。
- ・ エンタープライズ資格情報コンテナ内で資格情報が見つからない。
- ・ アクティブ化に使用される資格情報がドメイン管理者の資格情報ではない。

エラーメッセージ : Unknown user name or bad password

ユーザー名とパスワードが一致しません。

可能な解決策 : ユーザー名とパスワードを正確に入力して、ログインを再試行します。

エラーメッセージ : **Activation failed because the user account does not have domain admin rights.**

アクティブ化に使用された資格情報にドメイン管理者権限がない、または管理者のユーザー名が UPN 形式ではありませんでした。

可能な解決策 : アクティブ化 ダイアログでドメイン管理者用の資格情報を入力し、それらが UPN 形式になっていることを確認します。

エラーメッセージ : **A connection with the server could not be established.**

または 内部接続ポートを編集... のいずれかをクリックします。

The operation timed out.

Server Encryption は、DDP Security Server への https 経由でポート 8449 と通信することができませんでした。

可能な解決策

- ・ ネットワークに直接接続し、アクティブ化を再実行します。
- ・ VPN で接続されている場合は、ネットワークへの直接接続を試行して、アクティブ化を再実行します。
- ・ DDP Server URL をチェックして、それが管理者から提供された URL と一致していることを確認します。ユーザーがインストーラに入力した URL とその他のデータはレジストリに保存されています。[HKLM\SOFTWARE\Microsoft\Windows NT\CurrentVersion\Winlogon\CMGShield] と [HKLM\SOFTWARE\Microsoft\Windows NT\CurrentVersion\Winlogon\CMGShield\Servlet] にあるデータの正確性をチェックしてください。
- ・ サーバーをネットワークから切り離します。サーバーを再起動して、ネットワークに再接続します。

エラーメッセージ : **Activation failed because the Server is unable to support this request.**

可能な解決策

- ・ Server Encryption をレガシーサーバーに対してアクティブ化することはできません。DDP Server のバージョンは、バージョン 9.1以降である必要があります。必要に応じて、お使いの DDP Server をバージョン 9.1以降にアップグレードしてください。
- ・ DDP Server URL をチェックして、それが管理者から提供された URL と一致していることを確認します。ユーザーがインストーラに入力した URL とその他のデータはレジストリに保存されています。
- ・ [HKLM\Software\Microsoft\Windows NT\CurrentVersion\Winlogon\CMGShield] と [HKLM\Software\Microsoft\Windows NT\CurrentVersion\Winlogon\CMGShield\Servlet] にあるデータの正確性をチェックしてください。

初期アクティベーションプロセス

次の図は、正常な初期アクティベーションを示します。

Server Encryption の初期アクティベーションプロセスでは、ライブユーザーがサーバーにアクセスする必要があります。このユーザーは、ドメインまたは非ドメイン、リモートデスクトップ接続またはインタラクティブなど、どのようなタイプのユーザーでもよいですが、ドメイン管理者資格情報にアクセスできなければなりません。

次の2つのうちのいずれかが起こると、アクティブ化 ダイアログボックスが表示されます。

- ・ 新しい (非管理) ユーザーがコンピュータにログオンする。
- ・ 新しいユーザーがシステムトレイ内の Encryption クライアントアイコンを右クリックし、Dell Data Protection | Encryption のアクティブ化を選択したとき。

初期アクティベーションプロセスは次のとおりです。

- 1 ユーザーがログインします。
- 2 新しい (非管理) ユーザーを検出して、アクティブ化 ダイアログが表示されます。ユーザーが **キャンセル** をクリックします。
- 3 ユーザーが Server Encryption のバージョン情報 ボックスを開いて、Server Encryption がサーバーモードで実行中であることを確認します。
- 4 ユーザーがシステムトレイ内の Encryption クライアントアイコンを右クリックし、**Dell Data Protection | Encryption のアクティブ化** を選択します。
- 5 ユーザーがアクティブ化 ダイアログにドメイン管理者資格情報を入力します。



① **メモ:** このドメイン管理者資格情報の要求は、**Server Encryption** が、それをサポートしていない他のサーバー環境にロールアウトされるのを防ぐための安全対策です。ドメイン管理者資格情報の要求を無効にするには「**作業を開始する前に**」を参照してください。

- 6 DDP Server がエンタープライズ資格情報コンテナ (Active Directory またはその同等物) 内の資格情報をチェックして、その資格情報がドメイン管理者資格情報であることを確認します。
- 7 資格情報を使用して UPN が構築されます。
- 8 その UPN を使用して、DDP Server が仮想サーバーユーザー用の新しいユーザーアカウントを作成し、その資格情報を DDP Server の資格情報コンテナ内に保存します。

仮想サーバーユーザーアカウントは、Encryption クライアントの排他使用用です。サーバーで認証するため、共通暗号化キーを処理するため、およびポリシーアップデートを受信するために使用されます。

① **メモ:** 仮想サーバーユーザーのみがコンピュータ上の暗号化キーにアクセスできるように、パスワードおよび DPAPI 認証はこのアカウントに対して無効化されます。このアカウントは、コンピュータ上、またはドメイン上の他のどのアカウントとも一致しません。

- 9 アクティベーションが成功すると、ユーザーがコンピュータを再起動します。それにより、アクティベーションの第 2 部 (認証とデバイスアクティベーション) が開始されます。

認証とデバイスアクティベーションのトラブルシューティング

デバイスアクティベーションは、次のときに失敗します。

- ・ 初期アクティベーションが失敗した。
- ・ サーバーとの接続を確立できなかった。
- ・ 信頼する証明書を検証できなかった。

アクティベーション後、コンピュータが再起動されたとき、Server Encryption は仮想サーバーユーザーとして自動的にログインし、DDP Enterprise Server にマシンキーを要求します。これは、ユーザーがまだログインできなくても行われます。

- ・ バージョン情報 ダイアログを開いて、Server Encryption が認証済みで、サーバーモードになっていることを確認します。
- ・ Shield ID が赤色で表示されている場合、暗号化はまだアクティブ化されていません。
- ・ リモート管理コンソールでは、Server Encryption がインストールされているサーバーのバージョンはサーバー用 Shield としてリストされます。
- ・ ネットワークの障害が原因でマシンキーの取得に失敗した場合、Server Encryption はオペレーティングシステムでネットワーク通知に登録します。
- ・ マシンキーの取得に失敗した場合：
 - ・ 失敗しても、仮想サーバーユーザーのログオンは成功します。
 - ・ 設定した時間間隔でキーの取得を再試行するように、**ネットワーク障害時の再試行間隔**ポリシーをセットアップします。

ネットワーク障害時の再試行間隔 ポリシーの詳細については、リモート管理コンソールから利用できる AdminHelp を参照してください。

認証とデバイスアクティベーションのプロセス

次の図は、正常な認証とデバイスアクティベーションを示します。

- 1 正常な初期アクティベーション後、再起動が行われると、Server Encryption を搭載したコンピュータは、仮想サーバーユーザーアカウントを使用して Encryption クライアントを自動的に認証し、サーバーモードで実行します。
- 2 コンピュータは、自身のデバイスアクティベーションステータスを DDP Server でチェックします。
 - ・ そのコンピュータがまだデバイスアクティブ化されていない場合、DDP Server は、そのコンピュータに MCID、DCID、および信頼証明書を割り当て、そのすべての情報を DDP Server の資格情報コンテナ内に保存します。
 - ・ そのコンピュータがすでにデバイスアクティブ化されている場合、DDP Server は信頼証明書を検証します。
- 3 DDP Server が信頼証明書をサーバーに割り当てた後、そのサーバーはその暗号化キーにアクセスできます。
- 4 デバイスアクティベーションが成功します。

① メモ:

サーバーモードで実行している場合、Encryption クライアントは、暗号化キーにアクセスするために、デバイスアクティベーションに使用されたのと同じ証明書にアクセスできなければなりません。

(オプション) Encryption Removal Agent ログファイルの作成

- アンインストール処理を開始する前に、オプションで Encryption Removal Agent のログファイルの作成を行います。このログファイルは、アンインストールや復号化操作のトラブルシューティングを行う際に便利です。アンインストール処理中にファイルの復号化を行うつもりがない場合は、このログファイルを作成する必要はありません。
- Encryption Removal Agent ログは Encryption Removal Agent サービスが実行されるまで作成されず、このサービスはコンピュータが再起動されるまで実行されません。クライアントが正常にアンインストールされ、コンピュータが完全に復号化されると、ログファイルは完全に削除されます。
- ログファイルのパスは `C:\ProgramData\Dell\Dell Data Protection\Encryption` です。
- 復号化の対象となるコンピュータに次のレジストリキーを作成します。

```
[HKLM\Software\Credant\DecryptionAgent]
```

```
"LogVerbosity"=dword:2
```

0 : ログを記録しない

1 : サービスを実行できなくなるエラーをログに記録する

2 : 完全なデータ復号化を妨げるエラーをログに記録する (推奨レベル)

3 : すべての復号化ボリュームとファイルに関する情報をログに記録する

5 : デバッグ情報をログに記録する

TSS バージョンの確認

- TSS は、TPM と連動するコンポーネントです。TSS バージョンを確認するには、`C:\Program Files\Dell\Dell Data Protection\Drivers\TSS\bin > tcsd_win32.exe` と移動します。ファイルを右クリックして、**プロパティ** を選択します。詳細 タブでファイルのバージョンを確認します。

EMS と PCS の相互作用

メディアが読み取り専用ではなく、ポートがブロックされていないことを確実にする

EMS Access から unShielded Media へのポリシーは、Port Control System - Storage Class: External Drive Control ポリシーと相互作用します。EMS Access から unShielded Media へのポリシーをフルアクセスに設定する場合は、メディアが読み取り専用を設定されないこと、およびポートがブロックされないことを確実にするために、Storage Class: External Drive Control ポリシーもフルアクセスに設定する必要があります。

CD/DVD に書き込まれたデータを暗号化する

- 外部メディアの EMS 暗号化 = True に設定します。
- EMS で CD/DVD 暗号化を除外 = False に設定します。
- サブクラスストレージの設定 : 光学ドライブコントロール = UDF Only に設定します。



WSScan の使用

- WSScan を使用すると、Encryption クライアントをアンインストールするとき、すべてのデータが復号化されていることを確認することができます。また、暗号化ステータスを表示し、暗号化されるべき非暗号化状態のファイルを特定することもできます。
- このユーティリティの実行には管理者権限が必要です。

WSScan

- Dell インストールメディアから、スキャン対象の Windows コンピュータに WSScan.exe をコピーします。
- 上記の場所でコマンドラインを起動して、コマンドプロンプトに **wsscan.exe** と入力します。WSScan が起動します。
- 詳細設定** をクリックします。
- 次のドロップダウンメニューからスキャンしたいドライブの種類を選択します：**すべてのドライブ**、**固定ドライブ**、**リムーバブルドライブ**または **CDROM/DVDROM**。
- ドロップダウンメニューから該当する暗号化レポートタイプを選択します：**暗号化ファイル**、**非暗号化ファイル**、**すべてのファイル**、または **違反の非暗号化ファイル**。
 - 暗号化ファイル** - Encryption クライアントをアンインストールするとき、すべてのデータが復号化されていることを確認するために使用します。復号化ポリシーアップデートの発行など、データを復号化するための既存の手順に従います。データを復号化した後は、アンインストール準備として再起動する前に、WSScan を実行してすべてのデータが復号化されていることを確認します。
 - 非暗号化ファイル** - 暗号化されていないファイルを特定するために使用します。それらのファイルを暗号化すべきかどうか (Y/N) も示されます。
 - すべてのファイル** - すべての暗号化および非暗号化ファイルのリストを表示するために使用します。それらのファイルを暗号化すべきかどうか (Y/N) も示されます。
 - 違反の非暗号化ファイル** - 暗号化すべき非暗号化ファイルを特定するために使用します。
- 検索** をクリックします。

または

- 詳細設定** をクリックし、ビューを **シンプル** に切り替えて、特定のフォルダをスキャンします。
- スキャン設定 に移動して、**検索パス** フィールドにフォルダパスを入力します。このフィールドを使用した場合、ドロップダウンボックスの選択は無視されます。
- WSScan の出力をファイルに書き込まない場合は、**ファイルに出力** チェックボックスをオフにします。
- 必要に応じて、パスに含まれているデフォルトパスとファイル名を変更します。
- 既存のどの WSScan 出力ファイルも上書きしない場合は、**既存のファイルに追加** を選択します。
- 出力書式を選択します。
 - スキャンした結果をレポートスタイルのリストで出力する場合は、**レポート書式** を選択します。これがデフォルトの書式です。
 - スプレッドシートアプリケーションにインポートできる書式で出力する場合は、**値区切りファイル** を選択します。デフォルトの区切り文字は「|」ですが、最大 9 文字の英数字、空白、またはキーボード上のパンクチュエーション文字に変更できます。
 - 各値を二重引用符で囲むには、**クォートされる値 オプション** を選択します。
 - 各暗号化ファイルに関する一連の固定長情報を含む区切りのない出力には、**固定幅ファイル** を選択します。
- 検索** をクリックします。

検索の停止 をクリックして検索を停止します。**クリア** をクリックし、表示されているメッセージをクリアします。

WSScan コマンドラインの使用

```
WSScan [-ta] [-tf] [-tr] [-tc] [drive] [-s] [-o<filepath>] [-a] [-f<format specifier>] [-r] [-u[a][-v]] [-d<delimiter>] [-q] [-e] [-x<exclusion directory>] [-y<sleep time>]
```

スイッチ

意味

ドライブ	スキャンするドライブ。指定しない場合、デフォルトは、すべてのローカルの固定ハードドライブになります。マップされたネットワークドライブにすることができます。
-ta	すべてのドライブをスキャンします。
-tf	固定ドライブをスキャンします (デフォルト)。
-tr	リムーバブルドライブをスキャンします。
-tc	CDROM/DVDROM をスキャンします。
-s	サイレント操作
-o	出力ファイルパス
-a	出力ファイルに付加します。デフォルトの動作は出力ファイルを切り捨てます。
-f	レポート書式指定子 (レポート、固定、区切り)
-r	管理者権限なしに WSScan を実行します。このモードを使用する場合、一部のファイルが表示されないことがあります。
-u	出力ファイルに非暗号化ファイルを含めます。 このスイッチは順序に敏感です。「u」を最初に、「a」を2番目に (または省略)、「-」または「v」を最後にする必要があります。
-u-	出力ファイルに非暗号化ファイルだけを含めます。
-ua	非暗号化ファイルも報告しますが、すべてのユーザーポリシーを使用して「should」フィールドを表示します。
-ua-	非暗号化ファイルだけを報告しますが、すべてのユーザーポリシーを使用して「should」フィールドを表示します。
-uv	ポリシーだけに違反した非暗号化ファイルをレポートします (Is=No / Should=Y)。
-uav	すべてのユーザーポリシーを使用して、ポリシーだけに違反した非暗号化ファイルをレポートします (Is=No / Should=Y)。
-d	区切り付き出力の値区切り文字として使用する文字を指定します。
-q	区切り付き出力で、引用符で囲む必要のある値を指定します。
-e	区切り付きファイルに、拡張暗号化フィールドを含めます。
-x	スキャンからディレクトリを除外します。複数の除外が許可されます。
-y	ディレクトリ間のスリープ時間 (ミリ秒単位)。このスイッチを指定すると、スキャンが遅くなりますが、CPU の応答が向上する可能性があります。

WSScan 出力

暗号化ファイルに関する WSScan の情報には、次の情報が含まれています。

出力例 :

```
[2015-07-28 07:52:33] SysData.7vdlxrsb._SDENCR_: "c:\temp\Dell - test.log" is still AES256 encrypted
```



出力	意味
日時のタイムスタンプ	ファイルがスキャンされた日時。
暗号化の種類	<p>ファイルの暗号化に使用した暗号化の種類。</p> <p>SysData : SDE 暗号化キー。</p> <p>User : ユーザー暗号化キー。</p> <p>Common : 共通暗号化キー。</p> <p>WSScan では、Encrypt for Sharing で暗号化されたファイルは報告されません。</p>
DCID	<p>デバイス ID。</p> <p>上記の例では、「7vdlxrsb」</p> <p>マッピングされているネットワークドライブをスキャンした場合、DCID はスキャンレポートに表示されません。</p>
UCID	<p>ユーザー ID。</p> <p>上記の例では、「_SDENCR_」</p> <p>UCID は、そのコンピュータのすべてのユーザーで共有されます。</p>
ファイル	<p>暗号化ファイルのパス。</p> <p>上記の例では、「c:\temp\Dell - test.log」</p>
アルゴリズム	<p>ファイルの暗号化に使用した暗号化アルゴリズム。</p> <p>上記の例では、「is still AES256 encrypted」</p> <p>Rijndael 128</p> <p>Rijndael 256</p> <p>AES 128</p> <p>AES 256</p> <p>3DES</p>

WSProbe の使用

Probing Utility は、EMS ポリシーを除き、すべてのバージョンの Encryption クライアントで使用するためのものです。次の目的で Probing Utility を使用します。

- ・ 暗号化されたコンピュータをスキャンする、またはスキャンのスケジュールを設定するため。Probing Utility は、ワークステーションのスキャン優先度ポリシーに従います。
- ・ 現在のユーザーアプリケーションデータ暗号化リストを一時的に無効または有効にするため。
- ・ 権限リストでプロセス名を追加または削除するため。
- ・ Dell ProSupport からの指示に従ってトラブルシューティングするため。

データ暗号化へのアプローチ

Windows デバイス上でデータを暗号化するようにポリシーを指定した場合、次のアプローチのいずれかを使用できます。

- ・ 最初のアプローチは、クライアントのデフォルトの動作を受け入れるというものです。共通暗号化フォルダまたはユーザー暗号化フォルダ内のフォルダを指定するか、「マイドキュメント」の暗号化、Outlook Personal フォルダの暗号化、一時ファイルの暗

号化、一時インターネットファイルの暗号化、または Windows ページファイルの暗号化を選択対象に設定した場合、対象のファイルは、作成される時、または（管理対象外ユーザーが作成した後で）管理対象ユーザーがログオンしたときに暗号化されます。クライアントは、フォルダの名前が変更されるか、クライアントがこれらのポリシーに対する変更を受信したときに、これらのポリシーで、またはこれらのポリシーに関連して指定されたフォルダもスキャンして、可能性のある暗号化/復号化がないかどうかを調べます。

- ・ また、ログオン時にワークステーションをスキャンを True に設定することもできます。ログオン時にワークステーションをスキャンが True の場合、クライアントは、ユーザーがログオンすると、現在暗号化されているフォルダと以前に暗号化されていたフォルダ内のファイルの暗号化方法をユーザーポリシーと比較して、必要な変更を行います。
- ・ 暗号化条件を満たしているファイルで暗号化ポリシーが有効になる前に作成されたファイルを暗号化するが、頻繁なスキャンによってパフォーマンスが影響されないようにするには、このユーティリティを使用して、コンピュータをスキャンするか、そのスキャンのスケジュールを設定することができます。

前提条件

- ・ 使用する Windows デバイスを暗号化する必要があります。
- ・ 連携するユーザーがログオンする必要があります。

Probing Utility の使用

WSProbe.exe はインストールメディアにあります。

構文

```
wsprobe [path]
```

```
wsprobe [-h]
```

```
wsprobe [-f path]
```

```
wsprobe [-u n] [-x process_names] [-i process_names]
```

パラメータ

パラメータ	目的
path	オプションで、可能性のある暗号化/復号化についてスキャンするデバイス上の特定のパスを指定します。パスを指定しない場合、このユーティリティは、暗号化ポリシーに関連したすべてのフォルダをスキャンします。
-h	コマンドラインヘルプを表示します。
-f	TrouDell ProSupport からの指示に従ってトラブルシューティングします。
-u	ユーザーアプリケーションデータ暗号化リストを一時的に無効または有効にします。このリストは、現在のユーザーに対して暗号化有効が選択されている場合に有効です。無効にするには 0 を、再度有効にするには 1 を指定します。ユーザーにとって有効な現在のポリシーは、次のログオン時に復元されます。
-x	権限リストにプロセス名を追加します。このリスト上のコンピュータおよびインストーラプロセス名と、このパラメータまたは HKLM\Software\CREDANT\CMGShield\EUWPrivilegedList を使用して追加するプロセス名は、アプリケーションデータ暗号化リストで指定されている場合に無視されます。コンマでプロセス名を区切ります。リストに 1 つまたは複数の空白が含まれている場合は、二重引用符でリストを囲みます。
-i	以前に権限リストに追加されたプロセス名を削除します（ハードコード化されたプロセス名は削除できません）。コンマでプロセス名を区切ります。リストに 1 つまたは複数の空白が含まれている場合は、二重引用符でリストを囲みます。



Encryption Removal Agent ステータスのチェック

Encryption Removal Agent は、次のように、サービスパネル（スタート > ファイル名を指定して実行 ... > services.msc > OK）の説明エリアにそのステータスを表示します。サービスのステータスをアップデートするために、サービスを定期的に更新します（サービスをハイライト表示 > 右クリック > 更新）。

- ・ **SED の非アクティブ化を待機中** – Encryption クライアントはまだインストールされているか、まだ設定されているか、またはその両方です。Encryption クライアントがアンインストールされるまで復号化は開始されません。
- ・ **初期スweep** – サービスは初期スweepを行っており、暗号化されたファイル数およびバイト数を計算しています。初期スweepは一度だけ実行されます。
- ・ **復号化スweep** – サービスはファイルを復号化しており、ロックされたファイルの復号化を要求している可能性もあります。
- ・ **再起動時に復号化（一部）** – 復号化スweepが完了し、一部の（すべてではない）ロックされたファイルが次の再起動時に復号化されます。
- ・ **再起動時に復号化** – 復号化スweepが完了し、すべてのロックされたファイルが次の再起動に復号化されます。
- ・ **すべてのファイルを復号化できませんでした** – 復号化スweepが完了しましたが、一部のファイルを復号化できませんでした。このステータスは、次のいずれかが発生したことを意味します。
 - ・ ロックされたファイルが大きすぎた、またはロック解除の要求時にエラーが発生したため、ロックされたファイルの復号化をスケジュールできなかった。
 - ・ ファイルの復号化中に入出力エラーが発生した。
 - ・ ポリシーによりファイルを復号化できなかった。
 - ・ ファイルが暗号化対象としてマーク付けされている。
 - ・ 復号化スweep中にエラーが発生した。
 - ・ いずれの場合でも、LogVerbosity=2（またはそれ以上）が設定されていれば、ログファイルが作成されます（ログが設定されている場合）。トラブルシューティングを行うには、ログの詳細度を 2 に設定して、Encryption Removal Agent Service を再起動し、復号化スweepを強制的に再実行します。手順については、「[\(オプション\) Encryption Removal Agent のログファイルの作成](#)」を参照してください。
- ・ **完了** – 復号化スweepが完了しました。サービス、実行ファイル、ドライバ、およびドライバ実行ファイルは、すべて次の再起動で削除されるようにスケジュールされています。

SED クライアントのトラブルシューティング

初期アクセスコードポリシーの使用

- ・ このポリシーは、ネットワークアクセスが使用できない場合に、コンピュータにログオンするために使用されます。つまり、EE Server/VE Server と AD のどちらにもアクセスできなくなります。*初期アクセスコード*ポリシーは、絶対に必要な場合にしか使用しないでください。デルはこのログイン方法を推奨しません。*初期アクセスコード*ポリシーを使用しても、ユーザー名、ドメイン、およびパスワードを使用する通常のログイン方法とは同じセキュリティレベルにはなりません。

安全性の低いログイン方法であるだけでなく、エンドユーザーが*初期アクセスコード*を使用してアクティブ化される場合、このコンピュータでユーザーがアクティブ化された記録は EE Server/VE Server には残りません。したがって、エンドユーザーがパスワードおよびセルフヘルプ質問の入力に失敗しても、EE Server/VE Server からレスポンスコードを生成することはできません。
- ・ 初期アクセスコードを使用できるのは、アクティブ化直後 **1回限り** です。エンドユーザーがログインした後は、*初期アクセスコード*が再度利用可能になることはありません。*初期アクセスコード*の入力後に初めて行われたドメインログインがキャッシュされ、*初期アクセスコード*入力フィールドは再表示されません。
- ・ *初期アクセスコード*は、次の状況下 **限定で** 表示されます。
 - ・ ユーザーが PBA 内でアクティブ化されたことがない。
 - ・ クライアントにネットワークまたは EE Server/VE Server への接続がない。

初期アクセスコードの使用

- 1 リモート管理コンソールで**初期アクセスコード** ポリシーの値を設定します。
- 2 ポリシーを保存してコミットします。
- 3 ローカルコンピュータを起動します。
- 4 アクセスコード画面が表示されたら、**初期アクセスコード**を入力します。
- 5 **青色矢印** をクリックします。
- 6 法的通知画面が表示されたら、**OK** をクリックします。
- 7 このコンピュータのユーザー資格情報で Windows にログインします。この資格情報は、ドメインの一部である必要がありません。
- 8 ログインしたら、セキュリティコンソールを開き、PBA ユーザーが正常に作成されていることを確認します。

一番上のメニューの **ログ** をクリックし、処理が正常に完了していることを示すメッセージ「<domain\username> の PBA ユーザーが作成されました」を探します。

- 9 コンピュータをシャットダウンして再起動します。
- 10 ログイン画面で、以前に Windows にログインする際に使用したユーザー名、ドメイン、およびパスワードを入力します。

PBA ユーザーの作成時のユーザー名形式と一致している必要があります。したがって、domain/username という形式を使用した場合は、domain/username という形式でユーザー名を入力する必要があります。

- 11 (Credant Manager のみ) 質問 / 回答メッセージに応答します。

青色矢印 をクリックします。

- 12 法的通知画面が表示されたら、**ログイン** をクリックします。

これで Windows が起動され、通常どおりにコンピュータを使用できます。

トラブルシューティングのための PBA ログファイルの作成

- ・ 以下のように、PBA 問題のトラブルシューティングに PBA ログファイルが必要となる場合があります。
 - ・ ネットワーク接続があるにもかかわらず、ネットワーク接続アイコンが表示されない。ログファイルには、問題を解決するための DHCP 情報が記載されています。
 - ・ DDP EE Server/VE Server 接続アイコンが表示されない。ログファイルには、EE Server/VE Server との接続の問題を診断するのに役立つ情報が記載されています。
 - ・ 正しい資格情報を入力しても認証に失敗する。この問題の診断には、DDP EE Server/VE Server ログと併用されるログファイルが役立ちます。

PBA (レガシー PBA) 起動時のログのキャプチャ

- 1 USB ドライブに USB ドライブのルートレベルでフォルダを作成し、**\CredantSED** と命名します。
- 2 actions.txt という名前のファイルを作成し、**\CredantSED** フォルダ内に格納します。
- 3 actions.txt に、次の行を追加します。

```
get environment
```

- 4 ファイルを保存して閉じます。

コンピュータの電源がオフのときには USB ドライブを挿入しないでください。シャットダウン状態の間に USB ドライブがすでに挿入されている場合は、USB ドライブを取り外します。

- 5 コンピュータをオンにし、PBA にログインします。この手順でログが収集されるように、USB ドライブをコンピュータに挿入します。
- 6 USB ドライブを挿入後、5~10 秒待機してからそのドライブを取り外します。

credpbaenv.tgz ファイルが、必要なログファイルが含まれる **\CredantSED** フォルダに作成されます。

PBA (UEFI PBA) 起動時のログのキャプチャ



- 1 USB ドライブのルートレベルに **PBAErr.log** という名前のファイルを作成します。
- 2 コンピュータの電源を入れる前に、USB ドライブを挿入します。
- 3 ログが必要な問題を再度発生させた後で USB ドライブを取り外します。

PBAErr.log ファイルがアップデートされ、リアルタイムに書き込まれます。

Dell ControlVault ドライバ

Dell ControlVault ドライバおよびファームウェアのアップデート

工場で Dell コンピュータ にインストールされている Dell ControlVault ドライバおよびファームウェアは古いため、次の手順の順序にしたがってアップデートする必要があります。

クライアントのインストールの際に、Dell ControlVault のドライバをアップデートするためにインストーラを終了することを促すエラーメッセージが表示された場合、このメッセージは無視してクライアントのインストールを続行します。Dell ControlVault ドライバ（およびファームウェア）はクライアントのインストールが完了した後にアップデートすることができません。

最新のドライバのダウンロード

- 1 Support.dell.com に移動します。
- 2 お使いのコンピュータモデルを選択します。
- 3 **ドライバおよびダウンロード** を選択します。
- 4 ターゲットコンピューターの **オペレーティングシステム** を選択します。
- 5 **セキュリティ** カテゴリを展開します。
- 6 Dell ControlVault ドライバをダウンロードして保存します。
- 7 Dell ControlVault ファームウェアをダウンロードして保存します。
- 8 必要に応じて、ターゲットコンピュータにドライバとファームウェアをコピーします。

Dell ControlVault ドライバのインストール

ドライバのインストールファイルをダウンロードしたフォルダに移動します。

Dell ControlVault ドライバをダブルクリックして自己解凍形式の実行可能ファイルを実行します。



：ドライバを先にインストールします。本文書の作成時におけるドライバのファイル名は **ControlVault_Setup_2MYJC_A37_ZPE.exe** です。

続行 をクリックして開始します。

Ok をクリックして、ドライバファイルを **C:\Dell\Drivers\ のデフォルトの場所に解凍します。**

はい をクリックして新しいフォルダの作成を許可します。

正常に解凍しましたというメッセージが表示されたら **Ok** をクリックします。

抽出後、ファイルが含まれているフォルダが表示されます。表示されない場合は、ファイルを抽出したフォルダに移動します。この場合、フォルダは **JW22F** です。

CVHCI64.MSI をダブルクリックしてドライバインストーラを実行します。[この例の場合は **CVHCI64.MSI** です (32 ビットのコンピュータ用 CVHCI)]。

ようこそ画面で **次へ** をクリックします。

次へ をクリックしてドライバを **C:\Program Files\Broadcom Corporation\Broadcom USH Host Components** のデフォルトの場所にインストールします。

完了 オプションを選択して **次へ** をクリックします。

インストール をクリックしてドライバのインストールを開始します。

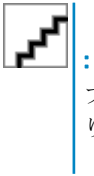
必要に応じて、インストーラのログファイルを表示するチェックボックスを選択します。**終了** をクリックしてウィザードを終了します。

ドライバのインストールの検証

オペレーティングシステムおよびハードウェアの構成によっては、デバイスマネージャに Dell ControlVault デバイス（およびその他のデバイス）が表示されます。

Dell ControlVault ファームウェアのインストール

- 1 ファームウェアのインストールファイルをダウンロードしたフォルダに移動します。
- 2 Dell ControlVault ファームウェアをダブルクリックして自己解凍形式の実行可能ファイルを実行します。
- 3 **続行** をクリックして開始します。
- 4 **Ok** をクリックして、ドライバファイルを **C:\Dell\Drivers\ のデフォルトの場所に解凍します。**
- 5 **はい** をクリックして新しいフォルダの作成を許可します。
- 6 正常に解凍しましたというメッセージが表示されたら **Ok** をクリックします。
- 7 抽出後、ファイルが含まれているフォルダが表示されます。表示されない場合は、ファイルを抽出したフォルダに移動します。**ファームウェア** フォルダを選択します。
- 8 **ushupgrade.exe** をダブルクリックしてファームウェアインストーラを実行します。
- 9 **スタート** をクリックしてファームウェアのアップグレードを開始します。



ファームウェアの旧バージョンからアップグレードする場合は、管理者パスワードを入力するよう求められることがあります。Broadcom をパスワードとして入力し、このダイアログが表示された場合は **Enter** をクリックします。

いくつかのステータスメッセージが表示されます。

- 10 **再起動** をクリックしてファームウェアのアップグレードを完了します。

Dell ControlVault ドライバおよびファームウェアのアップデートが完了しました。

Cloud クライアント

詳細画面の使用

トラブルシューティングやサポートの問題については、**詳細** 画面を使用します。例：

- ・ の場合はユーザが作成したフォルダがない暗号化するには、を選択します **詳細 > ファイル > フォルダの状態** を状態を確認します。
- ・ エンドユーザがサポートを要求した場合は、拡張詳細画面を設定し、このタブには、適用されるポリシーがリストされます。
- ・ トラブルシューティングのログを表示します。

拡張症再画面の使用

- ・ キーを押した状態で、タスクトレイアイコンをクリックし、**詳細** を選択します。
- ・ ファイルおよびフォルダに加えて、次の情報が表示されます。

セキュリティ： キー、キータイプ、状態が表示されます。



監査： モジュール、ユーザー ID、イベントタイプがリストされます。この監査ログでは情報はキューに入っており、指定した間隔で EE Server/VE Server に送信されます。管理者は、Compliance Reporter を使用して監査用のレポートを作成することができます。

ポリシー名と値がリストされます。

ログファイルの表示

- ・ 詳細画面の左下角から **ログの表示** をクリックします。

ログファイルは、`C:\ProgramData\Dell\Dell Data Protection\Cloud Edition` でも確認できます。

一時的なフォルダ管理権限の提供

Cloud Edition のインストール前にユーザーがファイルをアップロードした場合、一時的なフォルダ管理権限を一部のユーザーに提供することができます。

- 1 特定のエンドポイントの **フォルダ管理の有効** ポリシーを、**True** に設定します。
- 2 既存のフォルダの暗号化を手動で有効にするようユーザーに指示します。ファイルは、そのファイルがクラウドに同期されるときに暗号化されます。
- 3 フォルダが暗号化された後、これらのエンドポイントの **フォルダ管理の有効** ポリシーを、**False** に設定します。

よくあるご質問 (FAQ)

質問

- ・ **混乱を招くファイル名** ポリシーを GUID から拡張子のみに変更しました。以前に同期していたフォルダでは、ファイルが依然として GUID ファイル名の形式に暗号化されます。なぜですか。

回答

- ・ EE Server/VE Server でポリシーを変更しても、Cloud Edition はそのフォルダの以前のポリシーを維持します。新たに作成したフォルダには、新しいポリシーが適用され、**拡張子のみ**形式に暗号化されます。

解決策

- ・ 古いファイルに **拡張子のみ** 形式を再適用するには、その形式を切り取って、新しいポリシーを適用する新規フォルダに貼り付けてください。

質問

- ・ Cloud Edition をインストールしてアクティブ化しましたが、新しいドメインが立ち上がりました。古いドメインは分離して新しいドメインに結合しています。Cloud Edition は依然としてアクティブと表示されていますが、ポリシーアップデートが取得されておらず、暗号化が行われません。なぜですか。

回答

- ・ EE Server/VE Server は、最初にアクティブ化を実行したエンドポイントしか認識しません。エンドポイント名を変更しても、EE Server/VE Server では、ポリシーの送信先のエンドポイントが認識されないため、Cloud Edition は予期したとおりに実行しません。

解決策

- 1 Cloud Edition をアンインストールし、再インストールします。

- 2 同じユーザーを再度アクティブ化します。

① メモ:

この操作の前に、ローカルコンピュータとのファイルの同期を必ず停止してください。そうしなければ、クラウドのデータが保護を解除されたり、場合によっては削除されたりすることがあります。

質問

- ・ 管理されたセッションでは Cloud Edition で非難読化ファイルがダウンロードされないのはなぜですか。

回答

- ・ Cloud Edition では、ブラウザで表示される内容すべてが .xen ファイルに変換されます。これには、ファイルが作成された後のクリアテキストダウンロードも含まれます。エンドユーザーには、管理対象のクラウドウェブサイトにあるすべてのファイルを保護するように勧めてください。

UEFI コンピュータ

ネットワーク接続のトラブルシューティング

- ・ UEFI ファームウェア搭載のコンピュータで起動前認証を正常に行うには、PBA モードでネットワーク接続が必要です。デフォルトでは、UEFI ファームウェア搭載のコンピュータには、オペレーティングシステムがロードされるまでネットワーク接続がなく、これは PBA モードの後で実行されます。UEFI コンピュータ用の事前インストール設定に概説されているコンピュータ手順が成功し、適切に設定されると、コンピュータがネットワークに接続するとき、起動前認証画面にネットワーク接続アイコンが表示されます。



- ・ 依然として起動前認証中にネットワーク接続アイコンが表示されない場合は、ネットワークケーブルを調べてコンピュータに接続していることを確認してください。接続していなかったり、失われていた場合、コンピュータを再起動して PBA モードを再開します。

TPM および BitLocker

TPM および BitLocker のエラーコード

定数 / 値	説明
TPM_E_ERROR_MASK 0x80280000	これは、TPM ハードウェアエラーを win エラーに変換するためのエラーマスクです。
TPM_E_AUTHFAIL 0x80280001	認証に失敗しました。
TPM_E_BADINDEX 0x80280002	PCR、DIR、または他のレジスタのインデックスが正しくありません。
TPM_E_BAD_PARAMETER	1つまたは複数のパラメータが間違っています。



定数 / 値	説明
0x80280003	
TPM_E_AUDITFAILURE	操作は正しく完了したが、その操作の監査が失敗しました。
0x80280004	
TPM_E_CLEAR_DISABLED	クリア無効フラグが設定され、すべてのクリア操作で物理的なアクセスが必要になりました。
0x80280005	
TPM_E_DEACTIVATED	TPM をアクティブ化します。
0x80280006	
TPM_E_DISABLED	TPM を有効にします。
0x80280007	
TPM_E_DISABLED_CMD	ターゲットコマンドが無効になっています。
0x80280008	
TPM_E_FAIL	操作が失敗しました。
0x80280009	
TPM_E_BAD_ORDINAL	序数が不明または一貫していませんでした。
0x8028000A	
TPM_E_INSTALL_DISABLED	所有者をインストールする機能が無効です。
0x8028000B	
TPM_E_INVALID_KEYHANDLE	キーハンドルを解釈できません。
0x8028000C	
TPM_E_KEYNOTFOUND	キーハンドルが無効なキーを示しています。
0x8028000D	
TPM_E_INAPPROPRIATE_ENC	受け入れられない暗号化スキーマです。
0x8028000E	
TPM_E_MIGRATEFAIL	移行承認に失敗しました。
0x8028000F	
TPM_E_INVALID_PCR_INFO	PCR 情報を解釈できませんでした。
0x80280010	
TPM_E_NOSPACE	キーをロードする余裕がありません。
0x80280011	
TPM_E_NOSRK	ストレージルートキー (SRK) セットがありません。



定数 / 値	説明
0x80280012	
TPM_E_NOTSEALED_BLOB	暗号化された BLOB が無効であるか、この TPM では作成されませんでした。
0x80280013	
TPM_E_OWNER_SET	TPM にはすでに所有者がいます。
0x80280014	
TPM_E_RESOURCES	TPM には、リクエストされたアクションを実行するための内部リソースが不足しています。
0x80280015	
TPM_E_SHORTRANDOM	ランダム文字列が短すぎました。
0x80280016	
TPM_E_SIZE	TPM には、操作を実行するための容量がありません。
0x80280017	
TPM_E_WRONGPCRVAL	名前付き PCR 値が現在の PCR 値に一致していません。
0x80280018	
TPM_E_BAD_PARAM_SIZE	コマンドに対する paramSize 引数の値が正しくありません。
0x80280019	
TPM_E_SHA_THREAD	既存の SHA-1 スレッドがありません。
0x8028001A	
TPM_E_SHA_ERROR	既存の SHA-1 スレッドでエラーがすでに発生しているので、計算を続行できません。
0x8028001B	
TPM_E_FAILEDSELFTTEST	TPM ハードウェアデバイスが、その内部セルフテスト中に障害を報告しました。問題を解決するには、コンピュータを再起動してみてください。問題が解決しない場合、TPM ハードウェアまたはマザーボードの交換が必要になることがあります。
0x8028001C	
TPM_E_AUTH2FAIL	2 キー機能での 2 番目のキーの認証が失敗しました。
0x8028001D	
TPM_E_BADTAG	コマンドに送信されたタグ値が正しくありません。
0x8028001E	
TPM_E_IOERROR	TPM への情報の転送中に IO エラーが発生しました。
0x8028001F	
TPM_E_ENCRYPT_ERROR	暗号化プロセスに問題が発生しました。
0x80280020	
TPM_E_DECRYPT_ERROR	復号化プロセスが完了しませんでした。



定数 / 値	説明
0x80280021	
TPM_E_INVALID_AUTHHANDLE	無効なハンドルが使用されました。
0x80280022	
TPM_E_NO_ENDORSEMENT	TPM には、保証キー (EK) がインストールされていません。
0x80280023	
TPM_E_INVALID_KEYUSAGE	キーの使用は許可されていません。
0x80280024	
TPM_E_WRONG_ENTITYTYPE	送信されたエンティティタイプは許可されていません。
0x80280025	
TPM_E_INVALID_POSTINIT	コマンドは、TPM の初期およびその後の TPM スタートアップに関連して間違った順序で受信されました。
0x80280026	
TPM_E_INAPPROPRIATE_SIG	署名データには、追加の DER 情報を含められません。
0x80280027	
TPM_E_BAD_KEY_PROPERTY	TPM_KEY_PARM におけるキープロパティは、この TPM によってサポートされません。
0x80280028	
TPM_E_BAD_MIGRATION	このキーの移行プロパティは正しくありません。
0x80280029	
TPM_E_BAD_SCHEME	このキーの署名および暗号化スキーマが正しくないか、この状況では許可されていません。
0x8028002A	
TPM_E_BAD_DATASIZE	データ (または BLOB) パラメータのサイズが間違っているか、参照キーと一致していません。
0x8028002B	
TPM_E_BAD_MODE	TPM_GetCapability の capArea および subCapArea、TPM_PhysicalPresence の physicalPresence パラメータ、TPM_CreateMigrationBlob の migrationType などのモードパラメータが間違っています。
0x8028002C	
TPM_E_BAD_PRESENCE	physicalPresence または physicalPresenceLock ビットのいずれかの値が間違っています。
0x8028002D	
TPM_E_BAD_VERSION	TPM は、このバージョンの機能を実行できません。
0x8028002E	
TPM_E_NO_WRAP_TRANSPORT	TPM が、ラップされたトランスポートセッションを許可していません。
0x8028002F	

定数 / 値	説明
TPM_E_AUDITFAIL_UNSUCCESSFUL 0x80280030	TPM 監査構築が失敗し、基盤となるコマンドが失敗コードも返しました。
TPM_E_AUDITFAIL_SUCCESSFUL 0x80280031	TPM 監査構築が失敗し、基盤となるコマンドが成功を返しました。
TPM_E_NOTRESETTABLE 0x80280032	リセット可能な属性を持たない PCR レジスタをリセットしようとしています。
TPM_E_NOTLOCAL 0x80280033	コマンドトランスポートの一部ではないローカリティおよびローカリティ修飾子を必要とする PCR レジスタをリセットしようとしています。
TPM_E_BAD_TYPE 0x80280034	識別情報 BLOB が正しく入力されないようにします。
TPM_E_INVALID_RESOURCE 0x80280035	コンテキストの保存時に、識別されたリソースタイプが実際のリソースに一致していません。
TPM_E_NOTFIPS 0x80280036	TPM が、FIPS モードの場合にのみ利用できるコマンドを実行しようとしています。
TPM_E_INVALID_FAMILY 0x80280037	コマンドが、無効なファミリー ID を使用しようとしています。
TPM_E_NO_NV_PERMISSION 0x80280038	NV ストレージを操作するための許可が利用できません。
TPM_E_REQUIRES_SIGN 0x80280039	操作には署名済みコマンドが必要です。
TPM_E_KEY_NOTSUPPORTED 0x8028003A	NV キーをロードする操作が間違っています。
TPM_E_AUTH_CONFLICT 0x8028003B	NV_LoadKey BLOB には所有者と BLOB 認証の両方が必要です。
TPM_E_AREA_LOCKED 0x8028003C	NV 領域はロックされ、書き込みできません。
TPM_E_BAD_LOCALITY 0x8028003D	ローカリティは、試みた操作にとって正しくありません。
TPM_E_READ_ONLY 0x8028003E	NV 領域は読み取り専用で、書き込みできません。



定数 / 値	説明
TPM_E_PER_NOWRITE 0x8028003F	NV 領域への書き込みが保護されていません。
TPM_E_FAMILYCOUNT 0x80280040	ファミリーカウント値が一致していません。
TPM_E_WRITE_LOCKED 0x80280041	NV 領域はすでに書き込まれています。
TPM_E_BAD_ATTRIBUTES 0x80280042	NV 領域属性が競合しています。
TPM_E_INVALID_STRUCTURE 0x80280043	構造タグおよびバージョンが無効であるか、一貫していません。
TPM_E_KEY_OWNER_CONTROL 0x80280044	キーが、TPM 所有者の制御下であり、TPM 所有者によってのみ排除できます。
TPM_E_BAD_COUNTER 0x80280045	カウンタハンドルが正しくありません。
TPM_E_NOT_FULLWRITE 0x80280046	書き込みは、領域の完全な書き込みではありません。
TPM_E_CONTEXT_GAP 0x80280047	保存したコンテキストカウントのギャップが大きすぎます。
TPM_E_MAXNVWRITES 0x80280048	所有者なしの NV 書き込みの最大数を超過しました。
TPM_E_NOOPERATOR 0x80280049	演算子 AuthData 値が設定されていません。
TPM_E_RESOURCEMISSING 0x8028004A	コンテキストで示されたリソースがロードされていません。
TPM_E_DELEGATE_LOCK 0x8028004B	委任管理者がロックされています。
TPM_E_DELEGATE_FAMILY 0x8028004C	委任されたファミリー以外のファミリーを管理しようとしています。
TPM_E_DELEGATE_ADMIN 0x8028004D	委任テーブル管理が有効ではありません。

定数 / 値	説明
TPM_E_TRANSPORT_NOTEXCLUSIVE 0x8028004E	排他的なトランスポートセッションの外部で実行されたコマンドがありました。
TPM_E_OWNER_CONTROL 0x8028004F	所有者排除制御キーをコンテキスト保存しようとしています。
TPM_E_DAA_RESOURCES 0x80280050	DAA コマンドにはその実行に利用できるリソースがありません。
TPM_E_DAA_INPUT_DATA0 0x80280051	DAA パラメータ inputData0 の整合性チェックが失敗しました。
TPM_E_DAA_INPUT_DATA1 0x80280052	DAA パラメータ inputData1 の整合性チェックが失敗しました。
TPM_E_DAA_ISSUER_SETTINGS 0x80280053	DAA_issuerSettings の整合性チェックが失敗しました。
TPM_E_DAA_TPM_SETTINGS 0x80280054	DAA_tpmSpecific の整合性チェックが失敗しました。
TPM_E_DAA_STAGE 0x80280055	送信された DAA コマンドで示された原子的なプロセスが、予想されたプロセスではありません。
TPM_E_DAA_ISSUER_VALIDITY 0x80280056	発行者の妥当性チェックが不整合を検出しました。
TPM_E_DAA_WRONG_W 0x80280057	w の整合性チェックが失敗しました。
TPM_E_BAD_HANDLE 0x80280058	ハンドルが正しくありません。
TPM_E_BAD_DELEGATE 0x80280059	委任が正しくありません。
TPM_E_BADCONTEXT 0x8028005A	コンテキスト BLOB が無効です。
TPM_E_TOOMANYCONTEXTS 0x8028005B	TPM によって保持されているコンテキストが多すぎます。
TPM_E_MA_TICKET_SIGNATURE 0x8028005C	移行承認機関署名検証が失敗しました。



定数 / 値	説明
TPM_E_MA_DESTINATION 0x8028005D	移行先が認証されていません。
TPM_E_MA_SOURCE 0x8028005E	移行元が正しくありません。
TPM_E_MA_AUTHORITY 0x8028005F	移行承認機関が正しくありません。
TPM_E_PERMANENTEK 0x80280061	EK を呼び出そうとしており、EK は呼び出し可能ではありません。
TPM_E_BAD_SIGNATURE 0x80280062	CMK チケットの署名が間違っています。
TPM_E_NOCONTEXTSPACE 0x80280063	コンテキストリストにコンテキストを追加するための余裕がありません。
TPM_E_COMMAND_BLOCKED 0x80280400	コマンドはブロックされました。
TPM_E_INVALID_HANDLE 0x80280401	指定されたハンドルが見つかりませんでした。
TPM_E_DUPLICATE_VHANDLE 0x80280402	TPM が重複したハンドルを返したので、コマンドを再送信する必要があります。
TPM_E_EMBEDDED_COMMAND_BLOCKED 0x80280403	トランスポート内のコマンドがブロックされました。
TPM_E_EMBEDDED_COMMAND_UNSUPPORTED 0x80280404	トランスポート内のコマンドがサポートされていません。
TPM_E_RETRY 0x80280800	TPM は非常にビジーでコマンドにすぐには反応できませんが、後からコマンドを再送信できます。
TPM_E_NEEDS_SELFTEST 0x80280801	SelfTestFull が実行されていません。
TPM_E_DOING_SELFTEST 0x80280802	TPM は現在、完全な自己テストを実行しています。
TPM_E_DEFEND_LOCK_RUNNING 0x80280803	TPM は、辞書攻撃に対して防御しており、タイムアウト時間内です。

定数 / 値	説明
TBS_E_INTERNAL_ERROR 0x80284001	内部ソフトウェアエラーが検出されました。
TBS_E_BAD_PARAMETER 0x80284002	1つまたは複数の入力パラメータが間違っています。
TBS_E_INVALID_OUTPUT_POINTER 0x80284003	指定された出力ポインタが間違っています。
TBS_E_INVALID_CONTEXT 0x80284004	指定されたコンテキストハンドルは、有効なコンテキストを参照していません。
TBS_E_INSUFFICIENT_BUFFER 0x80284005	指定の出力バッファが小さすぎます。
TBS_E_IOERROR 0x80284006	TPM との通信中にエラーが発生しました。
TBS_E_INVALID_CONTEXT_PARAM 0x80284007	1つまたは複数のコンテキストパラメータが無効です。
TBS_E_SERVICE_NOT_RUNNING 0x80284008	TBS サービスが実行しておらず、開始できません。
TBS_E_TOO_MANY_TBS_CONTEXTS 0x80284009	開いているコンテキストが多すぎるので、新しいコンテキストを作成できませんでした。
TBS_E_TOO_MANY_RESOURCES 0x8028400A	開いている仮想リソースが多すぎるので、新しい仮想リソースを作成できませんでした。
TBS_E_SERVICE_START_PENDING 0x8028400B	TBS サービスは開始していますが、まだ実行していません。
TBS_E_PPI_NOT_SUPPORTED 0x8028400C	物理プレゼンスインターフェースがサポートされていません。
TBS_E_COMMAND_CANCELED 0x8028400D	コマンドがキャンセルされました。
TBS_E_BUFFER_TOO_LARGE 0x8028400E	入力または出力バッファが大きすぎます。
TBS_E_TPM_NOT_FOUND 0x8028400F	このコンピュータ上に、互換性のある TPM セキュリティデバイスが見つかりません。



定数 / 値	説明
TBS_E_SERVICE_DISABLED 0x80284010	TBS サービスが無効になっています。
TBS_E_NO_EVENT_LOG 0x80284011	TCG イベントログが利用できません。
TBS_E_ACCESS_DENIED 0x80284012	呼び出し側に、リクエストされた操作を実行するための適切な権限がありません。
TBS_E_PROVISIONING_NOT_ALLOWED 0x80284013	TPM プロビジョニングアクションが、指定のフラグによって許可されていません。プロビジョニングが成功するには、いくつかのアクションのいずれかが必要になる場合があります。TPM を準備された状態にする TPM 管理コンソール (tpm.msc) アクションが役立ちます。詳細については、Win32_Tpm WMI メソッド「Provision」に関する文書を参照してください。(必要となる可能性のあるアクションには、TPM 所有者認証値のシステムへのインポート、TPM をプロビジョニングし「ForceClear_Allowed」または「PhysicalPresencePrompts_Allowed」のどちらかに対して TRUE を指定するための Win32_Tpm WMI メソッドの呼び出し (追加情報で返される値で示されるとおり)、またはシステム BIOS での TPM の有効化があります)。
TBS_E_PPI_FUNCTION_UNSUPPORTED 0x80284014	このファームウェアの物理プレゼンスインターフェースは、リクエストされたメソッドをサポートしていません。
TBS_E_OWNERAUTH_NOT_FOUND 0x80284015	リクエストされた TPM OwnerAuth 値が見つかりませんでした。
TBS_E_PROVISIONING_INCOMPLETE 0x80284016	TPM プロビジョニングが完了しませんでした。プロビジョニングを完了するための詳細については、TPM をプロビジョニングするための Win32_Tpm WMI メソッド (「Provision」) を呼び出し、リクエストされた情報をチェックしてください。
TPMAPI_E_INVALID_STATE 0x80290100	コマンドバッファは正しい状態にありません。
TPMAPI_E_NOT_ENOUGH_DATA 0x80290101	コマンドバッファは、リクエストに応えられるだけ十分なデータを含んでいません。
TPMAPI_E_TOO_MUCH_DATA 0x80290102	コマンドバッファは、これ以上データを含められません。
TPMAPI_E_INVALID_OUTPUT_POINTER 0x80290103	1つまたは複数の出力パラメータが NULL または無効でした。
TPMAPI_E_INVALID_PARAMETER 0x80290104	1つまたは複数の入力パラメータが無効です。
TPMAPI_E_OUT_OF_MEMORY	リクエストに応えられるだけ十分なメモリが利用できませんでした。

定数 / 値	説明
0x80290105	
TPMAPI_E_BUFFER_TOO_SMALL	指定のバッファが小さすぎました。
0x80290106	
TPMAPI_E_INTERNAL_ERROR	内部エラーが検出されました。
0x80290107	
TPMAPI_E_ACCESS_DENIED	呼び出し側に、リクエストされた操作を実行するための適切な権限がありません。
0x80290108	
TPMAPI_E_AUTHORIZATION_FAILED	指定した承認情報が無効でした。
0x80290109	
TPMAPI_E_INVALID_CONTEXT_HANDLE	指定のコンテキストが有効ではありませんでした。
0x8029010A	
TPMAPI_E_TBS_COMMUNICATION_ERROR	TBS との通信中にエラーが発生しました。
0x8029010B	
TPMAPI_E_TPM_COMMAND_ERROR	TPM が予想外の結果を返しました。
0x8029010C	
TPMAPI_E_MESSAGE_TOO_LARGE	メッセージは、エンコードスキーマには大きすぎます。
0x8029010D	
TPMAPI_E_INVALID_ENCODING	BLOB のエンコードが認識されませんでした。
0x8029010E	
TPMAPI_E_INVALID_KEY_SIZE	キーサイズが有効ではありません。
0x8029010F	
TPMAPI_E_ENCRYPTION_FAILED	暗号操作が失敗しました。
0x80290110	
TPMAPI_E_INVALID_KEY_PARAMS	キーパラメータ構造が有効ではありませんでした。
0x80290111	
TPMAPI_E_INVALID_MIGRATION_AUTHORIZATION_BLOB	リクエストされた提供データが有効な移行承認 BLOB ではないようです。
0x80290112	
TPMAPI_E_INVALID_PCR_INDEX	指定の PCR インデックスが無効でした。
0x80290113	
TPMAPI_E_INVALID_DELEGATE_BLOB	与えられたデータは、有効な委任 BLOB ではないようです。



定数 / 値	説明
0x80290114	
TPMAPI_E_INVALID_CONTEXT_PARAMS	1つまたは複数の指定されたコンテキストパラメータが有効ではありませんでした。
0x80290115	
TPMAPI_E_INVALID_KEY_BLOB	与えられたデータは、有効なキー BLOB ではないようです。
0x80290116	
TPMAPI_E_INVALID_PCR_DATA	指定の PCR データは無効でした。
0x80290117	
TPMAPI_E_INVALID_OWNER_AUTH	所有者認証データの形式が無効でした。
0x80290118	
TPMAPI_E_FIPS_RNG_CHECK_FAILED	生成されたランダム数は FIPS RNG チェックをパスしません。
0x80290119	
TPMAPI_E_EMPTY_TCG_LOG	TCG イベントログにはデータが含まれていません。
0x8029011A	
TPMAPI_E_INVALID_TCG_LOG_ENTRY	TCG イベントログでのエントリが無効です。
0x8029011B	
TPMAPI_E_TCG_SEPARATOR_ABSENT	TCG 区切り文字が見つかりません
0x8029011C	
TPMAPI_E_TCG_INVALID_DIGEST_ENTRY	TCG ログエントリ内のダイジェスト値がハッシュされたデータに一致しませんでした。
0x8029011D	
TPMAPI_E_POLICY_DENIES_OPERATION	リクエストされた操作は、現在の TPM ポリシーによってブロックされました。サポートが必要な場合は、システム管理者に連絡してください。
0x8029011E	
TBSIMP_E_BUFFER_TOO_SMALL	指定のバッファが小さすぎました。
0x80290200	
TBSIMP_E_CLEANUP_FAILED	コンテキストをクリーンアップできませんでした。
0x80290201	
TBSIMP_E_INVALID_CONTEXT_HANDLE	指定のコンテキストハンドルが無効です。
0x80290202	
TBSIMP_E_INVALID_CONTEXT_PARAM	無効なコンテキストパラメータが指定されました。
0x80290203	
TBSIMP_E_TPM_ERROR	TPM との通信中にエラーが発生しました。



定数 / 値	説明
0x80290204	
TBSIMP_E_HASH_BAD_KEY	指定のキーのエントリが見つかりませんでした。
0x80290205	
TBSIMP_E_DUPLICATE_VHANDLE	指定の仮想ハンドルが、すでに使用されている仮想ハンドルに一致しています。
0x80290206	
TBSIMP_E_INVALID_OUTPUT_POINTER	返されたハンドルの場所を示すポインタが NULL または無効でした。
0x80290207	
TBSIMP_E_INVALID_PARAMETER	1つまたは複数のパラメータが無効です。
0x80290208	
TBSIMP_E_RPC_INIT_FAILED	RPC サブシステムを初期化できませんでした。
0x80290209	
TBSIMP_E_SCHEDULER_NOT_RUNNING	TBS スケジューラが実行していません。
0x8029020A	
TBSIMP_E_COMMAND_CANCELED	コマンドがキャンセルされました。
0x8029020B	
TBSIMP_E_OUT_OF_MEMORY	リクエストに応えるだけ十分なメモリがありませんでした。
0x8029020C	
TBSIMP_E_LIST_NO_MORE_ITEMS	指定のリストが空か、繰り返しがリストの最後に到達しました。
0x8029020D	
TBSIMP_E_LIST_NOT_FOUND	指定のアイテムがリストに見つかりませんでした。
0x8029020E	
TBSIMP_E_NOT_ENOUGH_SPACE	TPM には、リクエストされたリソースをロードできるだけ十分な容量がありません。
0x8029020F	
TBSIMP_E_NOT_ENOUGH_TPM_CONTEXTS	使用されている TPM コンテキストが多すぎます。
0x80290210	
TBSIMP_E_COMMAND_FAILED	TPM コマンドが失敗しました。
0x80290211	
TBSIMP_E_UNKNOWN_ORDINAL	TBS は、指定の序数を認識していません。
0x80290212	
TBSIMP_E_RESOURCE_EXPIRED	リクエストされたリソースはもはや使用可能ではありません。



定数 / 値	説明
0x80290213	
TBSIMP_E_INVALID_RESOURCE	リソースタイプは一致しませんでした。
0x80290214	
TBSIMP_E_NOHING_TO_UNLOAD	リソースをアンロードできません。
0x80290215	
TBSIMP_E_HASH_TABLE_FULL	新しいエントリをハッシュテーブルに追加できません。
0x80290216	
TBSIMP_E_TOO_MANY_TBS_CONTEXTS	開いているコンテキストが多すぎるので、新しい TBS コンテキストを作成できませんでした。
0x80290217	
TBSIMP_E_TOO_MANY_RESOURCES	開いている仮想リソースが多すぎるので、新しい仮想リソースを作成できませんでした。
0x80290218	
TBSIMP_E_PPI_NOT_SUPPORTED	物理プレゼンスインターフェースがサポートされていません。
0x80290219	
TBSIMP_E_TPM_INCOMPATIBLE	TBS は、システム上に見つかった TPM のバージョンと互換性がありません。
0x8029021A	
TBSIMP_E_NO_EVENT_LOG	TCG イベントログが利用できません。
0x8029021B	
TPM_E_PPI_ACPI_FAILURE	物理プレゼンスコマンドに対する BIOS の応答を取得しようとしているときに、一般的なエラーが検出されました。
0x80290300	
TPM_E_PPI_USER_ABORT	ユーザーは TPM 操作リクエストを確認できませんでした。
0x80290301	
TPM_E_PPI_BIOS_FAILURE	BIOS の障害により、リクエストされた TPM 操作の正常な実行が妨げられました (たとえば、無効な TPM 操作リクエスト、TPM との BIOS 通信エラー)。
0x80290302	
TPM_E_PPI_NOT_SUPPORTED	BIOS は物理プレゼンスインターフェースをサポートしていません。
0x80290303	
TPM_E_PPI_BLOCKED_IN_BIOS	物理プレゼンスコマンドは、現在の BIOS 設定によってブロックされました。システム所有者は、コマンドを許可するように BIOS 設定を再設定できる場合があります。
0x80290304	
TPM_E_PCP_ERROR_MASK	これは、プラットフォーム暗号化プロバイダエラーを win エラーに変換するためのエラーマスクです。
0x80290400	

定数 / 値	説明
TPM_E_PCP_DEVICE_NOT_READY 0x80290401	プラットフォーム暗号化デバイスは現在準備できていません。動作できるように完全にプロビジョニングする必要があります。
TPM_E_PCP_INVALID_HANDLE 0x80290402	プラットフォーム暗号化プロバイダに提供されたハンドルが無効です。
TPM_E_PCP_INVALID_PARAMETER 0x80290403	プラットフォーム暗号化プロバイダに提供されたパラメータが無効です。
TPM_E_PCP_FLAG_NOT_SUPPORTED 0x80290404	プラットフォーム暗号化プロバイダに提供されたフラグがサポートされていません。
TPM_E_PCP_NOT_SUPPORTED 0x80290405	リクエストされた操作は、このプラットフォーム暗号化プロバイダでサポートされていません。
TPM_E_PCP_BUFFER_TOO_SMALL 0x80290406	バッファが非常に小さく、すべてのデータは含められません。バッファに情報が書き込まれていません。
TPM_E_PCP_INTERNAL_ERROR 0x80290407	プラットフォーム暗号化プロバイダで、予想外の内部エラーが発生しました。
TPM_E_PCP_AUTHENTICATION_FAILED 0x80290408	プロバイダオブジェクトを使用する承認が失敗しました。
TPM_E_PCP_AUTHENTICATION_IGNORED 0x80290409	プラットフォーム暗号化デバイスは、辞書攻撃を抑えるために、プロバイダオブジェクトの承認を無視しました。
TPM_E_PCP_POLICY_NOT_FOUND 0x8029040A	参照ポリシーが見つかりませんでした。
TPM_E_PCP_PROFILE_NOT_FOUND 0x8029040B	参照プロファイルが見つかりませんでした。
TPM_E_PCP_VALIDATION_FAILED 0x8029040C	検証が成功しませんでした。
PLA_E_DCS_NOT_FOUND 0x80300002	データコレクタセットが見つかりませんでした。
PLA_E_DCS_IN_USE 0x803000AA	データコレクタセットまたはその従属関係の1つがすでに使用されています。
PLA_E_TOO_MANY_FOLDERS 0x80300045	フォルダが多すぎるため、データコレクタセットを開始できません。



定数 / 値	説明
PLA_E_NO_MIN_DISK 0x80300070	データコレクタセットを開始できるだけ十分な空きディスク容量がありません。
PLA_E_DCS_ALREADY_EXISTS 0x803000B7	データコレクタセットがすでに存在しています。
PLA_S_PROPERTY_IGNORED 0x00300100	プロパティ値は無視されます。
PLA_E_PROPERTY_CONFLICT 0x80300101	プロパティ値が競合しています。
PLA_E_DCS_SINGLETON_REQUIRED 0x80300102	このデータコレクタセットの現在の設定では、ちょうど1つのデータコレクタを含むことが必要です。
PLA_E_CREDENTIALS_REQUIRED 0x80300103	現在のデータコレクタセットプロパティをコミットするには、ユーザーアカウントが必要です。
PLA_E_DCS_NOT_RUNNING 0x80300104	データコレクタセットが実行していません。
PLA_E_CONFLICT_INCL_EXCL_API 0x80300105	APIの包含/除外リストで競合が検出されました。包含リストおよび除外リストの両方に同じAPIを指定しないでください。
PLA_E_NETWORK_EXE_NOT_VALID 0x80300106	指定した実行可能パスは、ネットワーク共有またはUNCパスを参照しています。
PLA_E_EXE_ALREADY_CONFIGURED 0x80300107	指定した実行可能パスは、すでにAPIトレーシングに対して設定されています。
PLA_E_EXE_PATH_NOT_VALID 0x80300108	指定した実行可能パスは存在していません。指定したパスが正しいことを確認します。
PLA_E_DC_ALREADY_EXISTS 0x80300109	データコレクタがすでに存在しています。
PLA_E_DCS_START_WAIT_TIMEOUT 0x8030010A	データコレクタセット開始通知の待機がタイムアウトしました。
PLA_E_DC_START_WAIT_TIMEOUT 0x8030010B	データコレクタセットの開始の待機がタイムアウトしました。
PLA_E_REPORT_WAIT_TIMEOUT 0x8030010C	レポート生成ツールの終了の待機がタイムアウトしました。

定数 / 値	説明
PLA_E_NO_DUPLICATES 0x8030010D	重複したアイテムは許可されていません。
PLA_E_EXE_FULL_PATH_REQUIRED 0x8030010E	トレースする実行可能ファイルを指定する場合、ファイル名だけではなく、実行可能ファイルへの完全パスを指定する必要があります。
PLA_E_INVALID_SESSION_NAME 0x8030010F	入力したセッション名が無効です。
PLA_E_PLA_CHANNEL_NOT_ENABLED 0x80300110	イベントログチャンネル Microsoft-Windows-Diagnosis-PLA/Operational でこの操作を実行できるようにする必要があります。
PLA_E_TASKSCHED_CHANNEL_NOT_ENABLED 0x80300111	イベントログチャンネル Microsoft-Windows-TaskScheduler でこの操作を実行できるようにする必要があります。
PLA_E_RULES_MANAGER_FAILED 0x80300112	Rules Manager の実行が失敗しました。
PLA_E_CABAPI_FAILURE 0x80300113	データを圧縮または抽出しようとしているときにエラーが発生しました。
FVE_E_LOCKED_VOLUME 0x80310000	このドライブは、BitLocker ドライブ暗号化によってロックされています。コントロールパネルからこのドライブをロック解除する必要があります。
FVE_E_NOT_ENCRYPTED 0x80310001	ドライブが暗号化されていません。
FVE_E_NO_TPM_BIOS 0x80310002	BIOS は、TPM と正しく通信しませんでした。BIOS アップグレード手順については、コンピュータの製造元に問い合わせてください。
FVE_E_NO_MBR_METRIC 0x80310003	BIOS はマスターブートレコード (MBR) と正しく通信しませんでした。BIOS アップグレード手順については、コンピュータの製造元に問い合わせてください。
FVE_E_NO_BOOTSECTOR_METRIC 0x80310004	必要な TPM 測定値が欠落しています。コンピュータにブート可能な CD または DVD がある場合は、それを取り外し、コンピュータを再起動して、BitLocker をもう一度オンにします。問題が解決しない場合は、マスターブートレコードが最新であることを確認してください。
FVE_E_NO_BOOTMGR_METRIC 0x80310005	このドライブのブートセクターが BitLocker ドライブ暗号化と互換性がありません。Windows 回復環境の Bootrec.exe ツールを使用して、ブートマネージャ (BOOTMGR) をアップデートまたは修復してください。
FVE_E_WRONG_BOOTMGR 0x80310006	このオペレーティングシステムのブートマネージャが BitLocker ドライブ暗号化と互換性がありません。Windows 回復環境の Bootrec.exe ツールを使用して、ブートマネージャ (BOOTMGR) をアップデートまたは修復してください。



定数 / 値	説明
FVE_E_SECURE_KEY_REQUIRED 0x80310007	この操作を実行するには、少なくとも1つのセキュアなキー保護機能が必要です。
FVE_E_NOT_ACTIVATED 0x80310008	BitLocker ドライブ暗号化はこのドライブ上で有効になっていません。BitLocker をオンにします。
FVE_E_ACTION_NOT_ALLOWED 0x80310009	BitLocker ドライブ暗号化がリクエストされたアクションを実行できません。この状態は、2つのリクエストが同時に発行された場合に生じる可能性があります。しばらく待ってから、もう一度アクションを試みてください。
FVE_E_AD_SCHEMA_NOT_INSTALLED 0x8031000A	Active Directory ドメインサービスフォレストには、BitLocker ドライブ暗号化または TPM 情報をホストするために必要な属性とクラスが含まれていません。ドメイン管理者に問い合わせ、必要な BitLocker Active Directory スキーマ拡張がインストールされていることを確認してください。
FVE_E_AD_INVALID_DATATYPE 0x8031000B	Active Directory から取得されたデータのタイプが予想外でした。BitLocker 回復情報が欠落しているか、破損している可能性があります。
FVE_E_AD_INVALID_DATASIZE 0x8031000C	Active Directory から取得されたデータのサイズが予想外でした。BitLocker 回復情報が欠落しているか、破損している可能性があります。
FVE_E_AD_NO_VALUES 0x8031000D	Active Directory から読み取られた属性には値が含まれていません。BitLocker 回復情報が欠落しているか、破損している可能性があります。
FVE_E_AD_ATTR_NOT_SET 0x8031000E	属性が設定されていませんでした。Active Directory オブジェクトに情報を書き込むことのできるドメインアカウントでログオンしていることを確認してください。
FVE_E_AD_GUID_NOT_FOUND 0x8031000F	Active Directory ドメインサービスで、指定の属性が見つかりませんでした。ドメイン管理者に問い合わせ、必要な BitLocker Active Directory スキーマ拡張がインストールされていることを確認してください。
FVE_E_BAD_INFORMATION 0x80310010	暗号化されたドライブの BitLocker メタデータが有効ではありません。ドライブを修復してアクセスを復元して試みます。
FVE_E_TOO_SMALL 0x80310011	十分な空き容量がないので、ドライブを暗号化できません。ドライブ上の不要なデータを削除して、空き容量を増やしてから再試行してください。
FVE_E_SYSTEM_VOLUME 0x80310012	システムブート情報を含んでいるので、ドライブを暗号化できません。ブート情報を含むシステムドライブとして使用するための個別のパーティションと、オペレーティングシステムドライブとして使用するための2番目のパーティションを作成し、オペレーティングシステムドライブを暗号化してください。
FVE_E_FAILED_WRONG_FS 0x80310013	ファイルシステムがサポートされていないので、ドライブを暗号化できません。
FVE_E_BAD_PARTITION_SIZE 0x80310014	ファイルシステムサイズが、パーティションテーブルのパーティションサイズを上回っています。このドライブは破損しているか、不正に変更されている可能性があります。BitLocker で使



定数 / 値	説明
FVE_E_NOT_SUPPORTED 0x80310015	用するには、パーティションを再フォーマットする必要があります。
FVE_E_BAD_DATA 0x80310016	このドライブを暗号化できません。 データは有効ではありません。
FVE_E_VOLUME_NOT_BOUND 0x80310017	指定したデータドライブは、現在のコンピュータで自動的にロック解除するように設定されておらず、自動的にロック解除できません。
FVE_E_TPM_NOT_OWNED 0x80310018	BitLocker ドライブ暗号化を使用する前に、TPM を初期化する必要があります。
FVE_E_NOT_DATA_VOLUME 0x80310019	試みた操作は、オペレーティングシステムドライブ上では実行できません。
FVE_E_AD_INSUFFICIENT_BUFFER 0x8031001A	関数に与えられたバッファが、返されたデータを含めるには不十分でした。バッファサイズを増やしてから、関数を再度実行してください。
FVE_E_CONV_READ 0x8031001B	ドライブの変換中に読み取り操作が失敗しました。ドライブは変換されませんでした。BitLocker を再度有効にしてください。
FVE_E_CONV_WRITE 0x8031001C	ドライブの変換中に書き込み操作が失敗しました。ドライブは変換されませんでした。BitLocker を再度有効にしてください。
FVE_E_KEY_REQUIRED 0x8031001D	1つまたは複数の BitLocker キー保護機能が必要です。このドライブ上の最後のキーは削除できません。
FVE_E_CLUSTERING_NOT_SUPPORTED 0x8031001E	BitLocker ドライブ暗号化では、クラスタ構成はサポートされていません。
FVE_E_VOLUME_BOUND_ALREADY 0x8031001F	指定したドライブはすでに、現在のコンピュータ上で自動的にロック解除するように設定されています。
FVE_E_OS_NOT_PROTECTED 0x80310020	オペレーティングシステムドライブは、BitLocker ドライブ暗号化で保護されていません。
FVE_E_PROTECTION_DISABLED 0x80310021	BitLocker ドライブ暗号化はこのドライブ上でサスペンドされています。このドライブに対して設定されているすべての BitLocker キー保護機能は、実質的に無効になっており、ドライブは非暗号化（クリア）キーを使用して自動的にロック解除されます。
FVE_E_RECOVERY_KEY_REQUIRED 0x80310022	BitLocker 保護が現在サスペンドされているので、ロックしようとしているドライブには、暗号化に使用できるキー保護機能が



定数 / 値

説明

	ありません。BitLocker を再度有効にして、このドライブをロックしてください。
FVE_E_FOREIGN_VOLUME 0x80310023	BitLocker では、TPM を使用してデータドライブを保護することができません。TPM 保護は、オペレーティングシステムドライブにのみ使用できます。
FVE_E_OVERLAPPED_UPDATE 0x80310024	別のプロセスによってアップデート用にロックされていたので、暗号化されたドライブの BitLocker メタデータをアップデートできません。このプロセスを再試行してください。
FVE_E_TPM_SRK_AUTH_NOT_ZERO 0x80310025	TPM のストレージルートキー (SRK) の認証データはゼロでなく、したがって BitLocker と互換性がありません。BitLocker で使用しようとする前に、TPM を初期化してください。
FVE_E_FAILED_SECTOR_SIZE 0x80310026	このセクターサイズでは、ドライブ暗号化アルゴリズムを使用できません。
FVE_E_FAILED_AUTHENTICATION 0x80310027	入力したキーではドライブをロック解除できません。正しいキーを入力したことを確認してから、再試行してください。
FVE_E_NOT_OS_VOLUME 0x80310028	指定したドライブがオペレーティングシステムドライブではありません。
FVE_E_AUTOUNLOCK_ENABLED 0x80310029	このコンピュータに関連した固定データドライブとリムーバブルデータドライブに対して自動ロック解除機能が無効になるまで、BitLocker ドライブ暗号化は、オペレーティングシステムドライブでオフにすることはできません。
FVE_E_WRONG_BOOTSECTOR 0x8031002A	システムパーティションブートセクターは、TPM 測定を実行していません。Windows 回復環境の Bootrec.exe ツールを使用して、ブートセクターをアップデートまたは修復してください。
FVE_E_WRONG_SYSTEM_FS 0x8031002B	BitLocker ドライブ暗号化のオペレーティングシステムドライブを暗号化するには、NTFS ファイルシステムでフォーマットする必要があります。ドライブを NTFS に変換してから、BitLocker をオンにしてください。
FVE_E_POLICY_PASSWORD_REQUIRED 0x8031002C	グループポリシー設定では、ドライブを暗号化する前に、回復パスワードが指定されている必要があります。
FVE_E_CANNOT_SET_FVEK_ENCRYPTED 0x8031002D	ドライブ暗号化のアルゴリズムとキーは、以前に暗号化されたドライブ上では設定できません。BitLocker ドライブ暗号化でこのドライブを暗号化するには、以前の暗号化を削除してから BitLocker をオンにしてください。
FVE_E_CANNOT_ENCRYPT_NO_KEY 0x8031002E	暗号化キーが使用できないので、BitLocker ドライブ暗号化は、指定したドライブを暗号化できません。このドライブを暗号化するには、キー保護機能を追加してください。
FVE_E_BOOTABLE_CDDVD 0x80310030	BitLocker ドライブ暗号化が、コンピュータ内でブート可能メディア (CD または DVD) を検出しました。メディアを取り出して、コンピュータを再起動してから、BitLocker を設定してください。



定数 / 値**説明**

FVE_E_PROTECTOR_EXISTS 0x80310031	このキー保護機能は追加できません。このドライブには、このタイプのキー保護機能は1つだけ許可されています。
FVE_E_RELATIVE_PATH 0x80310032	相対パスが指定されたので、回復パスワードファイルが見つかりませんでした。回復パスワードは、完全修飾パスに保存する必要があります。パスでは、コンピュータ上で設定された環境変数を使用できます。
FVE_E_PROTECTOR_NOT_FOUND 0x80310033	指定したキー保護機能がドライブ上に見つかりませんでした。別のキー保護機能を試してください。
FVE_E_INVALID_KEY_FORMAT 0x80310034	入力した回復キーは破損しており、ドライブへのアクセスに使用できません。ドライブへのアクセスを回復するには、回復パスワード、データ回復エージェント、バックアップバージョンの回復キーなどの代替の回復方法を使用する必要があります。
FVE_E_INVALID_PASSWORD_FORMAT 0x80310035	入力された回復パスワードの形式が無効です。BitLocker 回復パスワードは 48 桁です。回復パスワードが正しい形式であることを確認してから、再試行してください。
FVE_E_FIPS_RNG_CHECK_FAILED 0x80310036	ランダム数ジェネレータのチェックテストは失敗しました。
FVE_E_FIPS_PREVENTS_RECOVERY_PASSWORD 0x80310037	FIPS コンプライアンスを必要とするグループポリシー設定により、BitLocker ドライブ暗号化でローカルの回復パスワードを生成することも使用することもできません。FIPS 対応モードで操作する場合は、BitLocker 回復オプションを、USB ドライブに保存された回復キーにすることも、データ回復エージェントを通じた回復キーにすることもできます。
FVE_E_FIPS_PREVENTS_EXTERNAL_KEY_EXPORT 0x80310038	FIPS コンプライアンスを必要とするグループポリシー設定により、回復パスワードを Active Directory に保存できません。FIPS 対応モードで操作する場合は、BitLocker 回復オプションを、USB ドライブに保存された回復キーにすることも、データ回復エージェントを通じた回復キーにすることもできます。グループポリシー設定の構成をチェックしてください。
FVE_E_NOT_DECRYPTED 0x80310039	この操作を完了するために、ドライブを完全に復号化する必要があります。
FVE_E_INVALID_PROTECTOR_TYPE 0x8031003A	指定したキー保護機能は、この操作に使用できません。
FVE_E_NO_PROTECTORS_TO_TEST 0x8031003B	ハードウェアテストを実行するために、ドライブ上にはキー保護機能が存在していません。
FVE_E_KEYFILE_NOT_FOUND 0x8031003C	USB デバイス上に、BitLocker スタートアップキーも回復パスワードも見つかりませんでした。正しい USB デバイスがあり、USB デバイスがコンピュータのアクティブな USB ポートに差し込まれていることを確認して、コンピュータを再起動した後で再試行してください。問題が解決しない場合は、BIOS アップグレード手順について、コンピュータの製造元に問い合わせてください。



定数 / 値	説明
FVE_E_KEYFILE_INVALID 0x8031003D	入力された BitLocker スタートアップキーまたは回復パスワードファイルが破損しているか、無効です。正しいスタートアップキーまたは回復パスワードファイルであることを確認し、再試行してください。
FVE_E_KEYFILE_NO_VMK 0x8031003E	BitLocker 暗号化キーは、スタートアップキーまたは回復パスワードから取得できません。正しいスタートアップキーまたは回復パスワードであることを確認し、再試行してください。
FVE_E_TPM_DISABLED 0x8031003F	TPM が無効です。BitLocker ドライブ暗号化で使用する前に、TPM を有効にし、初期化し、TPM に有効な所有権を与える必要があります。
FVE_E_NOT_ALLOWED_IN_SAFE_MODE 0x80310040	このコンピュータは現在セーフモードで動作しているため、指定したドライブの BitLocker 構成は管理できません。セーフモードの間、BitLocker ドライブ暗号化は回復の目的にのみ使用できます。
FVE_E_TPM_INVALID_PCR 0x80310041	システムブート情報が変更されたか、PIN が正しく入力されなかったため、TPM はドライブをロック解除できませんでした。ドライブが不正に変更されておらず、システムブート情報に対する変更は信頼されたソースによって行われたことを確認します。ドライブが安全にアクセスできることを確認した後、BitLocker 回復コンソールを使用してドライブをロック解除し、続いて BitLocker をサスペンドおよび再開して、BitLocker がこのドライブに関連付けるシステムブート情報をアップデートします。
FVE_E_TPM_NO_VMK 0x80310042	BitLocker 暗号化キーを TPM から取得できません。
FVE_E_PIN_INVALID 0x80310043	BitLocker 暗号化キーを TPM および PIN から取得できません。
FVE_E_AUTH_INVALID_APPLICATION 0x80310044	BitLocker ドライブ暗号化が有効になったときから、ブートアプリケーションは変更しています。
FVE_E_AUTH_INVALID_CONFIG 0x80310045	BitLocker ドライブ暗号化が有効になったときから、ブート構成データ (BCD) 設定は変更しています。
FVE_E_FIPS_DISABLE_PROTECTION_NOT_ALLOWED 0x80310046	FIPS コンプライアンスを必要とするグループポリシー設定では、非暗号化キーの使用が禁じられているため、このデバイスで BitLocker はサスペンドされません。詳細については、ドメイン管理者に連絡してください。
FVE_E_FS_NOT_EXTENDED 0x80310047	ファイルシステムがドライブの最後まで拡張していないので、このデバイスは、BitLocker ドライブ暗号化で暗号化できません。このドライブを再パーティションしてから、再試行してください。
FVE_E_FIRMWARE_TYPE_NOT_SUPPORTED 0x80310048	BitLocker ドライブ暗号化は、オペレーティングシステムドライブ上では有効にできません。BIOS アップグレード手順については、コンピュータの製造元に問い合わせてください。
FVE_E_NO_LICENSE 0x80310049	このバージョンの Windows には、BitLocker ドライブ暗号化が含まれていません。BitLocker ドライブ暗号化を使用するには、オペレーティングシステムをアップグレードしてください。

定数 / 値	説明
FVE_E_NOT_ON_STACK 0x8031004A	重要な BitLocker システムファイルが欠落しているか破損しているため、BitLocker ドライブ暗号化を使用できません。Windows スタートアップ修復を使用して、コンピュータにこれらのファイルを復元します。
FVE_E_FS_MOUNTED 0x8031004B	ドライブの使用中にはドライブをロックできません。
FVE_E_TOKEN_NOT_IMPERSONATED 0x8031004C	現在のスレッドに関連したアクセストークンが偽造トークンではありません。
FVE_E_DRY_RUN_FAILED 0x8031004D	BitLocker 暗号化キーを取得できません。TPM が有効で、所有権が取得されていることを確認してください。このコンピュータに TPM が搭載されていない場合、USB ドライブが取り付けられ使用可能であることを確認します。
FVE_E_REBOOT_REQUIRED 0x8031004E	BitLocker ドライブ暗号化を続ける前に、コンピュータを再起動する必要があります。
FVE_E_DEBUGGER_ENABLED 0x8031004F	ブートデバッグが有効である間、ドライブ暗号化を行えません。bcdedit コマンドラインツールを使用して、ブートデバッグをオフにします。
FVE_E_RAW_ACCESS 0x80310050	BitLocker ドライブ暗号化が raw アクセスモードであるときに、アクションが行われませんでした。
FVE_E_RAW_BLOCKED 0x80310051	このドライブは現在使用中なので、このドライブで BitLocker ドライブ暗号化は raw アクセスモードに移れません。
FVE_E_BCD_APPLICATIONS_PATH_INCORRECT 0x80310052	BitLocker ドライブ暗号化の完全性保護アプリケーションについてブート構成データ (BCD) で指定したパスが正しくありません。BCD 設定を確認して修正し、再試行してください。
FVE_E_NOT_ALLOWED_IN_VERSION 0x80310053	BitLocker ドライブ暗号化は、コンピュータが事前インストールまたは回復環境で実行しているときに、限定的なプロビジョニングまたは回復の目的で使用できます。
FVE_E_NO_AUTO_UNLOCK_MASTER_KEY 0x80310054	自動ロック解除マスターキーはオペレーティングシステムドライブから使用できませんでした。
FVE_E_MOR_FAILED 0x80310055	システムファームウェアは、コンピュータが再起動したときに、システムメモリのクリアを有効にできませんでした。
FVE_E_HIDDEN_VOLUME 0x80310056	非表示のドライブを暗号化できません。
FVE_E_TRANSIENT_STATE 0x80310057	ドライブが過渡状態であったため、BitLocker 暗号化キーが無視されました。
FVE_E_PUBKEY_NOT_ALLOWED	このドライブ上では、公開鍵ベースの保護機能は許可されていません。



定数 / 値	説明
0x80310058	
FVE_E_VOLUME_HANDLE_OPEN	BitLocker ドライブ暗号化はこのドライブ上ですでに操作を実行しています。続行する前にすべての操作を完了してください。
0x80310059	
FVE_E_NO_FEATURE_LICENSE	このバージョンの Windows は、BitLocker ドライブ暗号化のこの機能をサポートしていません。この機能を使用するには、オペレーティングシステムをアップグレードしてください。
0x8031005A	
FVE_E_INVALID_STARTUP_OPTIONS	BitLocker スタートアップオプションのグループポリシー設定は競合しており、適用できません。詳細については、システム管理者に連絡してください。
0x8031005B	
FVE_E_POLICY_RECOVERY_PASSWORD_NOT_ALLOWED	グループポリシー設定は、回復パスワードの作成を許可していません。
0x8031005C	
FVE_E_POLICY_RECOVERY_PASSWORD_REQUIRED	グループポリシー設定は、回復パスワードの作成を必要としています。
0x8031005D	
FVE_E_POLICY_RECOVERY_KEY_NOT_ALLOWED	グループポリシー設定は、回復キーの作成を許可していません。
0x8031005E	
FVE_E_POLICY_RECOVERY_KEY_REQUIRED	グループポリシー設定は、回復キーの作成を必要としています。
0x8031005F	
FVE_E_POLICY_STARTUP_PIN_NOT_ALLOWED	グループポリシー設定は、スタートアップ時に PIN の使用を許可していません。別の BitLocker スタートアップオプションを選択してください。
0x80310060	
FVE_E_POLICY_STARTUP_PIN_REQUIRED	グループポリシー設定は、スタートアップ時に PIN の使用を必要としています。この BitLocker スタートアップオプションを選択してください。
0x80310061	
FVE_E_POLICY_STARTUP_KEY_NOT_ALLOWED	グループポリシー設定は、スタートアップキーの使用を許可していません。別の BitLocker スタートアップオプションを選択してください。
0x80310062	
FVE_E_POLICY_STARTUP_KEY_REQUIRED	グループポリシー設定は、スタートアップキーの使用を必要としています。この BitLocker スタートアップオプションを選択してください。
0x80310063	
FVE_E_POLICY_STARTUP_PIN_KEY_NOT_ALLOWED	グループポリシー設定は、スタートアップキーと PIN の使用を許可していません。別の BitLocker スタートアップオプションを選択してください。
0x80310064	
FVE_E_POLICY_STARTUP_PIN_KEY_REQUIRED	グループポリシー設定は、スタートアップキーと PIN の使用を必要としています。この BitLocker スタートアップオプションを選択してください。
0x80310065	
FVE_E_POLICY_STARTUP_TPM_NOT_ALLOWED	グループポリシー設定は、スタートアップ時に TPM のみの使用を許可していません。別の BitLocker スタートアップオプションを選択してください。
0x80310066	

定数 / 値	説明
FVE_E_POLICY_STARTUP_TPM_REQUIRED 0x80310067	グループポリシー設定は、スタートアップ時に TPM のみの使用を必要としています。この BitLocker スタートアップオプションを選択してください。
FVE_E_POLICY_INVALID_PIN_LENGTH 0x80310068	入力した PIN は、最小長または最大長の要件を満たしていません。
FVE_E_KEY_PROTECTOR_NOT_SUPPORTED 0x80310069	キー保護機能は、現在ドライブ上にある BitLocker ドライブ暗号化のバージョンではサポートされていません。ドライブをアップグレードして、キー保護機能を追加してください。
FVE_E_POLICY_PASSPHRASE_NOT_ALLOWED 0x8031006A	グループポリシー設定は、パスワードの作成を許可していません。
FVE_E_POLICY_PASSPHRASE_REQUIRED 0x8031006B	グループポリシー設定は、パスワードの作成を必要としています。
FVE_E_FIPS_PREVENTS_PASSPHRASE 0x8031006C	FIPS コンプライアンスを必要とするグループポリシー設定により、パスワードを生成することも使用することもできません。詳細については、ドメイン管理者に連絡してください。
FVE_E_OS_VOLUME_PASSPHRASE_NOT_ALLOWED 0x8031006D	パスワードをオペレーティングシステムドライブに追加できません。
FVE_E_INVALID_BITLOCKER_OID 0x8031006E	ドライブ上の BitLocker オブジェクト識別子 (OID) が、無効であるか、破損しているようです。manage-BDE を使用して、このドライブ上で OID をリセットしてください。
FVE_E_VOLUME_TOO_SMALL 0x8031006F	ドライブが非常に小さいため、BitLocker ドライブ暗号化を使用して保護できません。
FVE_E_DV_NOT_SUPPORTED_ON_FS 0x80310070	選択した検出ドライブタイプが、ドライブ上のファイルシステムと互換性がありません。BitLocker To Go 検出ドライブは、FAT 形式のドライブで作成する必要があります。
FVE_E_DV_NOT_ALLOWED_BY_GP 0x80310071	選択した検出ドライブタイプは、コンピュータのグループポリシー設定で許可されていません。BitLocker To Go で使用する検出ドライブの作成がグループポリシー設定で許可されていることを確認してください。
FVE_E_POLICY_USER_CERTIFICATE_NOT_ALLOWED 0x80310072	グループポリシー設定では、スマートカードなどのユーザー証明書を、BitLocker ドライブ暗号化とともに使用することを許可していません。
FVE_E_POLICY_USER_CERTIFICATE_REQUIRED 0x80310073	グループポリシー設定では、BitLocker ドライブ暗号化とともに使用するスマートカードなどの有効なユーザー証明書を保有することを必要としています。
FVE_E_POLICY_USER_CERT_MUST_BE_HW 0x80310074	グループポリシー設定では、BitLocker ドライブ暗号化とともにスマートカードベースのキー保護機能を使用することを必要としています。
FVE_E_POLICY_USER_CONFIGURE_FDV_AUTO_UNLOCK_NOT_ALLOWED	グループポリシー設定では、BitLocker 保護の固定データドライブが自動的にロック解除されることを許可していません。



定数 / 値	説明
0x80310075	
FVE_E_POLICY_USER_CONFIGURE_RDV_AUTO_UNLOCK_NOT_ALLOWED	グループポリシー設定では、BitLocker 保護のリムーバブルデータドライブが自動的にロック解除されることを許可していません。
0x80310076	
FVE_E_POLICY_USER_CONFIGURE_RDV_NOT_ALLOWED	グループポリシー設定では、リムーバブルデータドライブ上で BitLocker ドライブ暗号化を構成することを許可していません。
0x80310077	
FVE_E_POLICY_USER_ENABLE_RDV_NOT_ALLOWED	グループポリシー設定では、リムーバブルデータドライブ上で BitLocker ドライブ暗号化をオンにすることを許可していません。BitLocker をオンにする必要がある場合は、システム管理者に連絡してください。
0x80310078	
FVE_E_POLICY_USER_DISABLE_RDV_NOT_ALLOWED	グループポリシー設定では、リムーバブルデータドライブ上で BitLocker ドライブ暗号化をオフにすることを許可していません。BitLocker をオフにする必要がある場合は、システム管理者に連絡してください。
0x80310079	
FVE_E_POLICY_INVALID_PASSPHRASE_LENGTH	パスワードが、最小パスワード長の要件を満たしていません。デフォルトでは、パスワードには少なくとも 8 文字の長さが必要です。組織でのパスワード長の要件については、システム管理者に確認してください。
0x80310080	
FVE_E_POLICY_PASSPHRASE_TOO_SIMPLE	パスワードは、システム管理者が設定した複雑さの要件を満たしていません。大文字と小文字、数字、記号を追加してみてください。
0x80310081	
FVE_E_RECOVERY_PARTITION	このドライブは、Windows システムリカバリオプション用に予約されているので、暗号化できません。
0x80310082	
FVE_E_POLICY_CONFLICT_FDVK_OFF_AUK_ON	競合するグループポリシー設定のため、BitLocker ドライブ暗号化をこのドライブに適用できません。ユーザー回復オプションが無効になっているときに、自動的に固定データドライブをロック解除するように BitLocker を設定できません。キー検証が行われた後で BitLocker 保護された固定データドライブを自動的にロック解除する場合は、BitLocker を有効にする前に、システム管理者に設定の競合を解決してもらってください。
0x80310083	
FVE_E_POLICY_CONFLICT_RDVK_OFF_AUK_ON	競合するグループポリシー設定のため、BitLocker ドライブ暗号化をこのドライブに適用できません。ユーザー回復オプションが無効になっているときに、自動的にリムーバブルデータドライブをロック解除するように BitLocker を設定できません。キー検証が行われた後で BitLocker 保護されたリムーバブルデータドライブを自動的にロック解除する場合は、BitLocker を有効にする前に、システム管理者に設定の競合を解決してもらってください。
0x80310084	
FVE_E_NON_BITLOCKER_OID	指定した証明書の拡張キー使用法 (EKU) 属性では、BitLocker ドライブ暗号化に使用することを許可していません。BitLocker では、証明書に EKU 属性があることは必要ではありませんが、設定されている場合は、BitLocker に対して設定されたオブジェクト ID (OID) に一致する OID に設定されている必要があります。
0x80310085	
FVE_E_POLICY_PROHIBITS_SELFSIGNED	グループポリシー設定のため、現在の設定どおりに BitLocker ドライブ暗号化をこのドライブに適用することはできません。ドライブ暗号化に指定した証明書は自己署名証明書です。現在の
0x80310086	

	グループポリシー設定では、自己署名証明書の使用を許可していません。BitLocker を有効にしようとする前に、証明機関から新しい証明書を取得してください。
FVE_E_POLICY_CONFLICT_RO_AND_STARTUP_KEY_REQUIRE D 0x80310087	競合するグループポリシー設定のため、BitLocker 暗号化をこのドライブに適用できません。BitLocker で保護されていないドライブへの書き込みアクセスが拒否された場合、USB スタートアップキーの使用を要求できません。BitLocker を有効にしようとする前に、システム管理者にこれらのポリシーの競合を解決してもらってください。
FVE_E_CONV_RECOVERY_FAILED 0x80310088	オペレーティングシステムドライブ上に回復オプションについて競合するグループポリシー設定があるので、BitLocker ドライブ暗号化をこのドライブに適用できません。回復パスワードの生成が許可されていない場合、Active Directory ドメインサービスへの回復情報の保存は要求できません。BitLocker を有効にしようとする前に、システム管理者にこれらのポリシーの競合を解決してもらってください。
FVE_E_VIRTUALIZED_SPACE_TOO_BIG 0x80310089	リクエストされた仮想化サイズが大きすぎます。
FVE_E_POLICY_CONFLICT_OSV_RP_OFF_ADB_ON 0x80310090	オペレーティングシステムドライブ上に回復オプションについて競合するグループポリシー設定があるので、BitLocker ドライブ暗号化をこのドライブに適用できません。回復パスワードの生成が許可されていない場合、Active Directory ドメインサービスへの回復情報の保存は要求できません。BitLocker を有効にしようとする前に、システム管理者にこれらのポリシーの競合を解決してもらってください。
FVE_E_POLICY_CONFLICT_FD_V_RP_OFF_ADB_ON 0x80310091	固定データドライブ上に回復オプションについて競合するグループポリシー設定があるので、BitLocker ドライブ暗号化をこのドライブに適用できません。回復パスワードの生成が許可されていない場合、Active Directory ドメインサービスへの回復情報の保存は要求できません。BitLocker を有効にしようとする前に、システム管理者にこれらのポリシーの競合を解決してもらってください。
FVE_E_POLICY_CONFLICT_RDV_RP_OFF_ADB_ON 0x80310092	リムーバブルデータドライブ上に回復オプションについて競合するグループポリシー設定があるので、BitLocker ドライブ暗号化をこのドライブに適用できません。回復パスワードの生成が許可されていない場合、Active Directory ドメインサービスへの回復情報の保存は要求できません。BitLocker を有効にしようとする前に、システム管理者にこれらのポリシーの競合を解決してもらってください。
FVE_E_NON_BITLOCKER_KU 0x80310093	指定した証明書のキー使用法 (KU) 属性では、BitLocker ドライブ暗号化に使用することを許可していません。BitLocker では、証明書に KU 属性があることは必要ではありませんが、設定されている場合は、Key Encipherment か Key Agreement のどちらかに設定されている必要があります。
FVE_E_PRIVATEKEY_AUTH_FAILED 0x80310094	指定した証明書に関連した秘密キーを承認できません。秘密キーの承認が与えられていなかったか、与えられた承認が無効でした。
FVE_E_REMOVAL_OF_DRA_FAILED 0x80310095	データ回復エージェント証明書の削除は、証明書スナップインを使用して行う必要があります。

定数 / 値	説明
FVE_E_OPERATION_NOT_SUPPORTED_ON_VISTA_VOLUME 0x80310096	このドライブは、組織の識別子をサポートしていない Windows Vista および Windows Server 2008 に含まれていたバージョンの BitLocker ドライブ暗号化を使用して暗号化されました。このドライブの組織識別子を指定するには、「manage-bde -upgrade」コマンドを使用して、ドライブ暗号化を最新のバージョンにアップグレードしてください。
FVE_E_CANT_LOCK_AUTOUNLOCK_ENABLED_VOLUME 0x80310097	このコンピュータ上で自動的にロック解除されるので、ドライブをロックできません。このドライブをロックするには、自動ロック解除保護機能を削除してください。
FVE_E_FIPS_HASH_KDF_NOT_ALLOWED 0x80310098	ECC スマートカード用のデフォルトの BitLocker キー派生関数 SP800-56A は、お使いのスマートカードでサポートされていません。FIPS コンプライアンスを必要とするグループポリシー設定によって、BitLocker は、暗号化に他のキー派生関数を使用できません。FIPS の制限のある環境では、FIPS 対応のスマートカードを使用する必要があります。
FVE_E_ENH_PIN_INVALID 0x80310099	BitLocker 暗号化キーを TPM および拡張 PIN から取得できませんでした。数字だけから成る PIN を使用してみてください。
FVE_E_INVALID_PIN_CHARS 0x8031009A	リクエストされた TPM PIN に無効な文字が含まれています。
FVE_E_INVALID_DATUM_TYPE 0x8031009B	ドライブに保存された管理情報に不明なタイプが含まれていました。古いバージョンの Windows を使用している場合は、最新バージョンからドライブにアクセスしてみてください。
FVE_E_EFI_ONLY 0x8031009C	この機能は、EFI システムでのみサポートされています。
FVE_E_MULTIPLE_NKP_CERTS 0x8031009D	複数のネットワークキー保護機能証明書がシステム上で見つかりました。
FVE_E_REMOVAL_OF_NKP_FAILED 0x8031009E	ネットワークキー保護機能証明書の削除は、証明書スナップインを使用して行う必要があります。
FVE_E_INVALID_NKP_CERT 0x8031009F	無効な証明書が、ネットワークキー保護機能証明書ストアに見つかりました。
FVE_E_NO_EXISTING_PIN 0x803100A0	このドライブは PIN で保護されていません。
FVE_E_PROTECTOR_CHANGE_PIN_MISMATCH 0x803100A1	正しい現在の PIN を入力してください。
FVE_E_PROTECTOR_CHANGE_BY_STD_USER_DISALLOWED 0x803100A2	PIN またはパスワードを変更するには、管理者アカウントでログオンする必要があります。リンクをクリックして、管理者として PIN またはパスワードをリセットします。
FVE_E_PROTECTOR_CHANGE_MAX_PIN_CHANGE_ATTEMPTS_REACHED	BitLocker は、非常に多くのリクエストが失敗した後、PIN およびパスワードの変更を無効にしました。リンクをクリックして、管理者として PIN またはパスワードをリセットします。

定数 / 値	説明
0x803100A3	
FVE_E_POLICY_PASSPHRASE_REQUIRES_ASCII	
0x803100A4	システム管理者が、パスワードには印刷可能な ASCII 文字だけが含まれるように要求しています。これには、アクセントのない文字 (A ~ Z、a ~ z)、数字 (0 ~ 9)、空白、演算符号、一般的な句読点、区切り文字、および記号 # \$ & @ ^ _ ~ が含まれません。
FVE_E_FULL_ENCRYPTION_NOT_ALLOWED_ON_TP_STORAGE	BitLocker ドライブ暗号化は、シンプロビジョニングされたストレージでの使用済み領域のみの暗号化だけをサポートしています。
0x803100A5	
FVE_E_WIPE_NOT_ALLOWED_ON_TP_STORAGE	BitLocker ドライブ暗号化は、シンプロビジョニングされたストレージでの空き領域のワイピングをサポートしていません。
0x803100A6	
FVE_E_KEY_LENGTH_NOT_SUPPORTED_BY_EDRIVE	必要な認証キー長がドライブでサポートされていません。
0x803100A7	
FVE_E_NO_EXISTING_PASSPHRASE	このドライブはパスワードで保護されていません。
0x803100A8	
FVE_E_PROTECTOR_CHANGE_PASSPHRASE_MISMATCH	正しい現在のパスワードを入力してください。
0x803100A9	
FVE_E_PASSPHRASE_TOO_LONG	パスワードは 256 文字を超えられません。
0x803100AA	
FVE_E_NO_PASSPHRASE_WITH_TPM	TPM 保護機能がドライブ上に存在しているので、パスワードキー保護機能を追加できません。
0x803100AB	
FVE_E_NO_TPM_WITH_PASSPHRASE	パスワード保護機能がドライブ上に存在しているので、TPM キー保護機能を追加できません。
0x803100AC	
FVE_E_NOT_ALLOWED_ON_CSV_STACK	このコマンドは、指定の CSV ボリュームのコーディネータノードからのみ実行できます。
0x803100AD	
FVE_E_NOT_ALLOWED_ON_CLUSTER	このコマンドは、ボリュームがクラスタの一部である場合、そのボリューム上で実行できません。
0x803100AE	
FVE_E_EDRIVE_NO_FAILOVER_TO_SW	BitLocker は、グループポリシー設定のため、BitLocker ソフトウェア暗号化の使用に復帰しませんでした。
0x803100AF	
FVE_E_EDRIVE_BAND_IN_USE	ドライブのハードウェア暗号化機能がすでに使用されているので、BitLocker でドライブを管理できません。
0x803100B0	
FVE_E_EDRIVE_DISALLOWED_BY_GP	グループポリシー設定では、ハードウェアベースの暗号化の使用を許可していません。
0x803100B1	



定数 / 値	説明
FVE_E_EDRIVE_INCOMPATIBLE_VOLUME 0x803100B2	指定したドライブは、ハードウェアベースの暗号化をサポートしていません。
FVE_E_NOT_ALLOWED_TO_UPGRADE_WHILE_CONVERTING 0x803100B3	ディスクの暗号化または復号化中は、BitLocker をアップグレードできません。
FVE_E_EDRIVE_DV_NOT_SUPPORTED 0x803100B4	検出ボリュームは、ハードウェア暗号化を使用したボリュームにはサポートされていません。
FVE_E_NO_PREBOOT_KEYBOARD_DETECTED 0x803100B5	プレブートキーボードが検出されませんでした。ユーザーは、ボリュームをロック解除するために必要な入力を提供できない場合があります。
FVE_E_NO_PREBOOT_KEYBOARD_OR_WINRE_DETECTED 0x803100B6	Windows 回復環境上のプレブートキーボードが検出されませんでした。ユーザーは、ボリュームをロック解除するために必要な入力を提供できない場合があります。
FVE_E_POLICY_REQUIRES_STARTUP_PIN_ON_TOUCH_DEVICE 0x803100B7	グループポリシー設定では、スタートアップ PIN の作成が必要ですが、このデバイス上ではプレブートキーボードを使用できません。ユーザーは、ボリュームをロック解除するために必要な入力を提供できない場合があります。
FVE_E_POLICY_REQUIRES_RECOVERY_PASSWORD_ON_TOUCH_DEVICE 0x803100B8	グループポリシー設定は、回復パスワードの作成を必要としています。プレブートキーボードと Windows 回復環境の両方がこのデバイス上で使用できません。ユーザーは、ボリュームをロック解除するために必要な入力を提供できない場合があります。
FVE_E_WIPE_CANCEL_NOT_APPLICABLE 0x803100B9	空き領域のワイプが現在行われていません。
FVE_E_SECUREBOOT_DISABLED 0x803100BA	セキュアブートが無効になっているので、BitLocker はプラットフォームの完全性にセキュアブートを使用できません。
FVE_E_SECUREBOOT_CONFIGURATION_INVALID 0x803100BB	セキュアブート構成が BitLocker の要件を満たしていないので、BitLocker はプラットフォームの完全性にセキュアブートを使用できません。
FVE_E_EDRIVE_DRY_RUN_FAILED 0x803100BC	お使いのコンピュータは、BitLocker ハードウェアベースの暗号化をサポートしていません。ファームウェアのアップデートについてコンピュータの製造元に確認してください。
FVE_E_SHADOW_COPY_PRESENT 0x803100BD	ボリュームシャドウコピーが含まれているため、ボリューム上で BitLocker を有効にできません。ボリュームを暗号化する前に、ボリュームシャドウコピーをすべて削除してください。
FVE_E_POLICY_INVALID_ENHANCED_BCD_SETTINGS 0x803100BE	拡張ブート構成データのグループポリシー設定に無効なデータが含まれているので、BitLocker ドライブ暗号化をこのドライブに適用できません。BitLocker を有効にしようとする前に、システム管理者にこの無効な構成を解決してもらってください。
FVE_E_EDRIVE_INCOMPATIBLE_FIRMWARE 0x803100BF	この PC のファームウェアが、ハードウェア暗号化をサポートできません。

定数 / 値	説明
FVE_E_PROTECTOR_CHANGE_MAX_PASSPHRASE_CHANGE_ATTEMPTS_REACHED 0x803100C0	BitLocker は、非常に多くのリクエストが失敗した後、パスワードの変更を無効にしました。リンクをクリックして、管理者としてパスワードをリセットします。
FVE_E_PASSPHRASE_PROTECTOR_CHANGE_BY_STD_USER_DISALLOWED 0x803100C1	パスワードを変更するには、管理者アカウントでログオンする必要があります。リンクをクリックして、管理者としてパスワードをリセットします。
FVE_E_LIVEID_ACCOUNT_SUSPENDED 0x803100C2	指定した Microsoft アカウントがサスペンドであるため、BitLocker は回復パスワードを保存できません。
FVE_E_LIVEID_ACCOUNT_BLOCKED 0x803100C3	指定した Microsoft アカウントがブロックされているため、BitLocker は回復パスワードを保存できません。
FVE_E_NOT_PROVISIONED_ON_ALL_VOLUMES 0x803100C4	この PC は、デバイスの暗号化をサポートするようにプロビジョニングされていません。デバイス暗号化ポリシーに準拠するように、すべてのボリュームで BitLocker を有効にしてください。
FVE_E_DE_FIXED_DATA_NOT_SUPPORTED 0x803100C5	非暗号化固定データボリュームが存在しているので、この PC はデバイス暗号化をサポートできません。
FVE_E_DE_HARDWARE_NOT_COMPLIANT 0x803100C6	この PC はデバイス暗号化をサポートするためのハードウェア要件を満たしていません。
FVE_E_DE_WINRE_NOT_CONFIGURED 0x803100C7	WinRE が正しく設定されていないので、この PC はデバイス暗号化をサポートできません。
FVE_E_DE_PROTECTION_SUSPENDED 0x803100C8	ボリューム上で保護は有効ですが、サスペンドになっています。これは、アップデートがシステムに適用されているために起きた可能性があります。再起動後に再試行してください。
FVE_E_DE_OS_VOLUME_NOT_PROTECTED 0x803100C9	この PC は、デバイスの暗号化をサポートするようにプロビジョニングされていません。
FVE_E_DE_DEVICE_LOCKEDOUT 0x803100CA	何度も間違ったパスワードが試みられたため、デバイスロックがトリガされました。
FVE_E_DE_PROTECTION_NOT_YET_ENABLED 0x803100CB	ボリュームで保護が有効になっていません。保護を有効にするには接続済みのアカウントが必要です。すでに接続したアカウントがあるときに、このエラーが表示される場合は、詳細についてイベントログを参照してください。
FVE_E_INVALID_PIN_CHARS_DETAILED 0x803100CC	PIN には、0 から 9 の数字しか含まれません。
FVE_E_DEVICE_LOCKOUT_COUNTER_UNAVAILABLE 0x803100CD	お使いの PC 上でカウンタを使用できないので、BitLocker はハードウェアプレイ保護を使用できません。



定数 / 値	説明
FVE_E_DEVICELOCKOUT_COUNTER_MISMATCH 0x803100CE	カウンタの不一致のために、デバイスロックアウト状態の検証が失敗しました。
FVE_E_BUFFER_TOO_LARGE 0x803100CF	入力バッファが大きすぎます。



用語集

アクティブ化 – アクティブ化は、コンピュータが EE Server/VE Server に登録され、少なくともポリシーの初期セットを受け取ったときに実行されます。

Active Directory (AD) : Windows ドメインネットワーク用に Microsoft が開発したディレクトリサービスです。

Advanced Authentication – Advanced Authentication 製品は、指紋、スマートカード、非接触型スマートカードリーダーが完全に統合されたオプションを備えています。Advanced Authentication は、これらの複数のハードウェア認証方法の管理を支援し、自己暗号化ドライブ、SSO でのログインをサポートし、ユーザーの資格情報およびパスワードを管理します。さらに、Advanced Authentication は、PC だけでなく、ウェブサイト、SaaS、またはアプリケーションへのアクセスにも使用できます。ユーザーが一度その資格情報を登録すると、Advanced Authentication によって、デバイスにログオンしたりパスワードの変更を行うときにこれらの資格情報が使用できるようになります。

Advanced Threat Protection – Advanced Threat Protection 製品は、アルゴリズム的科学および機械学習を使用して、既知および不明のサイバー攻撃が実行されたり、エンドポイントを攻撃することを識別、分類、および防止する、次世代のアンチウイルス対策です。

BitLocker Manager – Windows BitLocker は、データファイルとオペレーティングシステムファイルの両方を暗号化することによって Windows コンピュータの保護を助けるように設計されています。BitLocker 展開のセキュリティを高め、所有コストを単純化および軽減するために、デルでは、多くのセキュリティ問題に対処する単一の一元管理コンソールを用意しており、BitLocker 以外の他のプラットフォーム（物理、仮想、クラウドベースにかかわらず）にわたって暗号を管理するための統合アプローチを提供しています。BitLocker Manager は、オペレーティングシステム、固定ドライブ、および BitLocker To Go 用の BitLocker 暗号化をサポートしています。BitLocker Manager を使用すれば、BitLocker を既存の暗号化ニーズにシームレスに統合でき、セキュリティとコンプライアンスを合理化しながらわずかな作業で BitLocker を管理できます。BitLocker Manager は、キーの復元、ポリシーの管理および適用、自動 TPM 管理、FIPS コンプライアンス、コンプライアンスレポートに関する統合管理を提供します。

キャッシュされた資格情報 : キャッシュされた資格情報とは、ユーザーが Active Directory で正しく認証されると PBA データベースに追加される資格情報のことです。ユーザーに関するこの情報は、ユーザーが Active Directory に接続できないとき（例えば、ノートブックを自宅に持ち帰るなど）でもログインできるように保持されます。

Cloud Edition – Cloud Edition は、Dropbox、Dropbox Business、Box、OneDrive などのパブリッククラウドサービスに保存されたデータを保護します。Cloud Edition は、ファイルがクラウドへ、またはクラウドから移動するときに、データを透過的に保護します。Cloud Edition では次の操作が可能です。 - ファイルアクティビティ、同期済みファイル、ファイルにアクセスしたユーザー、場所、および日時、コンプライアンスレポートに関する監査とレポート - 許可されたファイル共有に関する電子メールアドレスのホワイトリストの適用 - クラウドサービス、フォルダ、アプリケーションへのアクセスに関するポリシーの適用 - キーの有効期間とポーリング間隔の管理 - クラウドサービスプロバイダの既知の IP アドレスを監視し、それらをアプリケーションプロセスと照合し、暗号化キー、データの復元、ポリシー、およびフォレンジックを一元的に管理する管理者の機能 Cloud Edition を使用すると、個人所有および会社所有のコンピュータのほか、iOS および Android を実行しているデバイス上でデータを暗号化できます。

共有暗号化 - 共有キーを使用すると、すべての管理対象ユーザーが、暗号化されたファイルが作成されたデバイス上でそれらのファイルにアクセスできるようになります。

非アクティブ化 – 非アクティブ化は、リモート管理コンソールで SED 管理が False になるときに実行されます。コンピュータが非アクティブ化されると、PBA データベースが削除され、キャッシュされたユーザーの記録がなくなります。

Encryption クライアント – Encryption クライアントは、エンドポイントがネットワークに接続されている、ネットワークから切断されている、または盗難されているかどうかに関わらず、セキュリティポリシーを適用するオンデバイスコンポーネントです。Encryption クライアントは、エンドポイントに信頼できるコンピュータ環境を作成しながら、デバイスのオペレーティングシステム上のレイヤとして動作し、一貫して適用される認証、暗号、および承認を提供して機密情報を最大限に保護します。



暗号化キー - ほとんどの場合、Encryption クライアントはユーザーキーに加え 2 つの別の暗号化キーを使用します。しかし、すべての SDE ポリシーと Secure Windows Credentials ポリシーが SDE キーを使用するという例外があります。Windows ページングファイルの暗号化ポリシーと Windows 休止状態ファイルのセキュア化ポリシーは、独自のキーである General Purpose Key (GPK) を使用します。共有キーを使用すると、すべての管理対象ユーザーが、暗号化されたファイルが作成されたデバイス上でそれらのファイルにアクセスできるようになります。ユーザーキーでは、ファイルを作成したユーザーのみが、ファイルが作成されたデバイス上のみでそれらのファイルにアクセスすることができます。ユーザーローミングキーでは、ファイルを作成したユーザーのみが、任意の Shielded Windows (または Mac) デバイス上でそれらのファイルにアクセスできます。

暗号化スweep - 暗号化スweepは、含まれるファイルが適切な暗号化状態になるように、Shielded のエンドポイントで暗号化するフォルダをスキャンするプロセスです。通常のファイル作成および名前変更操作では、暗号化スweepはトリガされません。次のように、暗号化スweepが行われる可能性のある場合と、その結果生じるスweep時間に影響を与える可能性のあるものを理解することが重要です。暗号化スweepは、暗号化を有効にしたポリシーの最初の受信時に行われます。これは、ポリシーで暗号化を有効にしている場合にアクティブ化直後に行われることがあります。- ログオン時にワークステーションをスキャン ポリシーを有効にしている場合、暗号化用に指定されたフォルダはユーザーログオンごとにスweepされます。- その後、特定のポリシー変更があると、スweepが再度トリガされる場合があります。暗号化フォルダ、暗号化アルゴリズム、暗号化キーの使用（共通ユーザー）の定義に関連したポリシー変更はスweepをトリガします。さらに、暗号化の有効化と無効化を切り替えると、暗号化スweepがトリガされます。

外部ユーザー - 組織のドメインアドレスに属さないユーザーです。同様に、内部ユーザーは、組織のドメインアドレスに属しているユーザーです。

マシンキー - サーバーに暗号化がインストールされている場合、マシンキーにより、サーバーのファイル暗号化キーとポリシーキーが保護されます。マシンキーは、DDP Server 上に保存されます。新しいサーバーは、アクティブ化中に DDP Server と証明書を交換し、それ以降の認証イベントでその証明書を使用します。

ワンタイムパスワード (OTP) - ワンタイムパスワードは、一度しか使用できないパスワードで、有効時間が限定されています。OTP には、TPM が存在し、有効化され、所有されている必要があります。OTP を有効にするには、Security Console および Security Tools Mobile アプリを使用して、モバイルデバイスをコンピュータとペアリングします。Security Tools Mobile アプリは、Windows ログオン画面でのコンピュータへのログオンに使用されるパスワードをモバイルデバイス上に生成します。コンピュータへのログオンに OTP を使用しなかった場合は、ポリシーに基づき、パスワードの期限が切れたときに、またはパスワードを忘れたときに、OTP 機能を使用してコンピュータへのアクセスを回復することができます。OTP 機能は、認証またはリカバリのいずれかに使用できますが、両方には使用できません。生成されたパスワードが一度しか使用できず、短時間で失効するため、OTP セキュリティは他の認証手法よりも優れています。

起動前認証 (PBA) - 起動前認証 (PBA) は、BIOS または起動ファームウェアの拡張機能としての役割を果たし、信頼された認証レイヤとして、オペレーティングシステム外部のセキュアな耐タンパ環境を保証します。PBA は、ユーザーが正しい資格情報を持っていることを立証するまで、オペレーティングシステムなどをハードディスクから読み取ることができないようにします。

SED Management - SED Management は、自己暗号化ドライブを安全に管理するためのプラットフォームを提供します。SED は独自の暗号化を備えていますが、その暗号化および使用できるポリシーを管理するためのプラットフォームがありません。SED Management は、データを効果的に保護および管理できる、一元的で拡張可能な管理コンポーネントです。SED Management は、企業の管理の迅速化および簡略化を可能にします。

Server ユーザー - 暗号化キーの操作とポリシーアップデートのために、Dell Data Protection | Server Encryption によって作成される仮想ユーザーアカウントです。このユーザーアカウントは、コンピュータ上、またはドメイン内の他のどのユーザーアカウントとも一致しません。また、このアカウントには、実際に使用できるユーザー名とパスワードはありません。リモート管理コンソールでは、このアカウントに一意的 UCID 値が割り当てられます。

System Data Encryption (SDE) - SDE は、オペレーティングシステムとプログラムファイルを暗号化するように設計されています。この目的を達成するために、SDE はオペレーティングシステムが起動している間にそのキーを開くことができます。これは、攻撃者によるオペレーティングシステムの改ざん、またはオフライン攻撃を防ぐためのものです。ユーザーデータは SDE 対象外です。共通キー暗号化およびユーザーキー暗号化は、暗号化キーのロック解除にユーザーパスワードを必要とするため、機密ユーザーデータを対象にしています。SDE ポリシーは、起動プロセスを開始するためにオペレーティングシステムが必要とするファイルを暗号化しません。SDE ポリシーでは、起動前認証は必要なく、マスターブートレコードへの干渉は一切行われません。コンピュータの起動時、ユーザーログイン前に暗号化されたファイルが使用可能になります（パッチ管理、SMS、バックアップ、およびリカバリツールの有効化のため）。SDE 暗号化を無効にすると、SDE 暗号化ルールなどの他の SDE ポリシーとは無関係に、関連するユーザーのすべての SDE 暗号化ファイルおよびディレクトリの自動復号化がトリガされます。

Threat Protection – Threat Protection 製品は、企業のコンピュータをセキュリティの脅威から保護する一元的に管理されたポリシーに基づきます。Threat Protection は次の要素から構成されます。 - マルウェア対策 - アクセス時、またはポリシーで定義されたスケジュールに基づいて、ウイルス、スパイウェア、迷惑プログラム、および他の脅威を自動でスキャンしてチェックします。 - クライアントファイアウォール - コンピュータと、ネットワークおよびインターネット上のリソースとの通信をモニタし、潜在的に悪意のある通信を中断します。 - ウェブプロテクション - オンラインのブラウジングおよび検索中に、ウェブサイトの安全評価とレポートに基づいて、安全でないウェブサイトおよびそれらのウェブサイトからのダウンロードをブロックします。

Trusted Platform Module (TPM) – TPM は、セキュアストレージ、測定、および構成証明という3つの主要機能を備えたセキュリティチップです。Encryption クライアントは、セキュアなストレージ機能のために TPM を使用します。TPM はまた、ソフトウェア資格情報コンテナ用に暗号化されたコンテナも提供できます。TPM は、BitLocker Manager およびワンタイムパスワード機能の使用にも必須です。

ユーザー暗号化 – ユーザーキーを使用すると、ファイルを作成したユーザーのみが、ファイルが作成されたデバイス上でのみファイルにアクセスできるようになります。Dell Data Protection | Server Encryption を実行しているときは、ユーザー暗号化が共有暗号化に変換されます。外部メディアデバイスの場合には例外があり、DDP|SE がインストールされているサーバーに外部メディアデバイスが挿入されると、ファイルはユーザーローミングキーで暗号化されます。

